

ご ばり い せき
後 張 遺 跡 V
— E 地点の調査 —

2 0 1 1

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

本庄市の交通の要衝である関越自動車道・本庄一児玉インターチェンジの周辺は、古くから開発が進み、大規模な集落遺跡が営まれていることで知られています。ここに報告する後張遺跡も、今までに四次にわたる発掘調査が実施されており、周辺にも大規模な集落遺跡が展開していることも確認されています。これらの発掘調査によって、本遺跡の周辺は古墳時代の初期に突然集落が営まれ始め、東海西部に起源をもつ土器や近畿・北陸方面の土器が出土するところから、他地域からの入植を含む急速な開発があったことが推定されています。現在は水田地帯が広がるこの区域も、開墾以前には疎林が広がっており、最初に開墾を行った人々は、林地を切り拓き、灌漑や排水を行いながら、大変な労力を費やして水田を開いたことでしょう。このように私たちにとっては、あたりまえの郊外の風景も、先人たちの営為の結果であり、私たちの美しい風土は、先人たちのたゆまぬ努力の積み重ねによって少しずつ形成されてきたものであるとあってよいでしょう。

この後張遺跡 E 地点で発掘調査された埋蔵文化財も、このような風土の形成過程にあった頃の先人たちの営みの一端を今日に蘇らせるための基礎資料となるものです。調査報告書という形で永く後世に伝えることになったこの発掘の記録は、小さなひとつの資料に過ぎませんが、記録を積み重ねることによって、私たちを育んでくれた環境と歴史への理解が徐々に深まっていくことでしょう。ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、有限会社さかえ観光および有限会社中原企画をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。この調査報告書が、この地域の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成 23 年 3 月 2 日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木孝彦

例 言

- ・本書は、埼玉県本庄市児玉町下浅見字後張 148 番地 4 ほかの所在する後張遺跡（E 地点）の発掘調査報告書である。
- ・後張遺跡では、関越自動車道建設に先立ち発掘調査が行われた A・B 地点の成果が、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって『後張遺跡Ⅰ』・『後張遺跡Ⅱ』として刊行されている。民間開発に伴い記録保存を目的として C～E 地点が埼玉県児玉町遺跡調査会によって発掘調査が行なわれ、C 地点の成果が埼玉県児玉町遺跡調査会によって『後張遺跡Ⅲ』として、D 地点の成果が埼玉県本庄市遺跡調査会によって『後張遺跡Ⅳ』として既に刊行されている。そのため、本書は後張遺跡の 5 冊目の報告書となることから、『後張遺跡Ⅴ』とした。
- ・発掘調査地点は、既に発掘調査が行われた地点が A～D 地点となっていることから、それに倣って E 地点と呼称した。E 地点の発掘調査面積は、2,234㎡である。
- ・発掘調査は、ホテル建設計画に伴い記録保存を目的として、平成 2 年度に児玉町教育委員会の指導に基づいて児玉町遺跡調査会が委託を受けて実施したものであり、発掘調査および報告書の刊行に要した経費は、有限会社さかえ観光および有限会社中原企画の委託金である。
- ・発掘調査の担当には、鈴木徳雄（児玉町教育委員会社会教育課:当時）および小宮山克己（児玉町遺跡調査会:当時）があたり、小宮山が調査員として現地で専従した。
- ・整理事業の一部および報告書作成作業は、本庄市遺跡調査会が株式会社測研ほんじょう事務所に委託して実施した。
- ・本書の執筆は、第 1 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 2 章～第 4 章は高林真人（株式会社測研）が行い、編集は高林が行なった。
- ・本書に掲載した出土遺物、遺構等の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料も含めて本庄市教育委員会で保管している。
- ・現地発掘調査および本書作成にあたって、下記の方々や機関より御助言・御協力を賜った。ここに記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
池田敏宏、大家道則、尾内俊彦、駒宮史郎、坂本和俊、利根川章彦、千装 智、長滝歳康、平田重之、
矢内 勲、山口逸弘、埼玉県教育局生涯学習文化財課、児玉都市文化財担当者会、東海大学考古学研究会

凡 例

- ・遺構番号は、E 地点での発掘調査時に便宜的に 1 号から付けたが、『後張遺跡Ⅳ』の発掘調査報告書に倣い後張遺跡全体の続き番号に変更して正式番号とした。なお、新旧遺構番号の対比は別表の通りである。
- ・グリッドの設定は、日本測地系の国家座標に一致させ、一辺 4 m 方眼を単位とした。座標値（ $X = 24,256.00$ $Y = -59852.00$ ）を起点とし、西へ A・B・・・G、北へ 1・2・・・18 と番号を付した。
- ・河道跡では、遺物の出土位置を細分して取り上げるためグリッドを 50cm 方眼に 64 分割し小グリッドとした。小グリッドは、グリッドの北西隅部を起点として南北方向に北からア・イ・・・ク、東西方向に西から a・b・・・h とし、表記は「A-1アa」とした。
- ・本書第 3 図中に記載した X Y 座標値は、測量法の改正に伴い発掘調査時の日本測地系の座標値を世界測地系に変換した数値である。なお、発掘調査時の日本測地系の座標値を括弧内に記載している。また、巻末の抄録における北緯東経の数値も、世界測地系に変換したものである。
- ・遺構平面図中に記した+は、各グリッドからの距離を示している。各グリッドの南東端部を原点（E 0、S 0）とし、北へ 1 m 行くごとに N 1～3、西へ 1 m 行くごとに W 1～3 と表記した。

- ・遺構挿図中に使用した方位記号は、すべて座標北を示している。
- ・土層断面図・エレベーション図に示した数値（L＝）は標高を示す。
- ・出土遺物の接合・注記は、竪穴住居跡・井戸跡・溝跡は全ての遺物で接合作業を行い、実測するため抽出したもののみに注記を行なった。河道跡は出土遺物点数が多かったため、接合作業は番号を付して点上げを行なって位置情報を備えた遺物のみ行い、注記は実測するため抽出したもののみに行なった。注記をしなかった遺物は袋に戻し元の荷札で閉じて保管している。
- ・出土遺物の注記には、遺跡番号（54－275）・遺構名（調査時の遺構番号）またはグリッド・出土層位などを記入した。
- ・本書で使用した略号は次の通りである。

S I＝竪穴住居跡	S B＝掘立柱建物跡	S E＝井戸跡	S K＝土坑	S D＝溝跡
P＝小穴（ピット）	s k＝遺構内土坑	p＝遺構内ピット		
- ・遺構の実測図は、調査区位置図を1/3000、周辺遺跡図を1/25000、遺構配置図を1/300、河道跡平面図を1/200、3～5・7～9号溝跡平面図を1/150、1・2号溝跡平面図と3～5・7～9号溝跡断面図を1/100、河道跡内側平面図・河道跡断面図・小穴平面図を1/80、竪穴住居跡と井戸跡の平・断面図を1/60、1・2号溝跡断面図、6号溝跡平・断面図を1/50、住居跡内遺構の平・断面図を1/30で掲載した。
- ・遺物実測図は、1/4を基本とし、土製品・石製模造品・勾玉を1/2、ガラス小玉・白玉を実寸で掲載した。
- ・遺物実測図で反転実測を行なったもの、欠損しているものは、外形線の中心線付近で間を空けるようにしている。
- ・本報告書での法量表記は、（ ）を推定値、[]を残存値とした。
- ・遺物観察表における遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1998年度版）』を使用した。
- ・遺物観察表における出土位置は、床面から5cmまでのものを床面とし、それよりも高い位置は覆土とした。
- ・遺物写真は、実測図とほぼ同じ縮尺となるように掲載した。

新旧遺構番号対応表

旧番号	新番号	旧番号	新番号
1号住居跡	第240号住居跡	1号溝跡	河道跡
2号住居跡	第241号住居跡	2号溝跡	E－1号溝跡
3号住居跡	第242号住居跡	3号溝跡	E－2号溝跡
4号住居跡	第243号住居跡	4号溝跡	E－3号溝跡
5号住居跡	第244号住居跡	5号溝跡	E－4号溝跡
6号住居跡	第245号住居跡	6号溝跡	E－5号溝跡
1号井戸跡	第11号井戸跡	7号溝跡	E－6号溝跡
2号井戸跡	第12号井戸跡	8号溝跡	E－7号溝跡
3号井戸跡	第13号井戸跡	9号溝跡	E－8号溝跡
4号井戸跡	第14号井戸跡	10号溝跡	E－9号溝跡

後張遺跡E地点発掘調査組織

児玉町遺跡調査会（平成2年度：抜粋）

会 長	野口敏雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員
	日向國俊	児玉町文化財保護審議委員
	中兼久偉	児玉町文化財保護審議委員
	吉川 豊	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	立花 勲	児玉町教育委員会社会教育課課長補佐
	前川由雄	〃 社会教育係長
	金子幸弘	〃 社会教育係
	恋河内昭彦	〃 社会教育係
	徳山寿樹	〃 社会教育係
調査員	鈴木徳雄	児玉町教育委員会社会教育課社会教育係
	小宮山克己	児玉町遺跡調査会調査員

後張遺跡E地点整理・報告組織

本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長
	田島弘行	本庄市会計課長
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木徳雄	〃 副参事兼課長補佐
	太田博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊季広	〃 埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	の野善行	〃 埋蔵文化財係臨時職員

目次

例言
凡例
目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	検出された遺構と遺物	5
第1節	後張遺跡E地点の概要	5
第2節	竪穴住居跡	5
第3節	掘立柱建物跡	15
第4節	井戸跡	15
第5節	溝跡	20
第6節	河道跡	27
第7節	小穴	42
第4章	まとめ	43

挿図目次

第1図	後張遺跡調査区位置図	1
第2図	周辺遺跡図	4
第3図	後張遺跡E地点遺構配置図	6
第4図	第240号住居跡、第240号住居跡出土遺物	8
第5図	第241号住居跡、第241号住居跡出土遺物(1)	9
第6図	第241号住居跡出土遺物(2)	10
第7図	第242・第244・第245号住居跡	11
第8図	第242・第244・第245号住居跡出土遺物	12
第9図	第243号住居跡	14
第10図	第1号掘立柱建物跡	15
第11図	第11号～第14号井戸跡	17
第12図	第1号～第4号井戸跡出土遺物	18
第13図	E-1A・1B号・2溝跡、E-1A・1B号溝跡出土遺物	20
第14図	E-3～9号溝跡	22
第15図	E-3～9号溝跡出土遺物	23
第16図	河道跡平面図	26
第17図	河道跡断面図	27
第18図	河道跡張出部	28
第19図	河道跡出土遺物(1)	30
第20図	河道跡出土遺物(2)	31
第21図	河道跡出土遺物(3)	32
第22図	河道跡出土遺物(4)・河道跡張出部出土遺物(1)	33
第23図	河道跡張出部出土遺物(2)	34
第24図	河道跡張出部出土遺物(3)	35
第25図	小穴平面図	42

写真図版

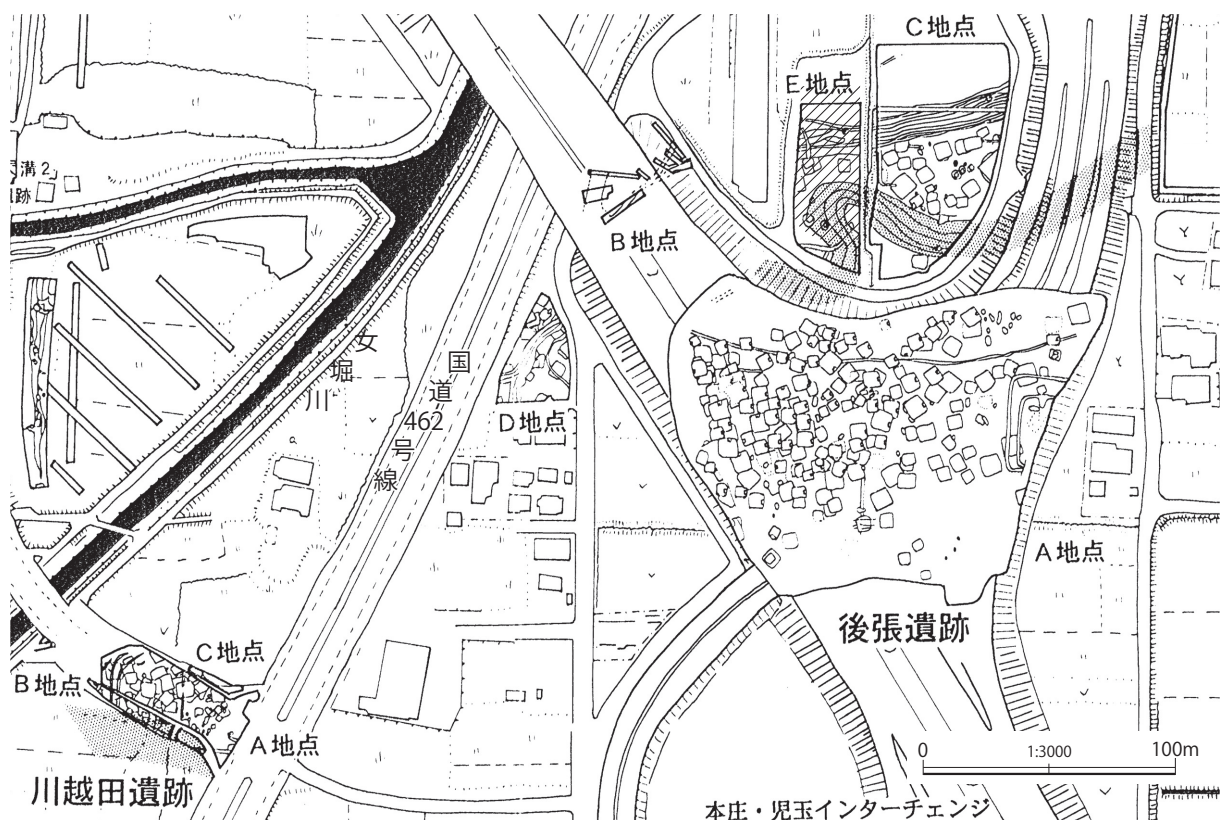
第1章 調査に至る経緯

平成元年9月6日、児玉郡児玉町大字下浅見字後張 148-4、150-2、151、152 番地（現本庄市児玉町下浅見字後張 148 番地—4 外）地内の開発を計画している有限会社さかえ観光より開発予定地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会と試掘調査の依頼書が児玉町教育委員会に提出された。児玉町教育委員会では、9月8日に試掘調査を実施し、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（No. 54-275）後張遺跡に相当し、古墳時代の遺構等の存在が確認された旨の回答を行い、やむを得ず現状変更工事を実施する場合は事前に町教育委員会と保存措置について協議し、文化財保護法第 57 条の 2 の規定により埋蔵文化財発掘届を提出する必要があることを通知した。

その後、有限会社さかえ観光と児玉町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議したが、有限会社中原企画と二棟のホテルを建設する計画であるため現状で保存することが困難であることから、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。以上の協議を踏まえて、児玉町教育委員会の指導に基づき児玉町遺跡調査会と有限会社さかえ観光および有限会社中原企画との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで発掘調査を実施する運びとなった。

有限会社さかえ観光代表取締役長谷川真隅および有限会社中原企画代表取締役海老名京子から後張遺跡（No. 54-275）E 地点にかかる文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が、平成 2 年 4 月 5 日付で児玉町教育委員会に提出されたので、同日児教社第 5-2 号で埼玉県教育委員会教育長あてに進達した。なお、平成 3 年 3 月 30 日付教文第 3-359 号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」が、有限会社さかえ観光代表取締役長谷川真隅および有限会社中原企画代表取締役海老名京子宛に通知された。

また、文化財保護法第 57 条第 1 項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、平成 2 年 4 月 3 日付で児玉町教育委員会に児玉町遺跡調査会長野口敏雄より提出されたので、同日児教社第 5-2 号で埼玉県



第 1 図 後張遺跡調査区位置図

教育委員会に進達した。なお、文化庁長官から平成3年5月22日付委保第5の711号で児玉町遺跡調査会長野口敏雄宛に「埋蔵文化財の発掘について」の通知があった旨、埼玉県教育委員会教育長から平成3年6月20日付け教文第5-218号で通知があった。現地の発掘調査は、鈴木徳雄（児玉町教育委員会社会教育課）および小宮山克己（児玉町遺跡調査会調査員）が担当し、小宮山が現地で調査員として専従した。なお、現地における発掘調査は、平成2年4月9日から同年11月19日まで実施した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡の所在する埼玉県本庄市は、埼玉県の北西部に位置し、東は深谷市・美里町、西は上里町・神川町、南は長瀨町・皆野町に接する。北は群馬県との境を為す利根川が東流しており、利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。今回報告するE地点の位置する本庄市児玉町下浅見字後張148番地は、本庄市街地の南西約3kmの地点にあり、関越自動車道の本庄児玉インターチェンジに隣接する。西側には国道462号線が北東―南西方向に走っており、北進すると国道17号線、南進すると児玉市街に至る。そのすぐ西脇には女堀川がほぼ並行して北東方向に下っており、本庄児玉インターチェンジ出入り口を越えたところでほぼ直角に折れ曲がり東流している。約700m北には、上越新幹線が北西―南東方向に走っている。

本庄市は北東―南西方向に細長い形をしており、その南西部1/3あたりを断層線である八王子―高崎構造線が横断している。この断層線によって、本庄市の地形は南西部の山地と北東部の平野部とに大きく分けられる。平野部は山地から北東方向に舌状に延びる丘陵、群馬県境を流れる神流川によって形成された緩傾斜扇状地である台地、台地北端部を利根川などが浸食してできた低地及び台地上を山地から流れてきた中小河川が浸食してできた低地で構成されている。

山地は群馬県西南部と埼玉県北西部にまたがる上武山地に属しており、その山地も皆野町の男岳・女岳に源を発する小山川によって東西に二分される。西側の山地は、群馬県境の神流川の流れに沿うように二子山を西端に父不見山、城峰山と1000mを越える山々が連なるのに対し、東側の山地は不動山、陣見山、鐘撞堂山と500m級の山々となり低くなっている。

上武山地の縁辺から半島状に延びる丘陵は児玉丘陵と呼ばれ、大きく3つの地域に区分される。また、生野山や浅見山といった台地部に孤立する丘陵が見られる。これらの丘陵は、山麓から続いていた丘陵が侵食を受けたもので、それぞれ生野山残丘、浅見山残丘と呼ばれている。

平野部の大部分を占める台地は本庄台地と呼ばれ、東は小山川、西は神流川、北は利根川によって境が為されている。本庄台地は、洪積世末期に神流川の運んだ土砂によってできた扇状地である。台地上は概ね平坦であるが、扇状地の発達方向である南から北へ僅かに傾斜している。また、自然堤防が現況で微高地として確認できる場所もあり、僅かな起伏が認められる。台地北端は利根川などの浸食を受けて河岸段丘が形成されており、市内北部で東西に延びる4～12mの崖線が見られる。この崖線が低地との境となる。

低地は利根川と台地北端の崖線とに挟まれた部分と、台地上を流れる金鑽川・赤根川・女堀川・小山川などの中小河川の開析作用によってできたものがある。前者は本庄低地と呼ばれ、烏川・神流川・利根川などが氾濫を繰り返すことで形成されたものである。後者は女堀川低地・小山川低地と呼ばれ、これらの低地は河川の流れに沿って北東方向に帯状に広がっており、低地内には島状に残された微高地や帯状に形成された自然堤防が見られる。

このような地形環境をもつ本庄市内において、本遺跡は台地上を流れる女堀川の中流域右岸に位置し、女堀川が開析してできた沖積低地内の標高68mの自然堤防上に立地している。本遺跡の立地する自然堤防は北東―南西方向に延びており、同一の自然堤防上には東へ約100mの所に四方田遺跡第（第2図18、以下第2図

略)が、南西へ約300～400mの所に川越田遺跡(34)と梅沢遺跡(35)があり、これらの遺跡は、本遺跡と同一時期ならびに連続する時期の竪穴住居跡が多数検出されている。このことは、集落の中心が時間の経過によって移動し、移動が繰り返された結果、自然堤防上のほぼ全域において集落が形成されたものと考えられ、本遺跡を含む4遺跡は、遺構の分布が連続する一連の遺跡の可能性が考えられる。

第2節 歴史的環境

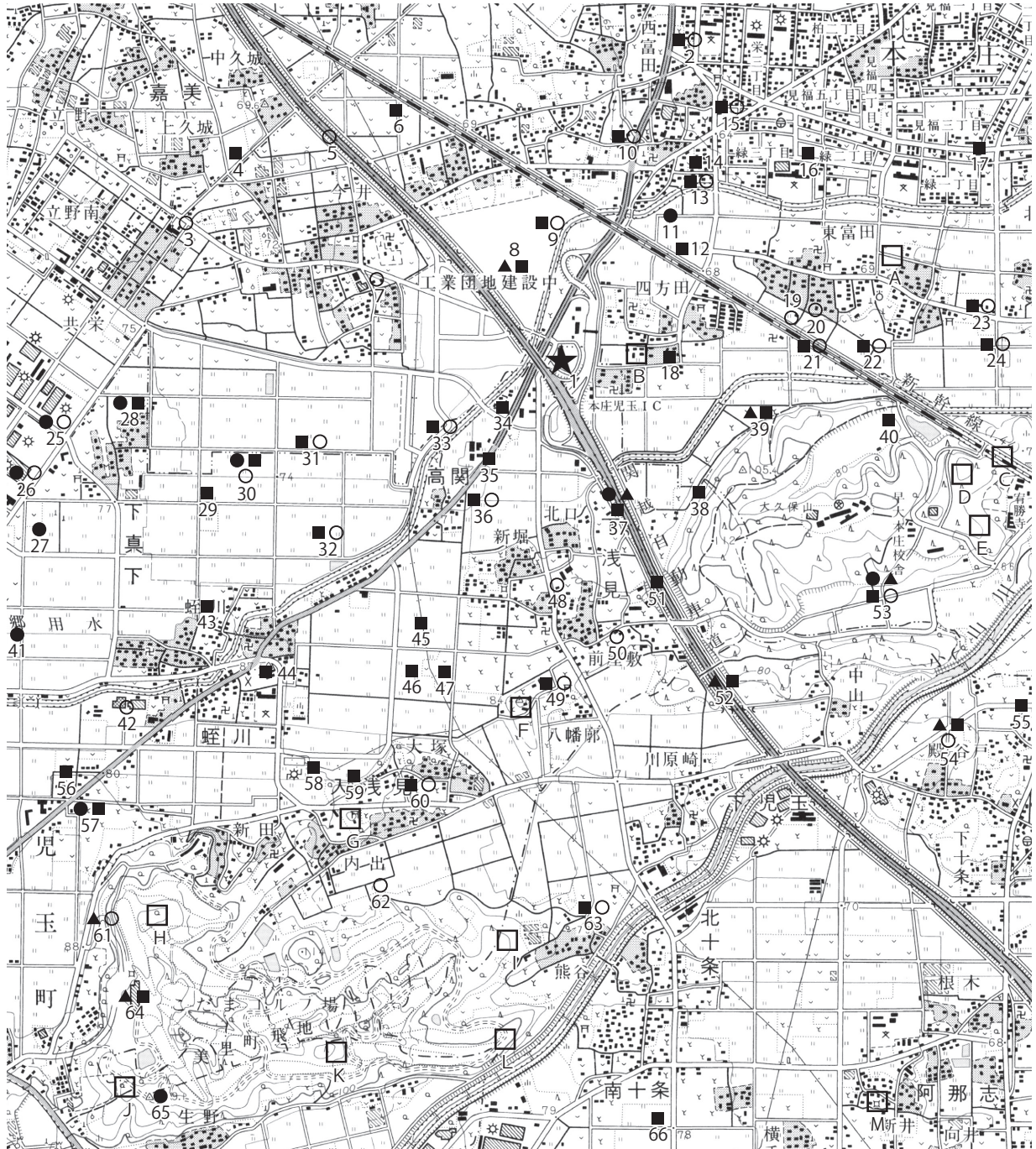
本遺跡の立地する女堀川低地およびその周辺の地域には、低地内の自然堤防上と微高地上、低地北西側の本庄台地縁辺部、低地南東側に列上に並ぶ生野山・鷲山・浅見山(大久保山)の残丘上およびその斜面下の台地上を中心に各時代に渡って多くの遺跡が分布している。周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

縄文時代の遺跡は、草創期から前期の遺構分布は丘陵上および山地内が中心となっており、女堀川低地周辺では大久保山遺跡浅見山I地区・宥勝寺北裏遺跡で草創期から早期の土器が出土しているのみである。中期後半になると、本庄台地の縁辺部に大規模環状集落である将監塚遺跡(25)・古井戸遺跡(26)・新宮遺跡が近接して形成されている。また加曾利EⅢ式期になると、数軒の住居からなる小規模集落が中下田遺跡(41)や西富田前田遺跡(11)、七色塚遺跡(22)など低地部に造られている。後・晩期になると遺構数は中期と比べて減少し、古川端遺跡や女池遺跡、藤塚遺跡(30)などが旧河道や湧水点に近い場所で確認されている。

弥生時代の遺跡は、女堀川低地周辺域では検出例が少ないながらも、中期は丘陵部から低地部に、後期は丘陵部を主体に立地する傾向が認められる。中期の遺跡は、低地内の今井条里遺跡(8)、本庄台地上の夏目西遺跡、浅見山残丘上の大久保山遺跡浅見山I地区で中期中葉の土坑および土坑群が検出されている。集落跡である村後遺跡(54)が低地部に造られているが、これを端緒に低地部に長期間にわたって集落が営まれることは無かった。後期の遺跡は、生野山残丘・浅見山残丘上および残丘斜面下の台地上を主体に分布している。生野山遺跡(64)、大久保山遺跡(53)は吉ヶ谷式土器を主体、山根遺跡(39)・飯玉東遺跡(37)は樽式土器を主体、宥勝寺北裏遺跡、美里町塚本山遺跡は二軒屋式土器を主体とする遺跡である。これらの遺跡は、単一時期に近い小規模集落と考えられるものが多く、近くの小支谷の湧水を利用した小規模な谷田を生産基盤にしていたものと推測される。女堀川中流域の低地部は、ほぼ全域にわたり圃場整備が実施されたため、多くの遺跡で発掘調査が行われたが、自然堤防上・微高地上には弥生時代後期の遺構は確認されておらず、また水路を開削するなど低地部の開発を積極的に行った痕跡も認められなかったことから、弥生時代後期には低地部の開発を行っていなかったようである。

古墳時代になると、女堀川低地の開発が本格化したことから、女堀川低地周辺の遺跡数が急激に増加する。これまでの弥生時代後期の遺跡とは異なり、低地部内への集落の進出が顕著に見られるようになった。古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期から継続して営まれるものは少なく、多くの遺跡は該期になって新たに出現している。前期中葉頃に川越田遺跡(34)や社具路遺跡(10)が低地内に出現し、後葉～終末期に本遺跡のような大規模集落を中心に女堀川中流域全域に分布が広がり、低地部の開発を積極的に進めつつ古墳時代中期・後期へと続いていく。古墳時代前期の遺跡から出土する土器は、吉ヶ谷式土器や樽式土器など弥生時代後期の在り土器の系統をくむ在り土器も残存するが、畿内・東海西部・北陸・南関東地方などの土器の影響を受けた外来系土器が最初から作られている。その外来系土器はやがて在り土器群を凌駕し主体となっていくが、その様相は低地部の遺跡と丘陵部の遺跡とは異なる。低地部では外来系土器が主体となる遺跡が当初から存在しているが、丘陵部では弥生時代後期からの生活基盤を継承しており、在り土器の影響が根強く残る傾向が見られる。このような弥生時代後期から古墳時代前期にかけての展開からは、他地域から入植して来た集団が新たに低地部の開発を行なったのではないかと推測される。

古墳時代中期以降は、低地部のほぼ全域に集落が展開し、これまで対象外であった本庄台地にも開発が進み集落が営まれるようになった。弥生時代においては生活基盤の一つであった生野山・鷲山・浅見山の残丘は前期末葉に方形周溝墓が造営され、以降墓域として意識されるようになった。その後当該地域の首長墓である前



●：縄文時代 ▲：弥生時代 ■：古墳時代 ○：奈良・平安時代 □：古墳

0 1:25,000 1km

- 1:後張遺跡 2:夏目遺跡 3:今井遺跡群 4:往來北遺跡 5:久城前遺跡 6:諏訪遺跡 7:北廓遺跡 8:今井条里遺跡 9:地神・塔頭遺跡 10:社具路遺跡 11:西富田前田遺跡 12:九反田遺跡 13:西富田・四方田条里遺跡 14:西富田本郷遺跡 15:南大通り線内遺跡 16:雌濠遺跡 17:笠ヶ谷戸遺跡 18:四方田遺跡 19:観音塚遺跡 20:元富遺跡 21:下田遺跡 22:七色塚遺跡 23:久下東遺跡 24:久下前遺跡 25:将監塚遺跡 26:古井戸遺跡 27:平塚遺跡 28:将監塚東遺跡 29:堀向遺跡 30:藤塚遺跡 31:前田甲遺跡 32:柿島遺跡 33:今井川越田遺跡 34:川越田遺跡 35:梅沢遺跡 36:東牧西分遺跡 37:飯玉東遺跡 38:根田遺跡 39:山根遺跡 40:浅見山 I 遺跡 41:中下田遺跡 42:蛭川坊田遺跡 43:左口遺跡 44:共和小学校校庭遺跡 45:浅見境北遺跡 46:東田遺跡 47:浅見境遺跡 48:天神耕地・中畑遺跡 49:鷺山南遺跡 50:南ノ前遺跡 51:雷電下遺跡 52:塚本山遺跡 53:大久保山遺跡 54:村後遺跡 55:権現塚遺跡 56:辻堂遺跡 57:南街遺跡 58:日延遺跡 59:城の内遺跡 60:新屋敷遺跡 61:吉田林割山遺跡 62:向田 A 遺跡 63:宮ヶ谷戸遺跡 64:生野山遺跡 65:上生野山遺跡 66:樋之口遺跡
- A:公卿塚古墳 B:四方田古墳 C:北堀前山 2 号墳 D:北堀前山 1 号墳 E:東谷古墳 F:鷺山古墳 G:金鑽神社古墳 H:生野山銚子塚古墳 I:熊谷後 1 号墳 J:物見塚古墳 K:生野山將軍塚古墳 L:生野山 16 号墳 M:堂山古墳

第 2 図 周辺遺跡図

期の鷺山古墳（F）・北堀前山1号墳（D）、中期の北堀前山2号墳（C）・物見塚古墳（J）、後期の生野山銚子塚古墳（H）・生野山16号墳（L）などが継続して残丘上に造営されている。

奈良・平安時代になると、低地部のほとんどの集落は廃絶され、低地を取り囲む台地縁辺、残丘上、残丘斜面下の低台地上に移動している。低地東側の残丘周辺に移動した集落は10世紀以降も継続して営まれている。低地西側の本庄台地上に移動した集落は9世紀後半に衰退し始め、9世紀後半から10世紀にかけて再び低地内に小規模な集落を形成するようになる。

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 後張遺跡E地点の概要

本遺跡は、埼玉県本庄市児玉町下浅見字後張148-4ほかに位置し、本庄台地を流れる女堀川中流域右岸の自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落である。

本遺跡はこれまでに5地点で発掘調査が実施されている。A・B地点は、関越自動車道建設に先立って埼玉県教育委員会が1975年から1976年にかけて発掘調査を行い、1982年に『後張遺跡Ⅰ』、1983年に『後張遺跡Ⅱ』としてまとめられている。C地点は、民間開発に伴い1985年に児玉町遺跡調査会が事前に発掘調査を行い、2005年に『後張遺跡Ⅲ』としてまとめられている。D地点は民間開発に伴い1989年に児玉町遺跡調査会が発掘調査を行い、本庄市遺跡調査会によって2010年に『後張遺跡Ⅳ』としてまとめられている。今回報告するE地点は、1990年に民間開発に伴い児玉町遺跡調査会が事前に発掘調査を行った遺跡である。

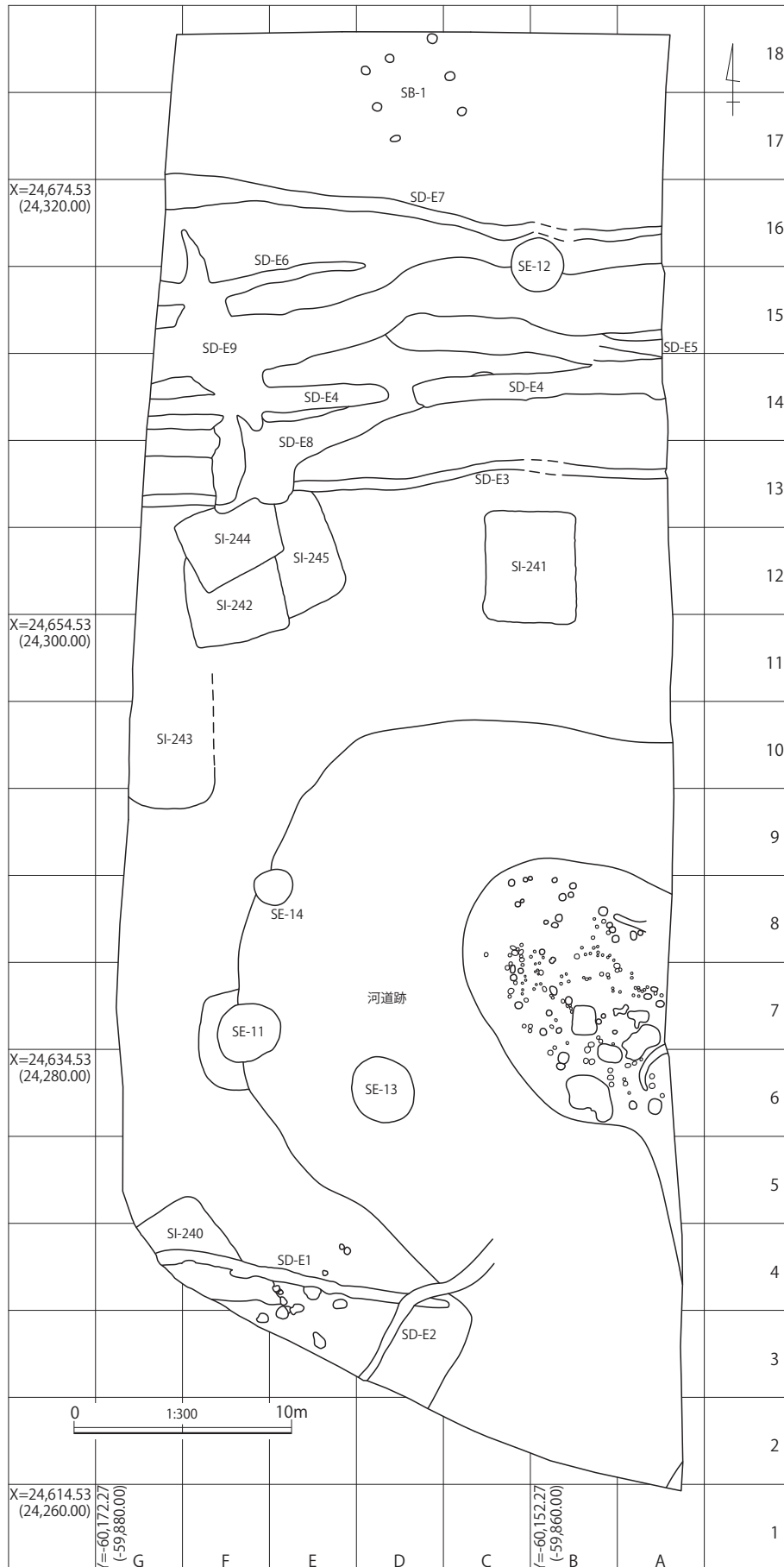
A～D地点で検出された遺構は、竪穴住居跡238軒（古墳時代前期35軒、中期85軒、後期92軒、平安時代4軒、不明22軒）、土坑23基、井戸跡10基、溝跡15条である。その他にA地点で焼土跡や中世の屋敷跡、B地点で大溝跡・溝跡、C地点でピット群・河道跡、D地点でB地点から続くと考えられる大溝跡などが検出されている。（第1図参照）

今回報告するE地点は、C地点調査区の西隣りに位置し、約20m南にA地点調査区が、約50m西にB地点調査区がある。調査範囲は、南端部が関越自動車道本庄児玉インターチェンジの道路形状に即した南北方向に細長い台形状を呈する。南北長約67m、東西幅約23～26mで、調査面積は約1,500㎡である。遺構検出面は、調査区北部が標高67.1m、南部が標高67.2mとなっており、ほぼ平坦であるが北側が僅かに低くなっている。検出された遺構は、竪穴住居跡6軒（古墳時代前期3軒、中期2軒、時期不明1軒）、掘立柱建物跡1棟、井戸跡4基、土坑10基、溝跡9条、河道跡1条、小穴164個である。E地点まで含めた後張遺跡の竪穴住居跡の検出数は244軒となり、そのうち古墳時代前期が38軒（A地点24軒・C地点11軒・E地点3軒）、中期が87軒（A地点59軒・C地点14軒・D地点12軒・E地点2軒）、後期が92軒（A地点88軒・D地点4軒）、平安時代が4軒（A地点2軒・B地点1軒・D地点1軒）、時期不明が23軒となった。

遺構の分布状況を見ると、隣接するC地点に繋がる河道跡が調査区南部を蛇行し、C-2号溝跡群と繋がるE-3～9号溝跡が調査区北部を東流している。竪穴住居跡は河道跡左岸に分布し、溝跡群の北側には見られない。1軒が調査区南西隅部の河道跡蛇行部内側に、残りの5軒が調査区中央部の河道跡と溝跡群の間に位置している。掘立柱建物跡は溝跡群北側の調査区北端部に位置している。溝跡群北側は掘立柱建物跡1棟の他には遺構が確認されておらず、遺構密度は低い。井戸跡は1基が調査区北部、3基が調査区南部に位置し、いずれも溝跡群・河道跡を掘り込んで造られている。溝跡は、調査区北部の溝跡群の他に2条が調査区南端部に分布している。河道跡右岸蛇行部の張出部には、土坑10基と小穴150個が分布している。これらの遺構は、河道跡に伴うものと考えられる。この他に、小穴12個が調査区南端部の河道跡左岸の蛇行部内側に分布している。

第2節 竪穴住居跡

第240号住居跡（第4図、写真図版1・2）



第 3 図 後張遺跡E 地点遺構配置図

本遺構は、調査区南西隅部のF 4・5、G 4・5グリッドに位置する。北東側約半分が検出され、その他の部分は調査区外にある。E-1号溝跡と重複しており、本遺構のほうが古い。平面形態は、南西側半分が調査区外にあり、東隅部がE-1号溝跡に壊されているため全容は不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は[4.02]×[3.14]m、東壁方向はN 36°W、検出面から床面までの深さは3cmである。床面はほぼ平坦であるが、中央に向かって非常に緩やかに傾斜している。住居内施設は、小穴5個(p 1～5)が確認された。p 1は住居跡北隅部に位置する。直径約29cmの円形を呈し、深さは13cmを測る。p 2は住居跡東隅部に位置する。直径約30cmの円形を呈し、深さは12cmを測る。これらは位置から柱穴と考えられる。p 3は住居跡北東壁際の東隅寄りに位置する。78×55cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。断面は皿状を呈する。p 4は住居跡南西壁際のほぼ中央に位置し、西側約1/3は調査区外に含まれる。[75]×[68]cmで楕円形を呈すると思われる、深さは24cmを測る。断面は逆台形を呈する。これらは位置・形態から貯蔵穴と考えられる。p 5は住居跡北西壁際のほぼ中央に位置し、西側約1/2は調査区外に含まれる。住居壁に接しており[53]×44cmの半楕円形を呈すると思われる、深さは7cmを測る。遺構内堆積土は単一層である。本遺構からは多数の土器片が出土しており、その内土師器甕2点・高坏2点を図示した。

本遺構は、南西側約半分が調査区外にあり、南側はE-1号溝跡に壊されているため残存状況が良くないが、形態の特徴および床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

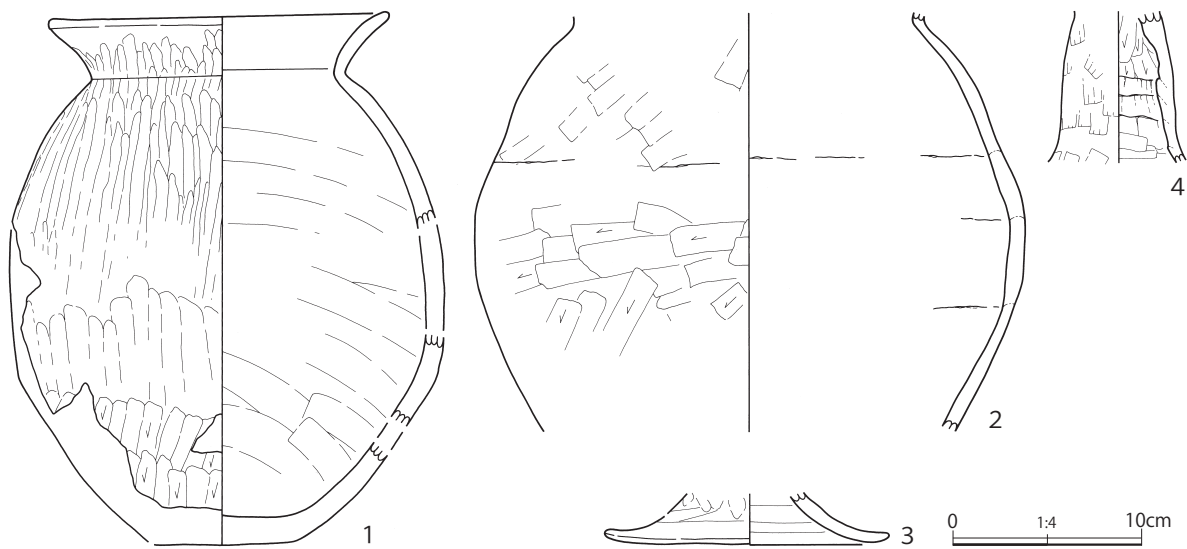
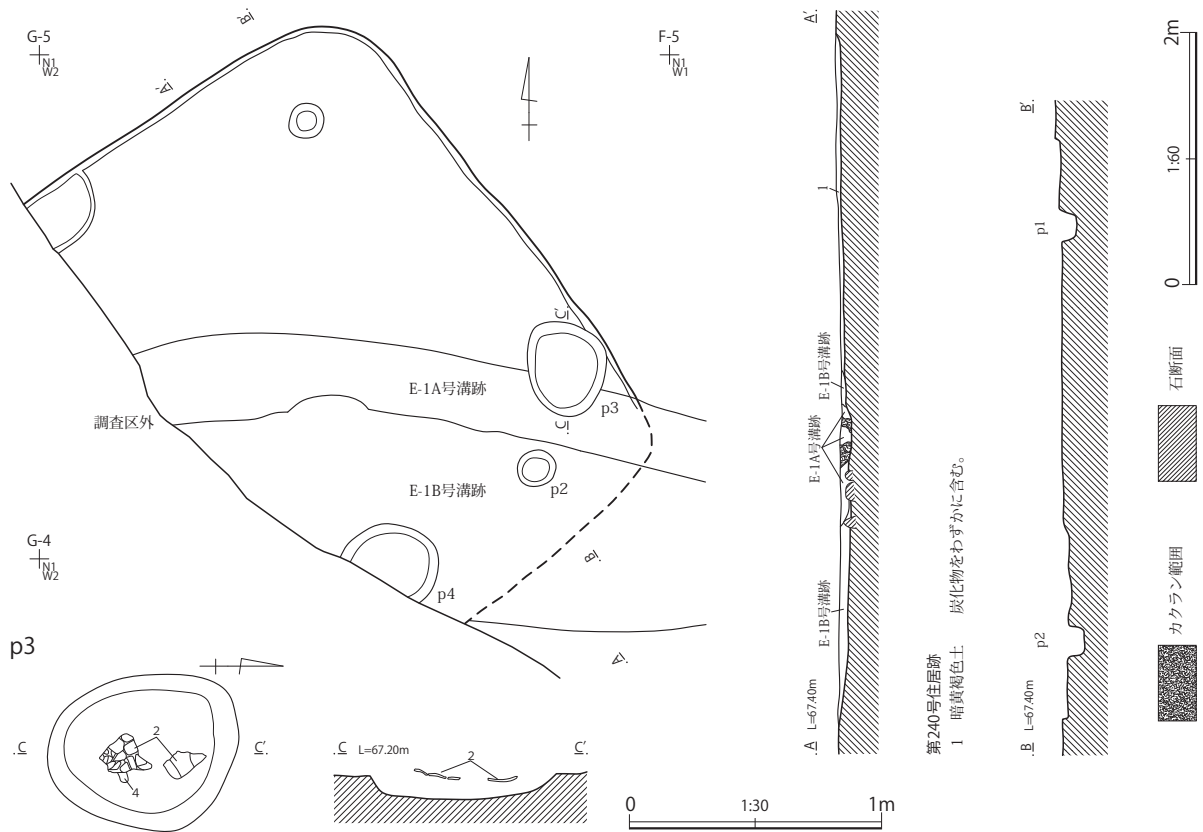
第241号住居跡(第5・6図、写真図版1・2)

本遺構は、調査区中央部のB 11～13、C 11～13グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は、隅丸長方形を呈し、床面幅は5.07×4.20m、長軸方向はN 1°W、検出面から床面までの深さは5cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、中央部が若干高く壁側へ非常に緩やかに傾斜している。住居内遺構は、炉跡1基、小穴7個(p 1～7)が確認された。炉跡は、調査区中央部の北西隅部寄りに位置する。78×47cmの不正楕円形を呈し、深さは4cmである。p 1は住居跡北西隅部付近に位置する。直径約33cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。p 2は住居跡北東隅部付近に位置する。直径約29cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。p 3は住居跡南東隅部付近に位置する。39×31cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。p 4は住居跡南西隅部に位置する。直径約46cmの円形を呈する。北側にテラスを有し、底部の深さは55cmを測る。これらは位置・形態から柱穴と考えられる。p 5は住居跡中央部の北壁寄りにあり、炉跡の東側に位置する。62×56cmの不正円形を呈し、深さは25cmを測る。断面は逆台形である。深さがあることから貯蔵穴である可能性が考えられる。p 6は住居跡北壁寄りの中央西側にあり、炉跡の北に位置する。直径約38cmの円形を呈し、深さは6cmを測る。断面は皿状を呈する。非常に浅いため、その性格は不明である。p 7は住居跡南壁寄りのほぼ中央に位置する。98×54cmの楕円形を呈し、東側にテラスを有する。床面からの深さは、テラス部が23cm、底部が45cmを測る。位置から支柱穴とも考えられるが、その性格は判然としない。遺構内堆積土・炉内堆積土の詳細は不明である。p 5内堆積土は5層に、p 6内堆積土は3層に分けられる。どちらもレンズ状堆積を呈していることから自然堆積と思われる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、その内土師器甕4点・壺2点・坏1点・高坏1点・器台1点・脚付碗1点を図示した。

本遺構は、床面の中央部やや北西寄りに炉跡を伴う竪穴住居跡である。所属時期は、炉跡を伴うことおよび出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

第242号住居跡(第7・8図、写真図版1・3)

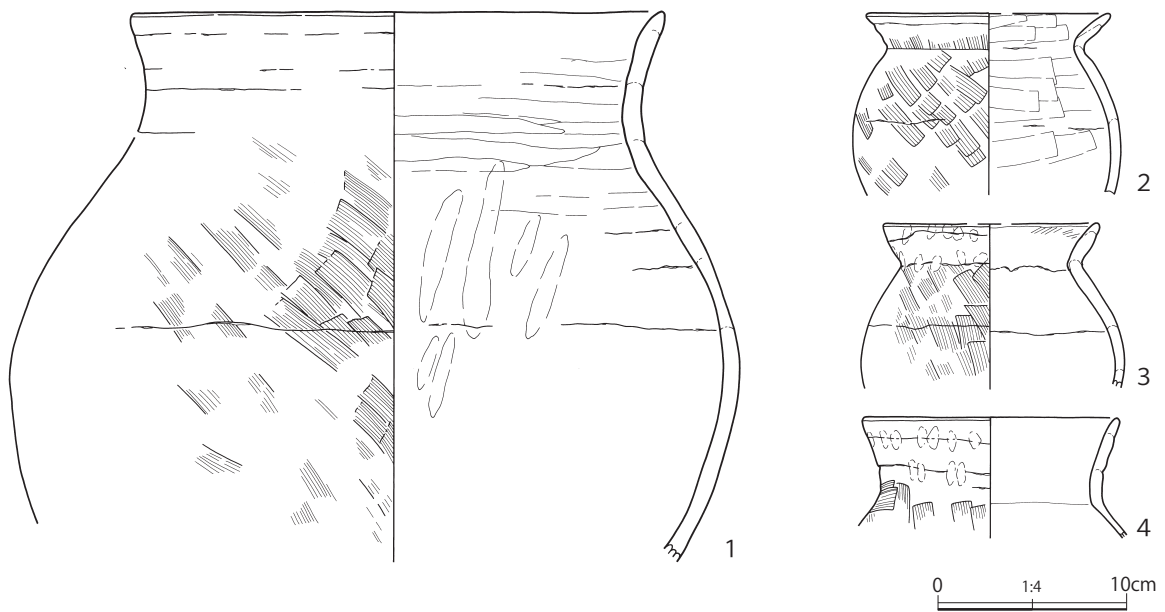
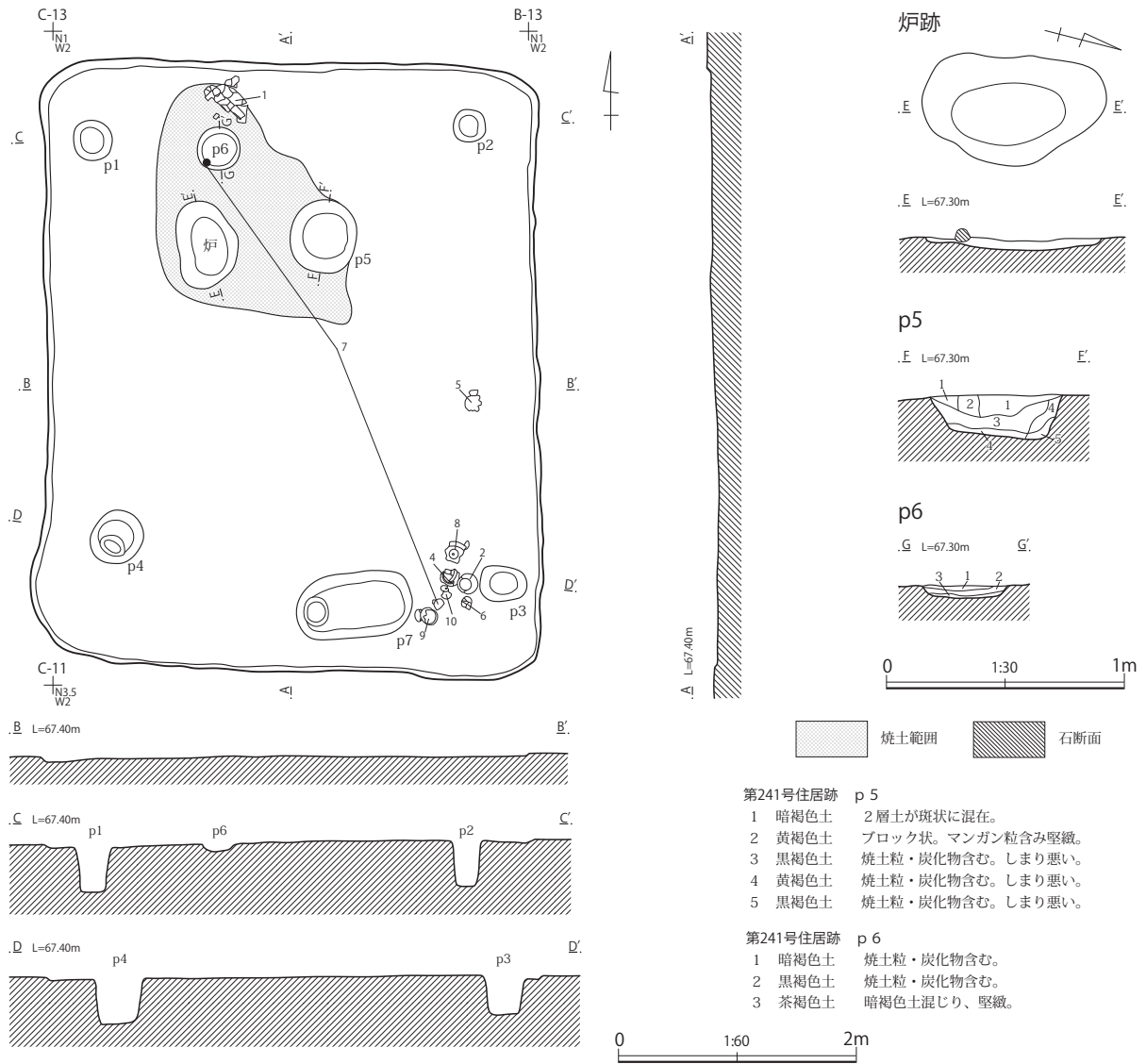
本遺構は、調査区中央部のE 11・12、F 11・12グリッドに位置する。第243・244号住居跡と重複しており、本遺構は第243号住居跡より古く、第244号住居跡よりも新しい。住居跡北壁が第243号住居跡に壊されているため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。床面幅は4.37×[4.11]m、



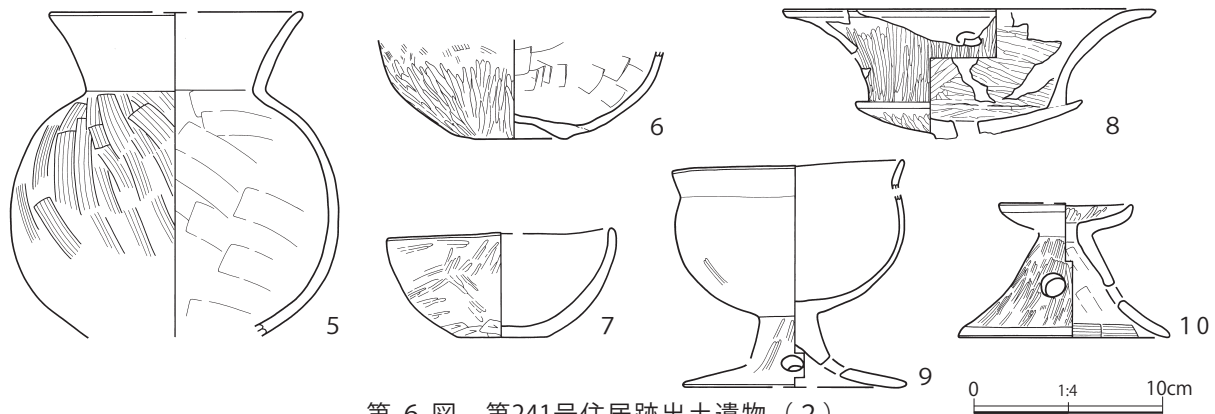
第 4 図 第240号住居跡・第240号住居跡出土遺物

第 240 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0:推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	古式土師器 甕	p 4 覆土	17.9	(7.5)	28.2	やや粗	良	灰褐色	外面：口縁部ヨコナデ 頸～胴中部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	口縁～胴上部 ほぼ完存 胴下～底部 2/3
2	古式土師器 甕	p 3 覆土	—	—	[22.0]	やや粗	良好	明赤褐色	外面：胴上部ヘラナデ 胴中部ヘラケズリ 内面：磨滅激しく調整不明	胴部片
3	古式土師器 高坏	p 4 覆土	—	15.3	[2.6]	普通	良好	橙色	外反する裾部。 外面：裾上部指頭圧痕・ヘラナデ 裾端部ヨコナデ 内面：裾上部ヘラナデ 裾端部ヨコナデ	裾部 3/4
4	古式土師器 高坏	p 3 覆土	—	—	[7.9]	普通	良好	橙色	中空の柱状脚部。 外面：脚部ヘラナデ 内面：脚上部ヘラケズリ 脚中部絞り痕 脚下部ヘラナデ	脚部片



第 5 図 第241号住居跡・第241号住居跡出土遺物（1）



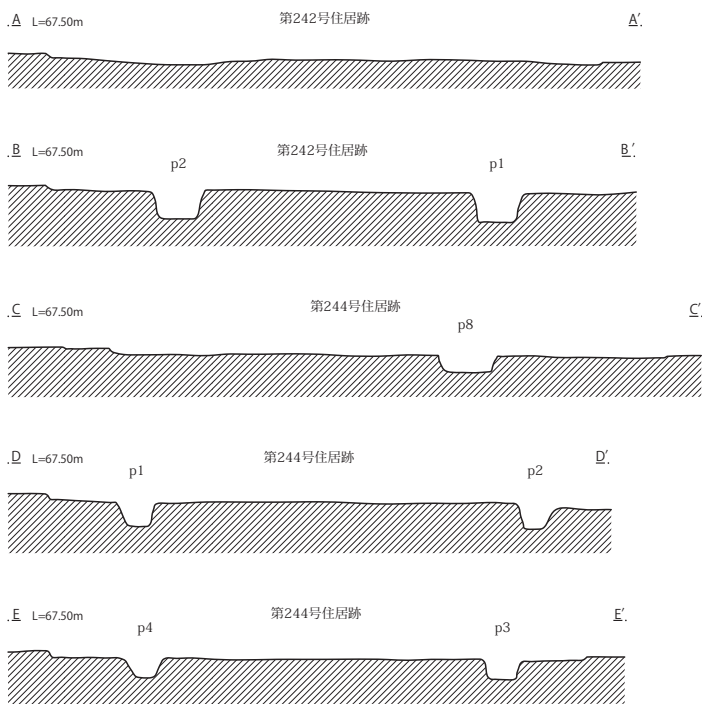
第 6 図 第241号住居跡出土遺物（2）

第 241 号住居跡出土遺物観察表

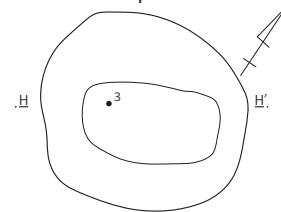
番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	遺存値						
			口径	底径	器高					
1	古式土師器 甕	覆土	28.0	—	[29.0]	普通	良	浅黄色	輪積口縁。 外面：口縁～頸部ヨコナデ 胴上～中部ハケメ 内面：磨減激しく不明瞭 口縁部ヨコナデか 頸部ヘラナデか 胴上～中部ヘラナデ後ナデ	口縁～頸部 7/8 胴上～中部 1/8
2	古式土師器 甕	床面	12.8	—	[9.5]	やや粗	良	橙色	輪積口縁。 外面：口縁部ヨコナデ 頸～胴中部ハケメ 内面：口縁～胴中部ヘラナデ	口縁部 2/3 胴上～中部ほぼ完存
3	古式土師器 甕	床面	(11.4)	—	[8.7]	やや粗	良	明赤褐色	輪積口縁。 外面：口縁～頸部ヨコナデ・指頭圧痕 胴上部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ	口縁～胴上部片
4	古式土師器 甕	床面	13.3	—	[5.7]	やや粗	良	明赤褐色	輪積口縁。 外面：口縁～頸部ヨコナデ・指頭圧痕 胴上部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ	口縁～胴上部 完存
5	古式土師器 壺	床面	(13.4)	—	[17.1]	緻密	良	明黄褐色	胴部は球形を呈する。外面：口縁部磨減激しく調整不明 胴上部ハケメ 内面：口縁部磨減激しく調整不明 胴部ヘラナデ	口縁～胴下部 1/3
6	古式土師器 壺	床面	—	5.1	[5.2]	普通	良好	浅黄褐色	底部は上げ底で、外面は剥落か？ 外面：胴下部ハケメ後ヘラミガキ 内面：胴下部ヘラナデ 底部ナデ	胴下～底部完存
7	古式土師器 環	床面	12.5	4.6	5.7	やや粗	良	明赤褐色	平底で体部は丸みを帯びて立ち上がる。 外面：口縁～体部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面：磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか？	ほぼ完存
8	古式土師器 器台	床面	19.8	—	[6.7]	普通	良	灰褐色	結合器台。器受部上部1ヶ所、結合部中央に1ヶ所焼成前穿孔を施す。 外面：口縁部ヨコナデ・口唇部面取り 器受部ヘラミガキ 結合部上部ヨコナデ・端面面取り 結合部下部ヘラミガキ 内面：口縁～器受部ヘラミガキ	口縁～器受部 4/5 結合部ほぼ完存
9	古式土師器 脚付碗	床面	12.3	11.9	11.9	緻密	良	橙色	脚部3ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：口縁部ヨコナデ 体～脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 裾部ナデ 内面：口縁～体部磨減激しく調整不明 脚～裾部ナデ	口縁部 3/4 体～脚部完存 裾部 1/4
10	古式土師器 器台	床面	7.1	11.2	7.0	やや粗	良好	にぶい 橙色	器受部は非常に浅く、脚部3ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：器受部ナデ 脚部ハケメ後ヘラミガキ 脚端部ヨコナデ 内面：器受部ヘラミガキ 脚部ヘラナデ 脚端部ハケメ後ナデ	器受部 3/4 脚部ほぼ完存

西壁方向はN9°W、検出面から床面までの深さは9cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、中央部が若干高いようである。住居内施設は、小穴5個（p1～5）が確認された。p1は住居跡南東隅部付近に位置する。直径約44cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。p2は住居跡南西隅部付近に位置する。直径約43cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。これらは位置・形態から柱穴と考えられる。p3は住居跡南壁寄りほぼ中央に位置し、82×78cmの不正円形を呈する。深さは33cmを測り、断面は逆台形である。p4は住居跡中央の南壁寄りにあり、p3の北側に位置する。53×35cmの楕円形を呈し、深さは21cmを測る。断面は逆台形である。p5は住居跡東壁寄りのほぼ中央に位置する。直径約29cmの円形を呈し、深さは7cmを測る。遺構内堆積土の詳細は不明である。p3内堆積土は5層に、p4内堆積土は3層に分けられる。いずれもレンズ状堆積の様相を呈していることから自然堆積土と考えられる。本遺構からは多量の遺物が出土しており、その内土師器台付甕1点・甕1点・鉢1点・高環1点を図示した。

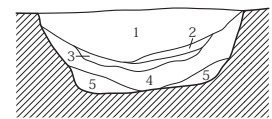
本遺構は、形態の特徴および床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



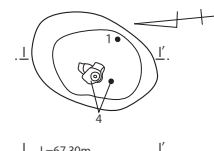
第242号住居跡p3



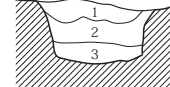
H L=67.30m



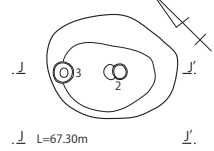
第242号住居跡p4



.I L=67.30m



第245号住居跡p3



.I L=67.30m



0 1:30 1m

第 7 图 第242·第244·第245号住居跡

第242号住居跡 p 3

- 1 暗褐色土 φ 3 cm黄褐色土ブロック・炭化物少量、焼土粒微量含む。堅緻。
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロックに暗褐色土が混在。
- 3 暗褐色土 φ 2 cm黄褐色土ブロック・炭化物含み、粘性強い。
- 4 暗褐色土 黄褐色土粒・炭化物含む。1層に類似。
- 5 暗黄褐色土 黄褐色土粒多量含む。

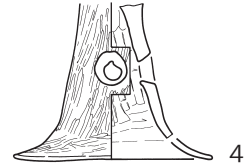
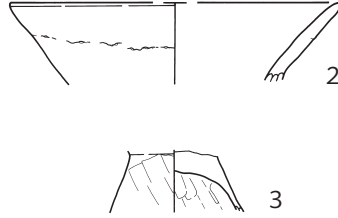
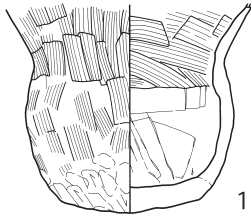
第242号住居跡 p 4

- 1 暗黄褐色土 黄褐色土粒多量、焼土・炭化物少量含み、堅緻。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒少量、焼土・炭化物微量含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒少量、焼土・炭化物多量含む。粘性あり。

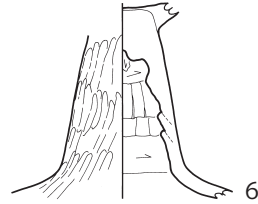
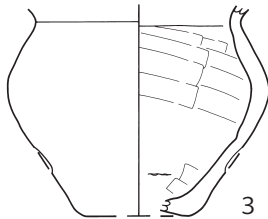
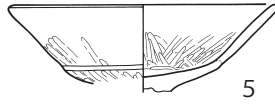
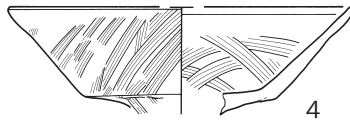
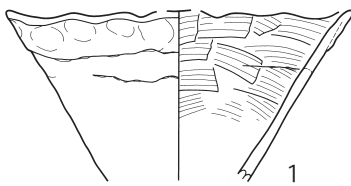
第245号住居跡 p 3

- 1 暗褐色土 φ 2 mm黄褐色土粒・炭化物多く含み、堅緻。
- 2 暗褐色土 φ 1 cm黄褐色土ブロック・炭化物含み、堅緻。1層より明るい。
- 3 暗黄褐色土 φ 4 cm黄褐色土ブロック斑状に、1・2層より多量の炭化物を含む。

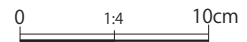
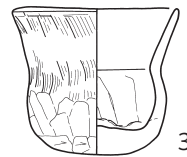
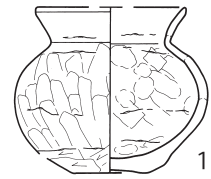
第 242 号住居跡



第 244 号住居跡



第 245 号住居跡



第 8 図 第242・第244・第245号住居出土遺物

第 242 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値	器高					
1	古式土師器鉢	p 4 覆土	—	—	[10.7]	やや粗	良	明赤褐色	口縁部は大きく外反し、底部は丸底状を呈する。 外面：口縁～胴中部ハケメ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ハケメ 胴～底部ヘラナデ	口縁端部欠損 口縁～底部 1/2
2	古式土師器甕	床面	(17.6)	—	[4.3]	やや粗	良	明赤褐色	口縁部は大きく外反する。外内面：ヨコナデ	口縁部 1/3
3	古式土師器台付甕	p 3 覆土	—	—	[3.2]	緻密	良	橙色	外内面：ヘラナデ	台上部完存
4	古式土師器高坏	p 4 覆土	—	(10.6)	[8.4]	普通	良	明赤褐色	胴中部1ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：脚～裾部ヘラミガキ 内面：脚上部ヘラナデ 脚中部ヘラケズリ 脚下～裾部ヨコナデ	脚部完存 裾部 1/4

第 244 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値	器高					
1	古式土師器壺	床面	(18.4)	—	[9.0]	粗	良	橙色	折り返し口縁で口縁端部は波状を呈する。 外面：磨減激しく不明瞭 口縁端部指頭圧痕 口縁部ナデ 内面：口縁部ハケメ・ナデ	口縁部 1/4
2	古式土師器壺	床面	(15.0)	—	[2.2]	やや粗	良	橙色	外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ	口縁部片
3	古式土師器小型甕	床面	—	(5.4)	[11.0]	やや粗	不良	橙色	胴部中に最大径をもち算盤玉状を呈する。 外面：磨減激しく調整不明 内面：ヘラナデ	頸～底部 1/5
4	古式土師器高坏	床面	(18.4)	—	[5.6]	やや粗	良	灰褐色	外内面：磨減激しく不明瞭 口縁部ヨコナデ 坏部ハケメ後ナデか	坏部 1/3

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
5	古式土師器 高坏	床面	14.4	—	[4.5]	やや粗	良	橙色	坏下部に段を有する。 外内面：磨滅激しく調整不明瞭 口縁部ヨコナデ 坏部ヘラミガキ	坏部完存
6	古式土師器 高坏	床面	—	—	[10.2]	普通	良好	明赤褐色	外面：脚～裾上部ヘラミガキ 内面：脚上部絞り痕 脚下部ヘラケズリ 裾上部ヨコナデ	脚部ほぼ完存 裾上部 1/5

第 245 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	古式土師器 小型甕	床面	(8.1)	4.0	8.7	やや粗	良好	灰褐色	口縁部は短く外反し、胴部は球形を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 胴上～中部ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ 底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部指頭圧痕・ヘラナデ	口縁～胴部 1/3 底部完存
2	古式土師器 小型壺	p 3 底面	8.8	3.6	8.3	普通	良好	橙色	底面は不安定。頸部が僅かに窄まる。 外面：口縁端部ヨコナデ 口縁 ～体上部調整不明瞭・ヘラナデか 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 体～底部ナデ・指頭圧痕	完存
3	古式土師器 小型壺	p 3 覆土	8.8	—	7.7	普通	良好	明赤褐色	丸底を呈する。頸部はほとんど窄まらず、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 外面：口縁～頸部ハケメ後ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	完存

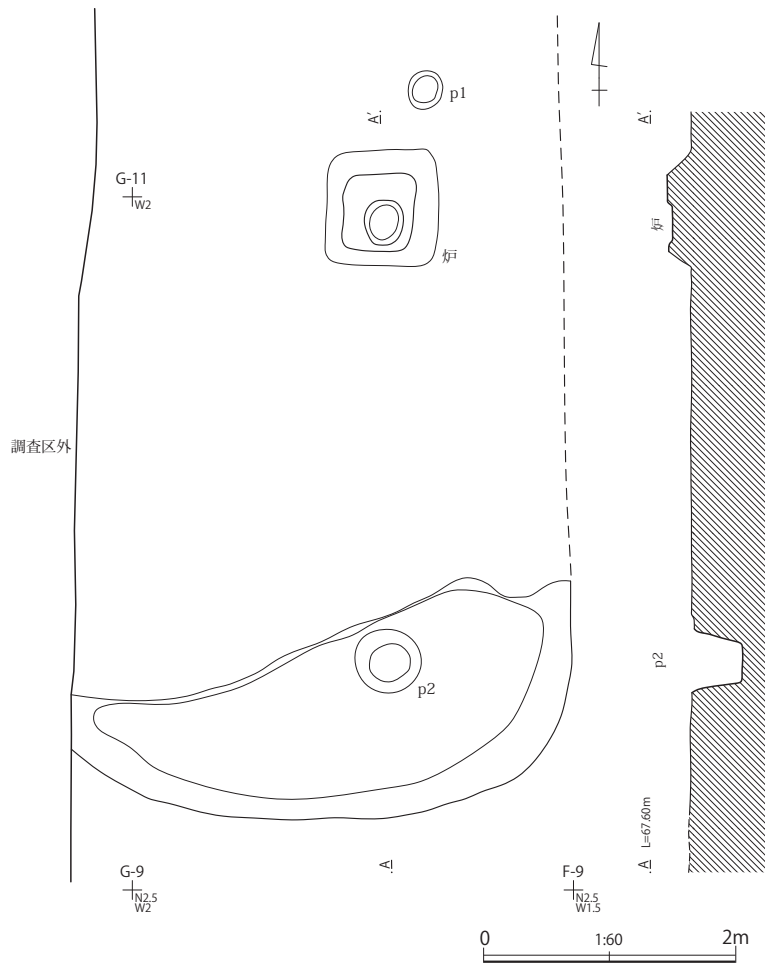
第 243 号住居跡 (第 9 図、写真図版 1)

本遺構は、調査区中央部の F 9～11、G 9～11 グリッドに位置する。重複する遺構はない。炉跡周辺と小穴 2 個、住居跡南壁際の掘形のみが検出されている。住居跡の西側約 1/2 は調査区外に含まれている。平面形態は、西側約半分が調査区外にあること、大半が削平されていたことから判別できない。床面幅は [5.92] × [3.96] m である。住居跡の軸方向・壁方向は測定できず、小穴 2 個を結んだ軸線方向は N 4° E である。検出面から床面までの深さは不明である。住居内施設は、炉跡 1 基、小穴 2 個 (p 1・2) が確認された。炉跡は、住居跡中央部の北東隅部寄りに位置していると思われる。平面形態は 36 × 30cm の楕円形を呈し、検出面からの深さは 6cm を測る。p 1 は住居跡北東隅部付近に位置すると思われる。30 × 27cm の不正円形を呈し、検出面からの深さは 44cm を測る。p 2 は住居跡南東隅部付近に位置すると思われる。直径約 51cm の円形を呈し、検出面からの深さは 59cm を測る。これらは深さから柱穴と考えられる。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは遺物が出土していない。

本遺構は、削平を受けており平面形態・規模が不明であるが、炉跡が確認されたことから竪穴住居跡と考えられる。出土遺物がないため所属時期は不明であるが、炉跡が確認されたことから古墳時代前期～中期に含まれると考えられる。

第 244 号住居跡 (第 7・8 図、写真図版 1・3)

本遺構は、調査区中央部の E 12、F 12・13、G 12・13 グリッドに位置する。第 241・244 号住居跡、E-8 号溝跡と重複しており、本遺構は E-8 号溝跡より古く、第 241・244 号住居跡よりも新しい。平面形態は、北東隅部付近が E-8 号溝跡に壊されているが、北東隅部が外側に開いた台形を呈する。床面幅は [4.59] × 3.39 m、西壁方向は N 27° W、検出面から床面までの深さは 10cm を測る。床面はほぼ平坦であるが、東側へ僅かに傾斜している。住居内施設は、小穴 9 個 (p 1～9) が確認された。p 1 は住居跡北西隅部付近に位置する。直径約 32cm の円形を呈し、床面からの深さは 18cm を測る。p 2 は住居跡北東隅部付近に位置する。39 × 32cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 20cm を測る。p 3 は住居跡南東隅部付近に位置する。直径約 31cm の不正円形を呈し、床面からの深さは 14cm を測る。p 4 は住居跡南西隅部付近に位置する。直径約 33cm の円形を呈し、床面からの深さは 15cm を測る。これらは位置・形態から柱穴と考えられる。p 5・6 は住居跡北西隅部付近にあり、p 2 の西側に位置する。p 5 は 47 × 43cm の不正円形を呈し、床面からの深さは 13cm、p 6 は直径約 25cm の円形を呈し、床面からの深さは 6cm を測る。p 7・8 は住居跡中央部にあり、p 7 は北西隅部寄り、p 8 は南東隅部寄りに位置する。p 7 は 53 × 47cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 26cm、p 8 は 49 × 29 の楕円形を呈し、床面からの深さは 12cm を測る。p 9 は住居跡南西隅部付近にあ



第 9 図 第243号住居跡

住居跡北壁をE-3・8溝跡によって壊されているため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈するものと思われる。床面幅は[5.17] × [3.25] m、東壁方向はN 20°W、検出面から床面までの深さは3 cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、中央から外側に向かって非常に緩やかに傾斜している。住居内施設は、小穴4個（p 1～4）が確認された。p 1は住居跡北東隅部付近に位置し、28 × 22cmの楕円形で床面からの深さは9 cmである。p 2は住居跡南東隅部付近に位置し、32 × 30cmの楕円形で、床面からの深さは5 cmである。これらは位置から柱穴と考えられる。p 3は住居跡南東隅部にあり、p 2の西側に位置する。53 × 42cmの楕円形で、床面からの深さは29 cmである。p 4は住居跡北東隅部付近にあり、p 1の南西側に位置する。55 × 44cmの楕円形で、床面からの深さは42 cmである。これらは形態から貯蔵穴の可能性はある。遺構内堆積土の詳細は不明である。p 3内堆積土は3層に分けられる。堆積状況は住居跡外側方向からの流入を呈しているが、この堆積状況からは人為的に埋められたとも考えられる。本遺構からは少量の土器片が出土しており、その内土師器小型甕1点・小型壺2点を図示した。

本遺構は、西側約半分を第241・243号住居跡に、北側をE-3・8号溝跡に壊されているため残存状況が良くないが、形態の特徴および床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

り、p 4の北側に位置する。52 × 38 cmの楕円形を呈し、床面からの深さは15 cmを測る。p 10は住居跡南東隅部付近にあり、p 3の南西に位置する。40 × 37 cmの不正円形を呈し、床面からの深さは15 cmを測る。p 5～10の性格は判断できないが、p 7・p 8は位置・形態から貯蔵穴の可能性が考えられる。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、その内土師器壺2点・小型甕1点・高坏2点を図示した。

本遺構は、形態の特徴および床面の状況から竪穴住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第 245 号住居跡

(第7・8図、写真図版1・3)

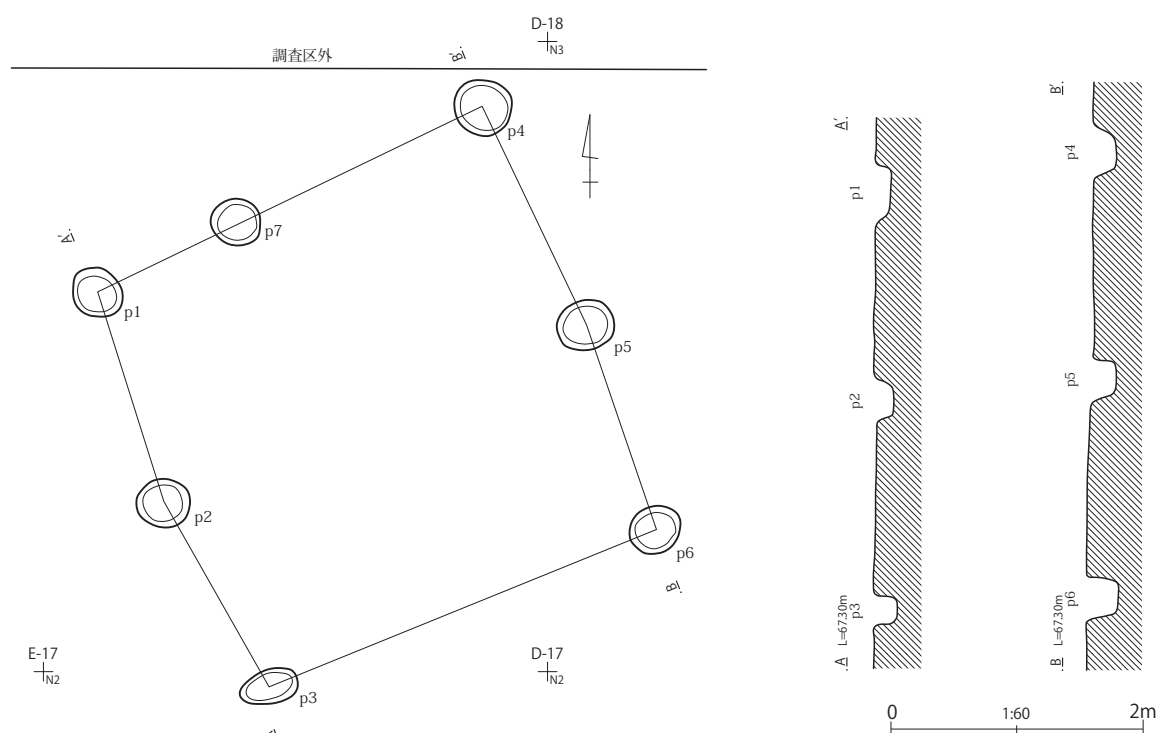
本遺構は、調査区中央部のE 12・13グリッドに位置する。第241・243号住居跡、E-3・8号溝跡と重複しており、本遺構が一番古い。住居跡西半分を第241・243号住居跡に、

第3節 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第10図、写真図版1）

本遺構は、調査区北部のC 17・18、D 17・18グリッドに位置する。平面形態は、7個の柱穴（p 1～7）が南東方向に口を開いた「冂」字状に並んでいる。口の開いている方向を主軸とすると、主軸方向はN 23°Wである。東西の柱列はともに中央の柱穴が若干外側へ広がり中膨れとなっている。柱穴間の距離は、西列のp 1からp 3が1.8 m－1.7 m、東列のp 4からp 6が1.9 m－1.75 mで、ほぼ同じである。北列のp 1からp 4は1.3 m－2.3 mと東側が広がっている。各柱穴の法量・平面形態などはまとめて表に記載している。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは遺物が出土していない。

本遺構は、南東方向に口の開いた「冂」字形に柱穴の並ぶ掘立柱建物跡と考えられるが、建物の性格は不明である。所属時期は遺物が出土していないため不明である。



第10図 第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 単位：cm

番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ
p 1	不正円形	43 × 37	13	p 3	楕円形	47 × 27	17	p 5	不正円形	44 × 38	18	p 7	円形	径38	5
p 2	円形	径44	16	p 4	円形	径46	17	p 6	不正円形	42 × 36	25	—	—	—	—

第4節 井戸跡

第11号井戸跡（第11・12図・写真図版1・3）

本遺構は、調査区南部のE 6・7、F 6・7グリッドに位置する。河道跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。上端部は3.09 × 2.63 mの不正楕円形を呈する。そこから緩やかに中央に向けて傾斜し、1.87 × 1.41 mの楕円形でほぼ垂直に掘り下がる。調査時の所見がないため確証はないが、断面図の底面が井戸跡としては非常に浅いことから、安全面を考慮して底面まで掘りきっておらず、底面の形状および底面までの深さは不明である。断面は上部が外に開いた漏斗状を呈すると思われる。上端部外側の西半分には、4.66 × [2.28] mの隅丸方形を呈すると思われる深さ1～3 cmと非常に浅い掘り込みが確認された。東側は河道跡を掘ったため消

滅したものと考えられる。上端部と外側の浅い掘り込みの間には、上端部に沿う形で小穴 13 個が確認された。浅い掘り込みとその内側に小穴群が確認されたことから、何らかの上屋構造があったのではないかと考えられる。各小穴の平面形態・法量は表にまとめて記載している。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、その内土師器壺 2 点・甕 1 点・小型壺 3 点・坏 1 点・鉢 1 点・脚付鉢 1 点・高坏 1 点・手捏ね土器 3 点・石製模造品 1 点を図示した。

本遺構は、安全面を考慮して底面まで完掘していないが、形態の特徴から井戸跡と考えられる。周囲に浅い方形の掘り込みと小穴が検出されていることから、上屋構造があった可能性が考えられる。所属時期は、出土遺物は河道跡に伴うものが流入したものと考えられ、不明である。

第 12 号井戸跡（第 11・12 図、写真図版 1・3）

本遺構は、調査区北部の B 15・16、C 15・16 グリッドに位置する。E-9 号溝跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。上端幅は 2.46 × 2.39 m の不正円形を呈する。そこから中央に向けて傾斜し、1.19 × 1.10 m の不正円形でほぼ垂直に掘り下がる。安全面を考慮して底面までは掘りきっておらず、底面の形状および底面までの深さは不明である。断面は上部が外側に開いた漏斗状を呈すると思われる。遺構内堆積土は 13 層に分けられる。外側からの流れ込みの様相を呈していることから、自然堆積土と思われる。本遺構からは少量の土器片が出土しており、そのうち内耳鍋 1 点を図示した。

本遺構は、安全面を考慮して底面まで完掘していないが、形態の特徴から井戸跡と考えられる。所属時期は、E-9 号溝跡を壊していること及び出土遺物から中世と考えられる。

第 13 号井戸跡（第 11・12 図、写真図版 1・3）

本遺構は、調査区南部の D 6、E 6 グリッドに位置する。河道跡と重複しており、本遺構のほうが新しいと思われる。上端幅は 3.19 × 2.88 m の楕円形を呈する。そこから中央に向けて緩やかに傾斜し、1.91 × 1.81 m の不正円形の中場が形成される。そこから傾斜がきつくなり、底面に至ると思われる。安全面を考慮して底面までは掘りきっておらず、底面の形状および底面までの深さは不明である。断面は上部が外側に開いた漏斗状を呈すると思われる。本遺構の中場付近から多量の木製品が検出されたが、これらは本遺構の埋没途中に流れ込んだものと考えられる。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは少量の土器片が出土し、その内土師器壺 1 点・高坏 2 点・を図示した。

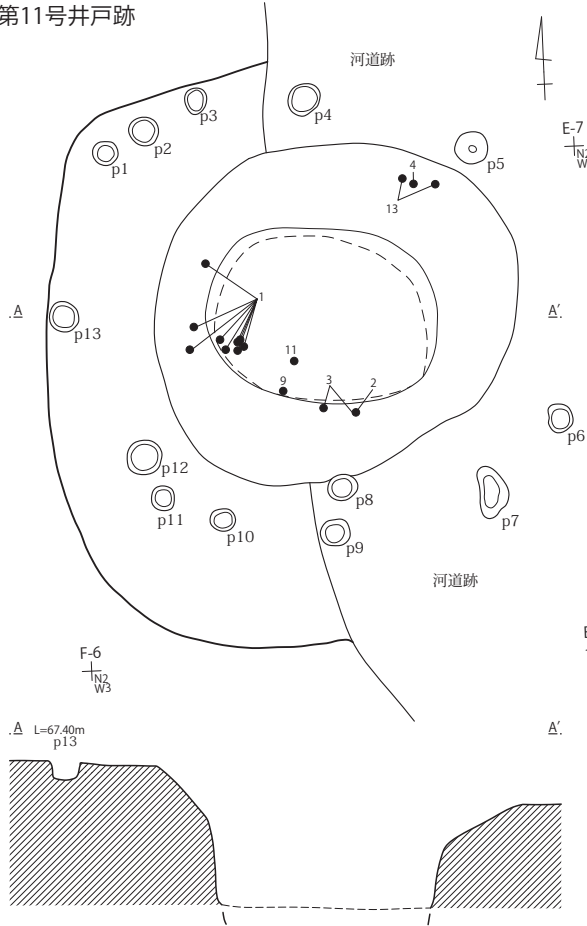
本遺構は、安全面を考慮して底面まで完掘していないが、形態の特徴から井戸跡と考えられる。所属時期は、出土遺物は河道跡に伴うものが流入したものと考えられ、不明である。

第 14 号井戸跡（第 11・12 図、写真図版 1）

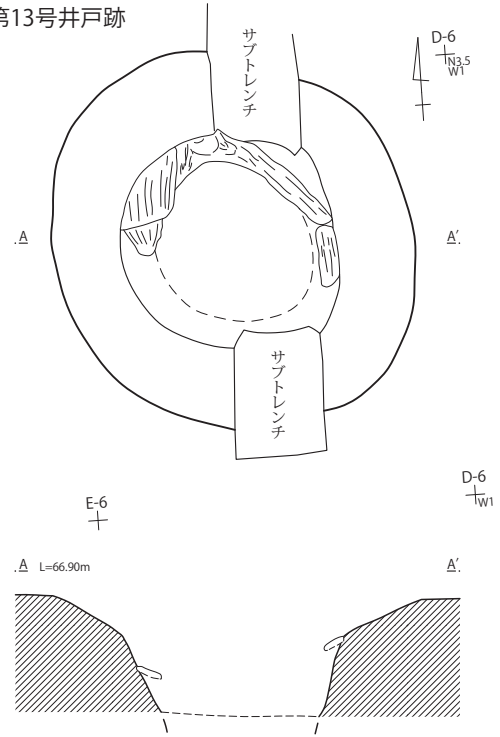
本遺構は、調査区中央部の E 8・9、F 8・9 グリッドに位置する。平面形態は、1.79 × 1.69 m の不正円形を呈する。安全面を考慮して底面までは掘りきっておらず、底面の形状および底面までの深さは不明である。垂直に近い角度で底面まで掘り下がると思われ、断面は細長い台形状を呈すると思われる。上端部東側では、上端部に沿う形で小穴 5 個が確認された。北東部に 2 個、南東部に 3 個分布している。いずれも 15cm 前後の深さを持っていることから柱穴の可能性も考えられるが、本遺構を囲む形では確認されていないため判断がつかない。各小穴の平面形態・法量は表にまとめて記載している。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは少量の土器片が出土しており、その内土師器壺 1 点を図示した。

本遺構は、安全面を考慮して底面まで完掘していないが、形態の特徴から井戸跡と考えられる。所属時期は、出土遺物が河道跡に伴うものが流入したものと考えられ、不明である。

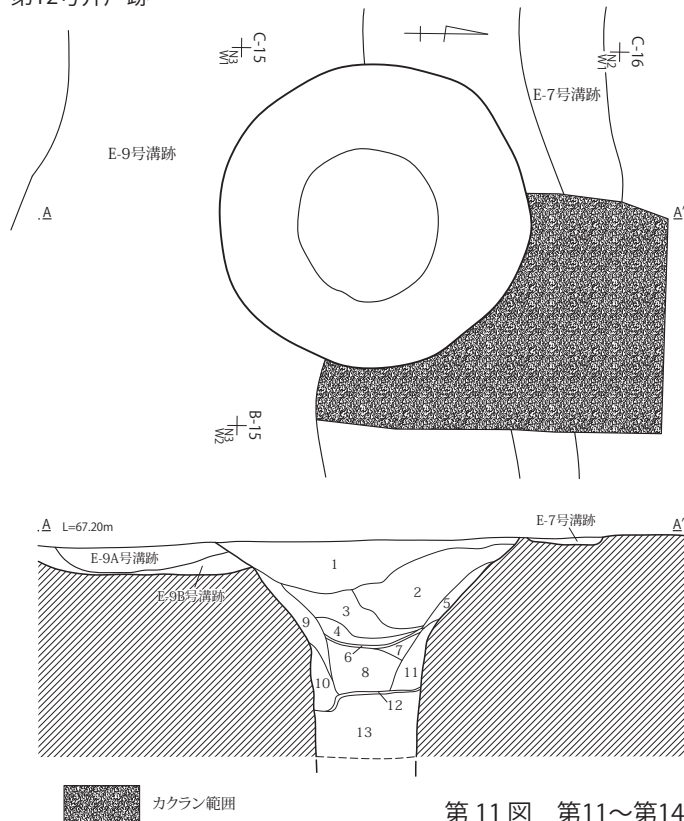
第11号井戸跡



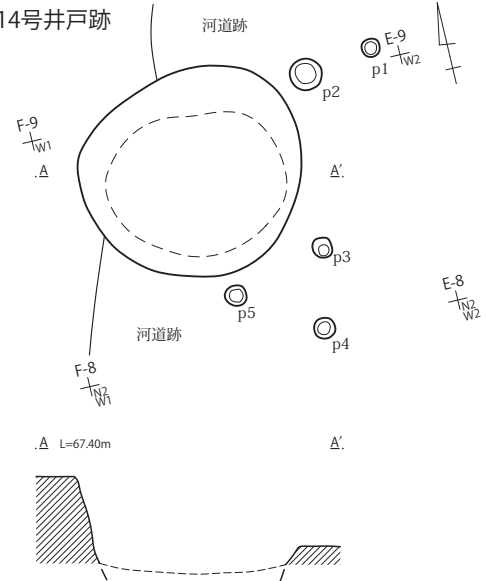
第13号井戸跡



第12号井戸跡



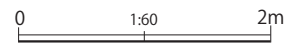
第14号井戸跡



第12号井戸跡

- | | |
|------------|------------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 黄褐色土粒・浅間B軽石少量、拳大円礫微量、円礫多量含む。 |
| 2 灰褐色土 | 拳大円礫・浅間B軽石多量含み、粘性ややあり。 |
| 3 明灰褐色土 | 拳大円礫微量、酸化鉄均一に多量含み、粘性強い。 |
| 4 暗青灰色粘質土 | 酸化鉄斑状に多量含み、粘性強い。 |
| 5 暗灰褐色土 | 浅間B軽石少量含み、粘性強い。 |
| 6 酸化鉄凝集層 | |
| 7 茶褐色土 | 浅間B軽石・酸化鉄多量含み、粘性ややあり。 |
| 8 暗青灰色粘質土 | 4層と同じだが6層で分けられる。 |
| 9 黒褐色土 | 炭化物多量、酸化鉄少量含み、粘性ややあり。 |
| 10 明茶褐色土 | φ3cm円礫・酸化鉄多量含み、しまり悪い。 |
| 11 明茶褐色土 | 10層とほぼ同じ |
| 12 酸化鉄凝集層 | |
| 13 暗青灰色粘質土 | 4・8層より色調が暗く、酸化鉄もあまり含まない。 |

第11図 第11～第14号井戸跡



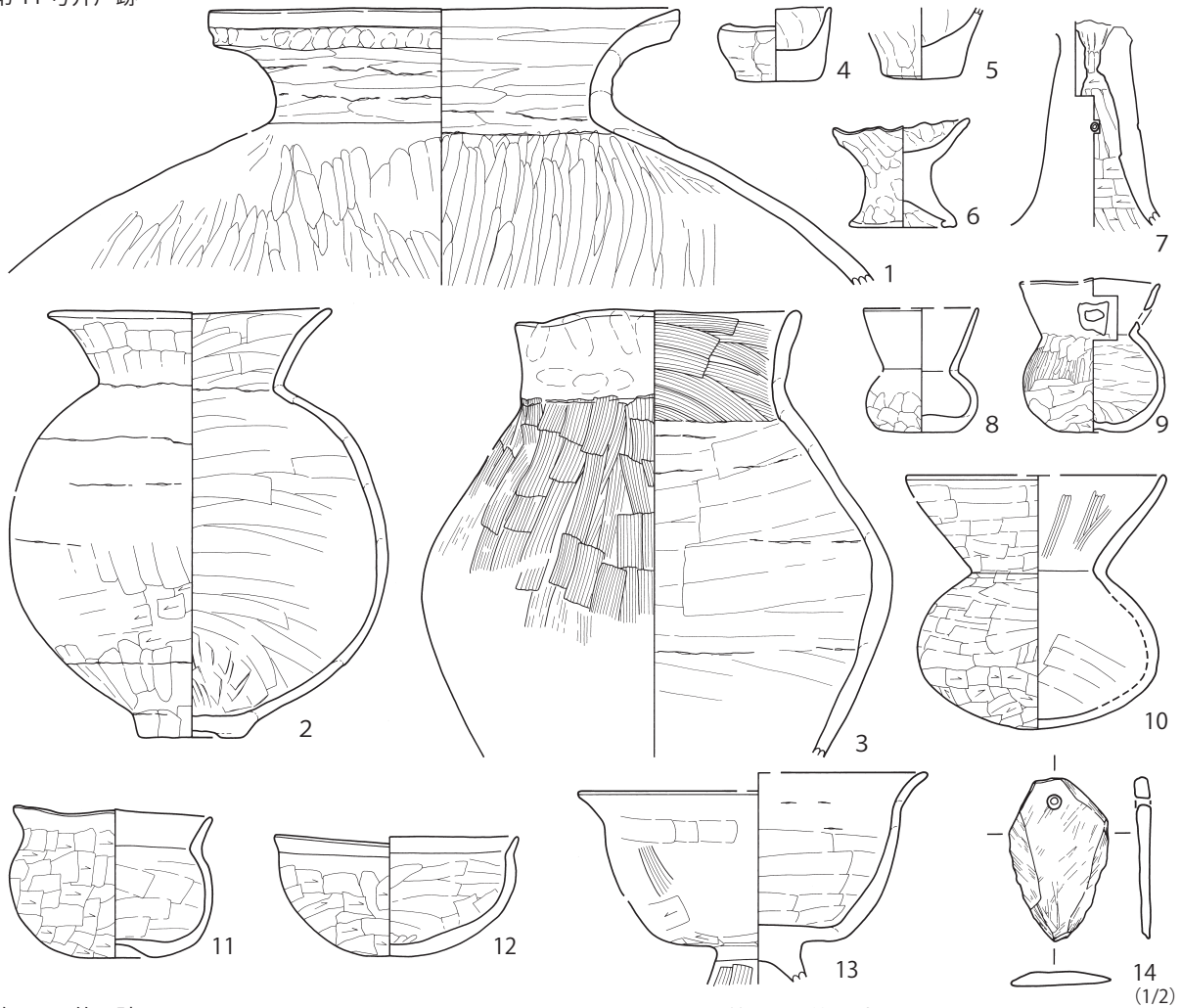
第 11 号井戸跡 単位：cm

番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ
p 1	円形	径 19	4	p 5	円形	径 25	32	p 9	不正円形	24 × 21	9	p 13	円形	径 24	12
p 2	円形	径 23	7	p 6	不正円形	23 × 20	12	p 10	不正円形	20 × 17	11	-	-	-	-
p 3	楕円形	21 × 17	7	p 7	不正楕円形	42 × 23	31	p 11	円形	径 18	9	-	-	-	-
p 4	不正円形	28 × 23	12	p 8	不正円形	24 × 20	12	p 12	円形	径 27	3	-	-	-	-

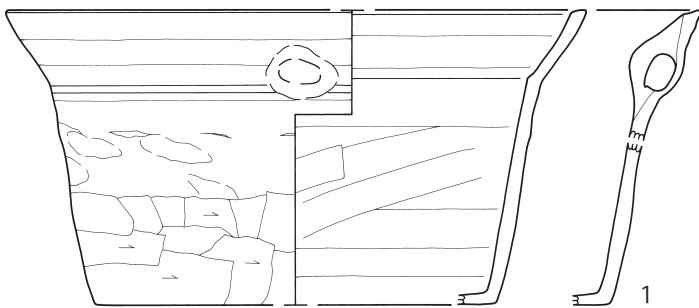
第 14 号井戸跡 単位：cm

番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ
p 1	円形	径 14	16	p 2	円形	径 25	15	p 3	不正円形	17 × 15	18	p 4	円形	径 16	15
p 5	円形	径 17	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

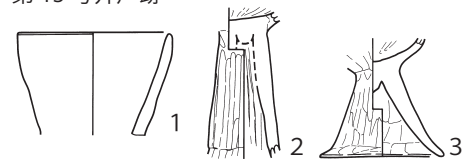
第 11 号井戸跡



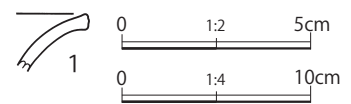
第 12 号井戸跡



第 13 号井戸跡



第 14 号井戸跡



第 12 図 第 11～第 14 号井戸跡出土遺物

第 11 号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
1	古式土師器壺	覆土	25.6	—	[15.0]	普通	良好	明赤褐色	頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は稜をもち内傾する。 外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 口縁～胴上部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 口縁～胴上部ヘラナデ	口縁～胴上部 2/3
2	古式土師器壺	覆土	15.8	5.8	23.0	普通	良好	橙色黒斑	外面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラナデ 胴上部調整不明 胴下部ヘラナデ・ヘラケズリ 底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 口縁～底部ヘラナデ	ほぼ完存
3	古式土師器甕	覆土	15.5	—	[24.2]	やや粗	良好	明赤褐色	胴中部に最大径をもち、胴上部は内傾し頸部はすぼまる。 外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 胴部ハケメ 内面：口縁部ハケメ 胴部ヘラナデ	口縁～胴上部 完存 胴中部 2/3
4	古式土師器手捏ね土器	覆土	6.0	4.6	3.9	普通	良	赤褐色	外面：口縁～体部指ナデ 底部ヘラナデ 内面：口縁～底部指ナデ	完存
5	古式土師器手捏ね土器	覆土	—	4.1	3.9	普通	良	明赤褐色	外面：体部ナデ 底部ヘラナデ 内面：体～底部ナデ	体～底部完存
6	ミニチュア土器 器台	覆土	7.4	5.8	5.9	やや粗	良	橙色	脚端部折り返し。 外面：器受～脚部ナデ 内面：器受部・脚部ナデ	ほぼ完存
7	古式土師器高坏	覆土	—	—	[11.4]	やや粗	良	灰褐色	脚中部に焼成前の刺突痕あり。径 0.5cm。 外面：磨減激しく調整不明 内面：脚上部ヘラケズリ 脚中部絞り痕 脚下部ヘラケズリ	脚部完存
8	古式土師器小型壺	覆土	(6.2)	4.2	6.7	緻密	良好	にぶい褐色	底部は平底で、胴部は扁平な球形を呈する。 外面：口縁～体上部ヨコナデ 体下～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ	口縁部 1/4 体～底部完存
9	古式土師器小型壺	覆土	7.6	3.4	8.3	緻密	良好	灰黄褐色	胴部はやや扁平な球形で、口縁部は外反する。口縁部に焼成後の穿孔あり。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラミガキ後ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
10	古式土師器小型壺	覆土	(14.0)	—	13.7	普通	良好	明赤褐色	底部は丸底で、胴部は扁平な球形を呈する。口縁部は大きく外傾する。 外面：口縁部ヨコナデ 口縁～体中部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヘラミガキ 体上部ナデ 体下～底部ヘラナデ 体部に輪積痕明瞭に残る	口縁部 1/3 体～底部完存
11	古式土師器鉢	覆土	10.9	4.3	8.1	普通	良	橙色	底部外面が抉られ上げ底状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	ほぼ完存
12	古式土師器坏	覆土	13.2	2.6	6.5	普通	良	橙色	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
13	古式土師器脚付鉢	覆土	(19.0)	—	[11.3]	普通	良好	橙色	鉢体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 外面：口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 体部磨減激しく不明瞭・上部ハケメ・下部ヘラケズリ 接合部ナデ 脚上部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ 体部ヘラナデ 脚上部ナデ	口縁～頸部 1/5 体部 1/3 接合部～脚上部 完存
番号	器種・種別	出土層位	法量 0: 推定値 □: 残存値				石材	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			長さ	幅	厚さ	重さ				
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)				
14	石製模造品 剣形	覆土	4.4	2.7	0.4	6.9	滑石	灰オリーブ	鐏をもたない平坦な形状で、表面の側縁を斜めに研磨し断面は扁平な台形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。位置を安定させるため、わずかにくぼませた表面から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存

第 12 号井戸跡出土遺物観察表

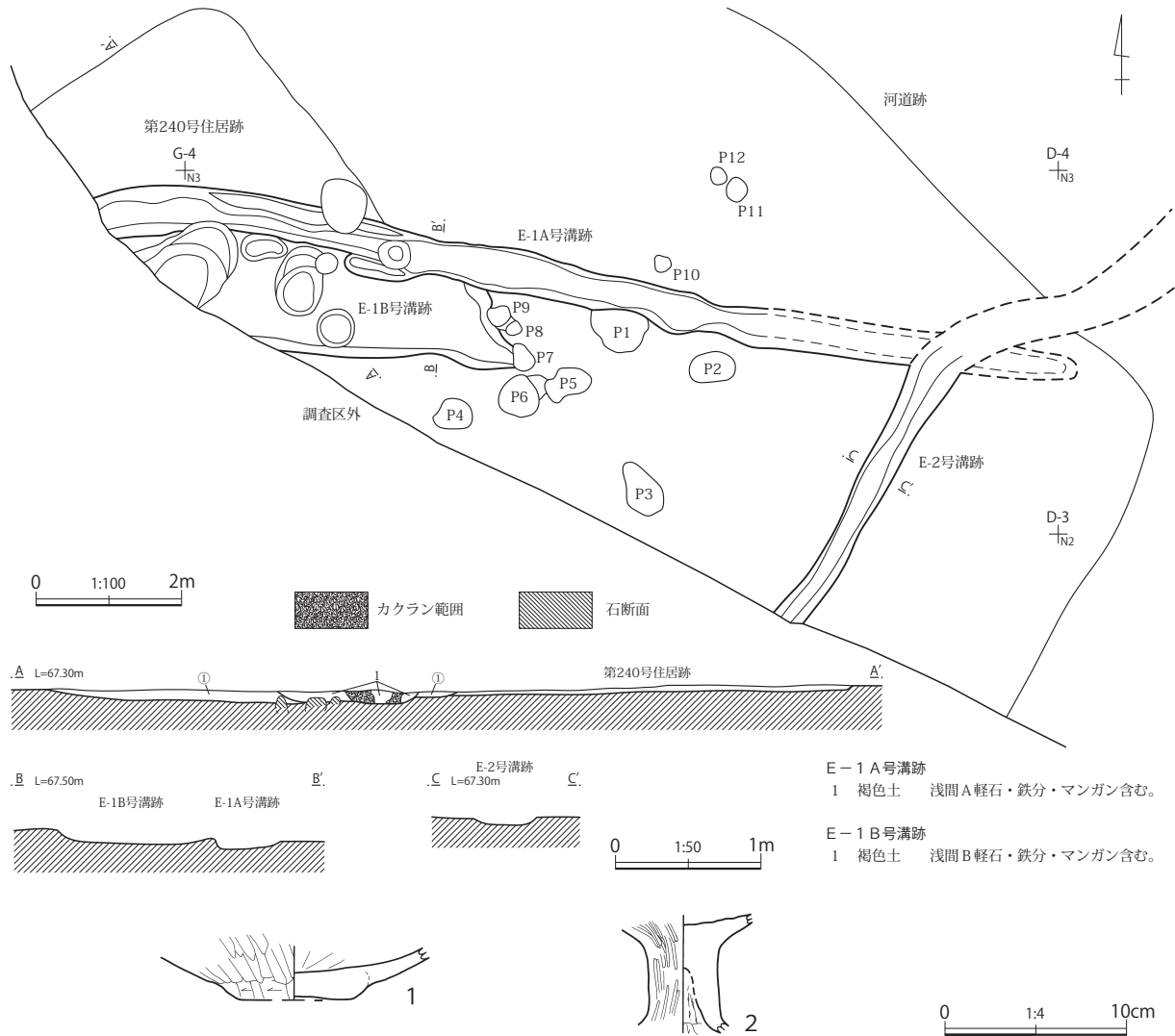
番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
1	土師質土器 内耳鍋	覆土	(30.8)	(21.3)	15.6	普通	良好	黒褐色	胴部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。外面に多量の煤が付着。 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口唇部面取り 口縁～底部ヨコナデ・胴中部は斜方向	口縁～底部 1/4

第 13 号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
1	古式土師器壺	覆土	8.2	—	[5.4]	やや粗	不良	橙色	外内面：磨減激しく調整不明	口縁部ほぼ完存
2	古式土師器高坏	覆土	—	—	[7.7]	緻密	良	橙色	細長い中空の柱状脚部。 外面：脚部ヘラミガキ 内面：坏底部ヘラミガキ 脚部絞り痕	脚部完存
3	古式土師器高坏	覆土	—	6.6	[6.2]	普通	良好	橙色	小型の高坏。 外面：坏下～脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 内面：坏下部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚部ヘラナデ	坏下部 1/3 脚部完存

第 14 号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
1	古式土師器壺	覆土	—	—	[2.9]	普通	良	にぶい橙色	外面：口唇部面取り後刻み目 口縁部ヨコナデ・ハケメ 内面：ヨコナデ	口縁部片



第13図 E-1・E-2号溝跡、E-1号溝跡出土遺物

第E-1号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値	器高					
1	古式土師器壺	底面	—	(6.2)	[2.3]	やや粗	良好	にぶい 橙色	外面：胴下部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：胴下～底部ヘラナデ	胴下～底部 1/2
2	古式土師器高坏	底面	—	—	[6.4]	普通	良好	橙色	短い中空の柱状脚部。 外面：磨減激しく調整不明瞭・ヘラミガキか 内面：脚上部絞り痕 裾部ヘラケズリ	脚部完存

第5節 溝跡

E-1号溝跡（第13図、写真図版2）

本遺構は、調査区南端部のC～G4グリッドに位置する。第239号住居跡、E-2号溝跡と重複しており、本遺構はE-2号溝跡より古く、第239号住居跡よりも新しい。本遺構は幅の狭いE-1A号溝跡と広いE-1B号溝跡の2条に分けられ、新旧関係はE-1A号溝跡の方が新しい。

E-1A号溝跡は、調査区南西隅部から東南東方向に延びており、河道跡の手前で収束している。走行方向はN80°Wである。上端幅が37～76cm、長さが[13.54]m、検出面からの深さは5～18cmを測る。底面の標高は調査区西端部が67.10m、中央付近が67.07mとなっている。東端部は不明であるが、西から東に向かって非常に緩やかに傾斜しているものと考えられる。

E-1B溝跡は、E-1A溝跡の南に隣接している。走行方向はE-1A号溝跡とほぼ同じで、E・Fグリッ

ド境付近で収束する。上端幅は [94]cm、長さが [3.21] m、検出面から底面までの深さは 10cm である。底面は平坦ではなく、調査区際に深さ 6～9 cm の小穴群が確認された。底面の標高は調査区西端部が 67.12 m、中央付近が 67.10 m、東端部が 67.11 m となっており傾斜は見られない。

遺構内堆積土は、E-1 A・B 号溝跡ともに単一層である。E-1 A 号溝跡には浅間 A 軽石、E-1 B 号溝跡には浅間 B 軽石が堆積している。本遺構からは少量の土器片が出土しており、その内土師器壺 1 点・高坏 1 点を図示した。

本遺構は、走行方向がほぼ同じであるため一連の名称を付けたが、時代の異なる遺構と考えられる。E-1 A 号溝跡は、覆土に浅間 A 軽石が含まれていることから所属時期は近世以降と考えられ、性格については不明である。E-1 B 号溝跡は、覆土中に浅間 B 軽石が含まれていることから所属時期は平安時代後期以降と考えられ、性格については不明である。

E-2 号溝跡（第 13 図、写真図版 2）

本遺構は、調査区南端部の C 4、D 3・4 グリッドに位置する。E-1 号溝跡、河道跡と重複しており、本遺構が一番新しい。調査区南端部ほぼ中央から北東方向に伸びており、河道跡の手前で約 2 m 東へ屈曲し、また北東方向へ伸びていく。走行方向は N 31° E である。上端幅は 34～(80) cm、長さは直線距離で [8.54] m、総延長で [9.12] m、検出面から底面までの深さは 3～5 cm である。底面の標高は調査区南端部が 67.10 m、屈曲部が 67.01 m となっており、北に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土の詳細は不明である。本遺構からは土器片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

本遺構は、時期を判断できる遺物は出土していないが、E-1 A 号溝跡よりも新しいことから所属時期は近世以降と考えられ、性格については不明である。

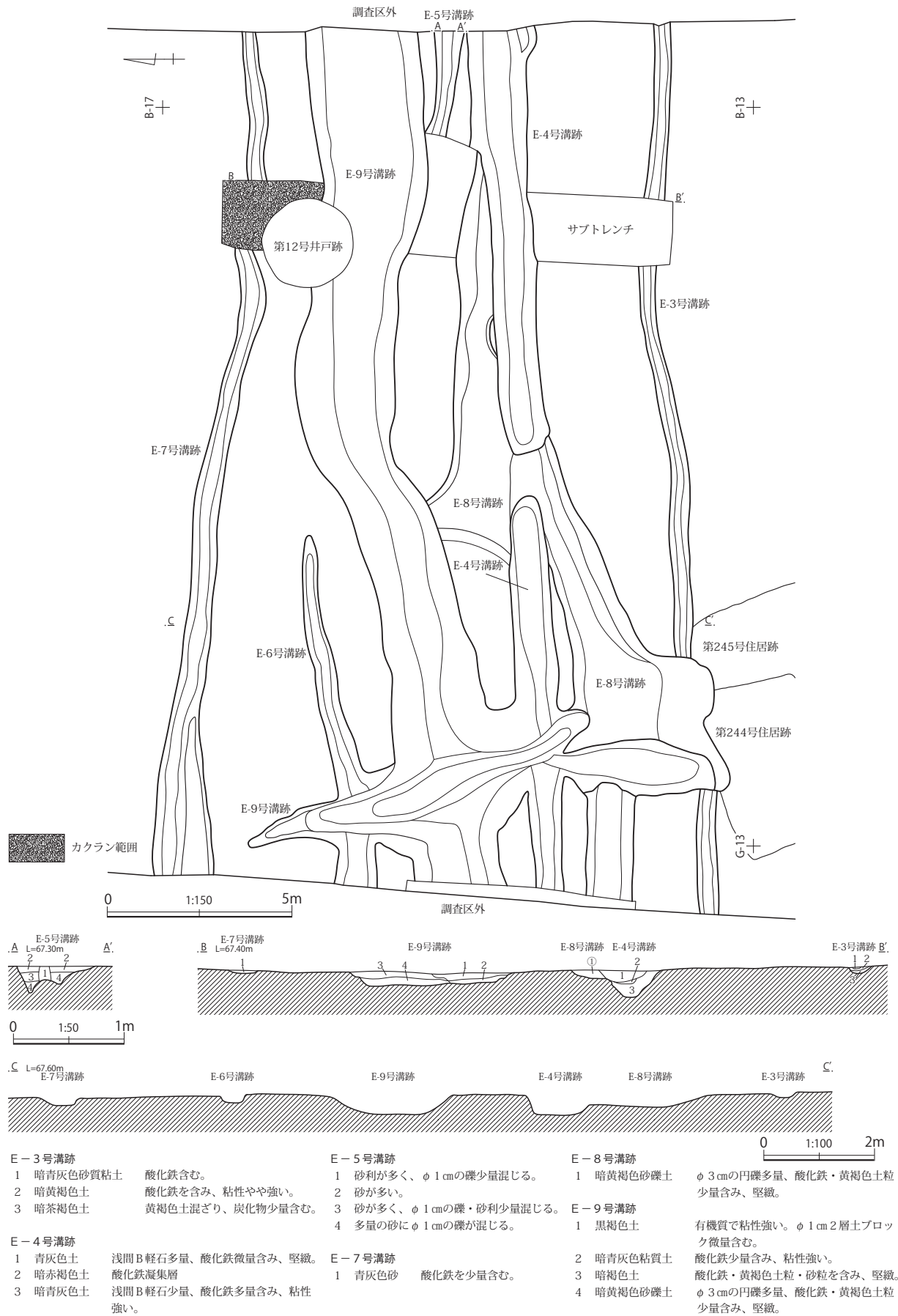
E-3 号溝跡（第 14 図、写真図版 2）

本遺構は、調査区北部の A～G 13 グリッドに位置し、C 地点調査区の C-2 号溝跡群に続くものである。第 244 号住居跡、E-8・9 号溝跡と重複しており、本遺構は E-8・9 号溝跡より古く、第 244 号住居跡よりも新しい。調査区西端部からほぼ真東に伸び、僅かに蛇行しながら調査区を横断している。走行方向は N 87° E である。上端幅は 40～58cm、長さは [2.43] m、検出面から底面までの深さは 9～14cm である。底面の標高は調査区西端部が 68.17 m、調査区中央部が 67.11 m、調査区東端部が 67.00 m となっており、東に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は 3 層に分けられ、自然堆積土と思われる。本遺構からは少量の土器片が出土しているが、図示し得るものはなかった。

本遺構は、C 地点調査区の C-2 号溝跡群に繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の南端部を走る溝跡である。時期を判断できる遺物が出土していないが、C-2 号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部と考えられる。

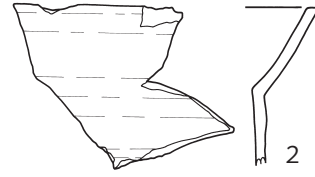
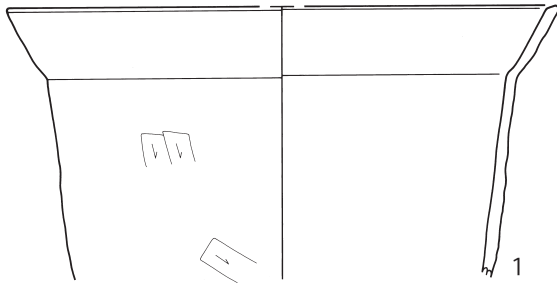
E-4 号溝跡（第 14・15 図、写真図版 2）

本遺構は、調査区北部の A～G 14 グリッドに位置し、C 地点調査区の C-2 号溝跡群に続くものである。E-8・9 号溝跡と重複しており、本遺構は E-9 号溝跡より古く、E-8 号溝跡よりも新しい。調査区西端部から東端部へほぼ真東に直線状に伸び、調査区ほぼ中央の D 14 グリッド部で土橋を持つ。走行方向は N 86° E である。土橋を境に西側は、上端幅が 78～120cm、長さが [10.80] m、検出面から底面までの深さは 8～26cm である。底面の標高は調査区西端部が 66.83 m、中央部が 66.80 m、土橋部が 66.87 m となっており、土橋部から調査区西端部へ緩やかに傾斜している。東側は、上端幅が 113～155cm、長さが [11.58] m、検出面から底面までの深さは 26～46cm である。底面の標高は土橋部が 66.65 m、中央部が 66.64 m、調査区東端部が 66.62 m となっており、ほぼ平坦であるが、土橋部から調査区東端部に向けて非常に緩やかに傾

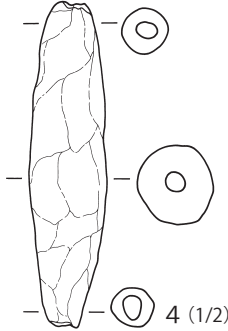
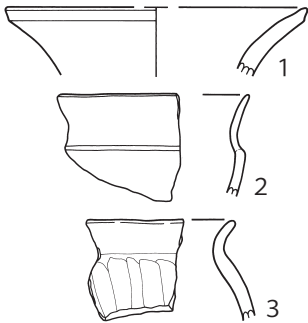


第14図 E-3~9号溝跡

E-4号溝跡



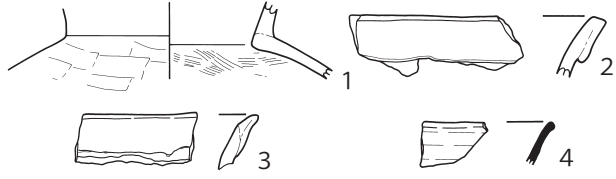
E-5号溝跡



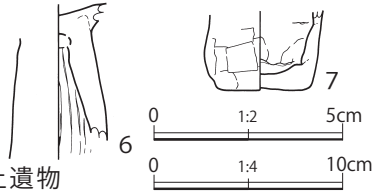
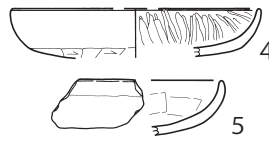
E-6号溝跡



E-8号溝跡



E-9号溝跡



第15図 E-4~6・8・9号溝跡出土遺物

E-4号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値	口径	底径					
1	土師質土器 土鍋	覆土	(29.2)	—	[14.4]	普通	良好	にぶい 黄褐色	体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。外面に煤多量付着。 外面：口縁～胴上部ヨコナデ 胴中部ヘラケズリ 内面：口縁～胴中部ヨコナデ	口縁～胴中部 1/4
2	土師質土器 内耳鍋か	覆土	—	—	[8.4]	緻密	良好	灰色	胴部は直立し、口縁部は外反する。 外内面：ヨコナデ	口縁部片
3	古式土師器 壺	覆土	(15.3)	—	[4.3]	やや粗	良	灰黄色	口縁部は大きく外反し、口縁端部は直立する。 外内面：ヨコナデ	口縁部 1/5
4	青磁 皿	覆土	—	—	[3.5]	緻密	良好	オリーブ 灰色	体部は外傾し、口縁部は水平に開いた後口縁端部が直立気味に立ち上がる。 外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 丸鑿状工具施紋	口縁部片

E-5号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)				胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値	口径	底径	器高					
1	古式土師器 壺	覆土	(16.0)	—	[3.6]	やや粗	良	明赤褐色	口縁部は外反し、端部は直立する。 外内面：口縁端部ヨコナデ 口縁部磨減激しく調整不明	口縁部片	
2	古式土師器 小型甕	覆土	—	—	[5.6]	やや粗	良	明赤褐色	胴上部に稜をもち、内側へ屈曲後口縁部が外傾する。 外面：磨減激しく調整不明 内面：口縁部～胴上部ヨコナデ 口縁接合部棒状工具ナデ	口縁～胴上部片	
3	古式土師器 小型甕	覆土	—	—	[5.3]	普通	良	にぶい 橙色	外内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ	口縁～胴上部片	
番号	器種・種別	出土層位	法量 0: 推定値 []: 残存値				焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
4	土錘	覆土	8.6	2.0	2.0	28.9	良好	にぶい 橙色	中央部の膨らんだ管状の土錘。ナデ整形で端部は面取りされている。	完存	

E-6号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値	口径	底径					
1	古式土師器 壺	覆土	—	—	[3.0]	普通	良	赤褐色	口縁部に粘土を巡らし、折り返し口縁部に稜を形成。 外面：口唇部面取り 磨減激しく調整不明 内面：ハケメ	口縁部片
2	古式土師器 甕	覆土	—	—	[4.6]	普通	良	橙色	外内面：口縁部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ	口縁～胴上部片

E-8号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	古式土師器壺	覆土	—	—	[4.0]	普通	良	浅黄褐色	外面：頸部ヨコナデ 胴上部磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 内面：頸部ヨコナデ 胴上部ハケメ	頸～胴上部片
2	古式土師器壺	覆土	—	—	[3.2]	普通	良	明赤褐色	折り返し口縁。 外面：磨減激しく調整不明 内面：口縁部ヨコナデ	口縁部片
3	古式土師器壺	覆土	—	—	[2.8]	普通	良	にふい 橙色	折り返し口縁。 外内面：口縁部ヨコナデ	口縁部片
4	須恵器 環	覆土	—	—	[2.4]	普通	良好	黄灰色	外内面：ロクロナデ	口縁部片

E-9号溝跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	須恵器 環	覆土	(12.1)	(7.2)	3.7	普通	良好	黄灰色	外面：口縁～体部ロクロナデ 底部回転系切り 内面：口縁～底部ロクロナデ	1/5
2	土師器 環	覆土	(10.8)	—	[2.7]	普通	良	橙色	体部に稜をもつ。 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ	口縁～体部 1/4
3	土師器 環	覆土	(12.0)	—	[3.4]	普通	良	明黄褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：磨減激しく調整不明	口縁～体部 1/4
4	土師器 環	覆土	(13.2)	—	[2.5]	普通	良	橙色	浅い体部。 外面：口縁部磨減激しく調整不明 体部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ後ヘラミガキ	口縁～体部 1/4
5	土師器 環	覆土	—	—	[2.9]	普通	良	明黄褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体部磨減激しく不明瞭・ヘラケズリか 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ	口縁～体部 1/4
6	古式土師器 高環	覆土	—	—	[8.1]	やや粗	良	橙色	中空の柱状脚部。 外面：磨減激しく調整不明 内面：絞り痕	脚部ほぼ完存
7	古式土師器 手握ね土器	覆土	—	4.2	[4.1]	やや粗	良	明赤褐色	外面：体～底部ヘラナデ 内面：体～底部ナデ	体～底部完存

斜している。遺構内堆積土は3層に分けられ、浅間B軽石を含んでいる。堆積状況は自然堆積土と思われる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、その内土師器壺1点・内耳鍋2点・青磁皿1点を図示した。

本遺構は、C地点調査区のC-2号溝跡群に繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の1つである。調査区中央部で土橋状を呈していることから、本遺構が機能していた時期は南北方向に進む通路があった可能性が考えられる。所属時期は、浅間B軽石が堆積していること及び出土遺物から平安時代後半以降と考えられる。

E-5号溝跡(第14・15図、写真図版2・3)

本遺構は、調査区北部東端部のA14・15、B15グリッドに位置し、C地点調査区のC-2号溝跡群に続くものである。検出された範囲では重複する遺構はない。調査区東部のサブトレンチからはほぼ真東に延び、調査区外へと続く。走行方向はN84°Wである。上端幅は43～83cm、長さは[2.95]m、検出面から底面までの深さは5～13cmである。底面の標高は西側が67.00m、東側が66.99mとなっており、傾斜はしていない。遺構内堆積土は4層に分けられる。砂・砂利が多く、水平に堆積している様相から、氾濫による一括堆積の可能性が考えられる。本遺構からは少量の土器片が出土しており、そのうち土師器壺1点・小型甕2点・土錘1点を図示した。

本遺構は、C地点調査区のC-2号溝跡群に繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の1つである。C-2号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部であると考えられる。

E-6号溝跡(第14・15図、写真図版2)

本遺構は、調査区北部のD15・16、E15・16、F15、G15グリッドに位置する。E-9号溝跡と重複しており、本遺構のほうが古い。調査区西端部からはほぼ真西方向にわずかに蛇行しながら延び、調査区中央のD15・16グリッドで収束する。走行方向はN82°Eである。上端幅は38～109cm、長さは[9.78]m、検出面から底面までの深さは8～20cmである。底面の標高は調査区西端部が67.05m、中央付近が67.01m、東端部が67.01mとなっており、西から東へ非常に緩やかに傾斜している。遺構内堆積土の詳細は不明である。

本遺構からは少量の土器片が出土しており、そのうち土師器壺1点・甕1点を図示した。

本遺構は、C地点調査区のC-2号溝跡群に繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の1つである。C-2号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部であると考えられる。

E-7号溝跡（第14図、写真図版2）

本遺構は、調査区北部のA~G 16グリッドに位置し、C地点調査区のC-2号溝跡群に続くものである。重複する遺構はない。調査区西端部から東南東方向に延び、C 16グリッドの所でほぼ真東方向に進路を変え、調査区を横断する。走行方向はN 85°Wである。上端幅は35~132cm、長さは[2.29] m、検出面から床面までの深さは6~13cmである。調査区西端部では、南側に最大幅75cm、長さ[4.28] mのテラスを有する。底面の標高は、調査区西端部が67.04 m、中央付近が67.00 m、調査区東端部が66.66 mとなっており、西から東へ緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は単一層である。本遺構からは少量の土器片が出土しているが、図示し得るものはなかった。

本遺構は、C地点調査区のC-2号溝跡群に繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の北端部を走る溝跡である。C-2号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部と考えられる。

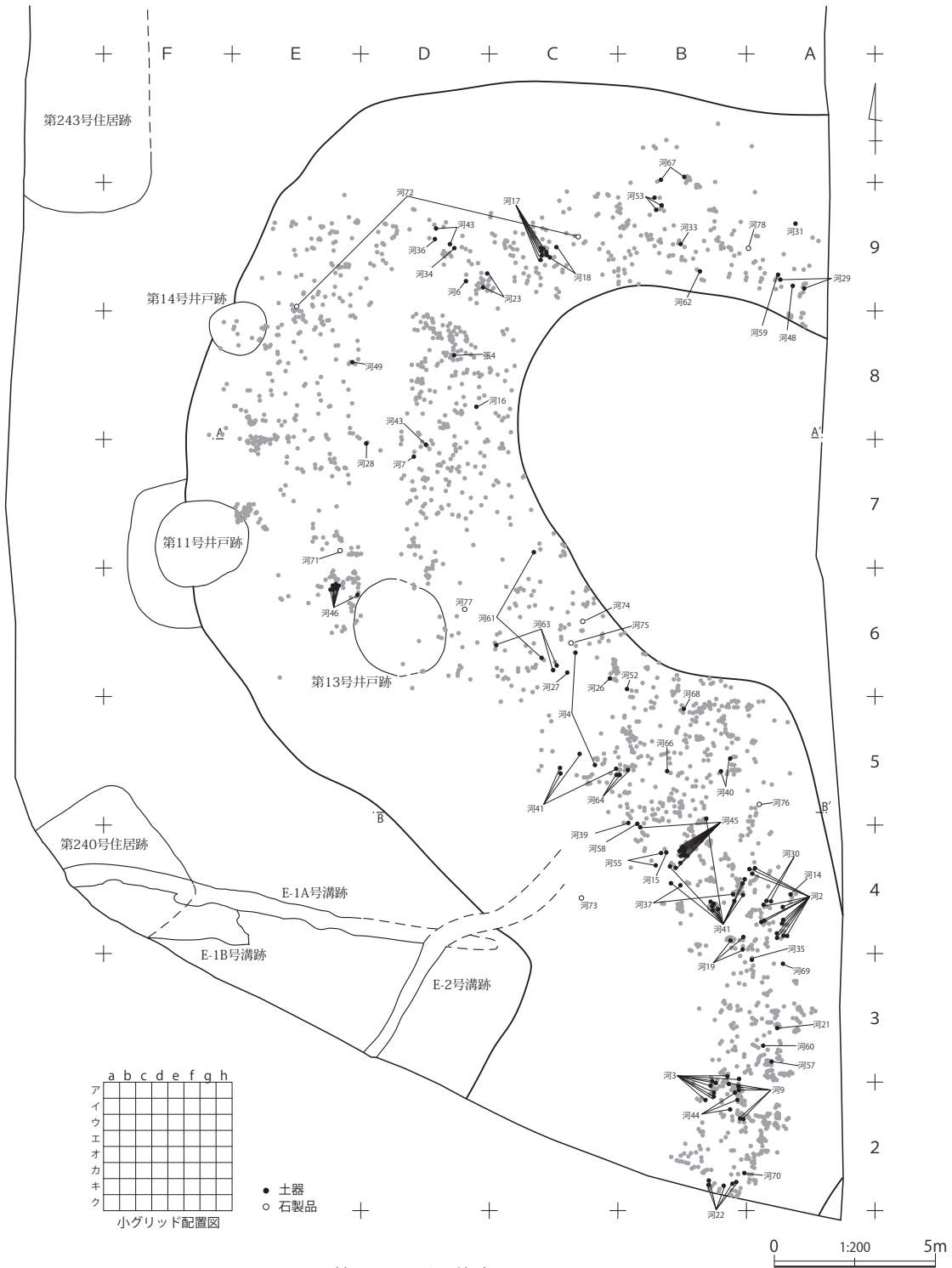
E-8号溝跡（第14・15図、写真図版2）

本遺構は、調査区北部のA~C 14、D 14・15、E~G 13・14グリッドに位置し、C地点調査区のC-2号溝跡群に続くものである。第243・244号住居跡、E-4・9号溝跡と重複しており、本遺構はE-4・9号溝跡よりも古く、第243・244号住居跡よりも新しい。調査区西端部からほぼ真東方向に延び、F 13・14グリッドの所で約20°北に振れて東進し調査区を横断する。走行方向はN 83°Eである。E・F 13グリッドの所で南へ大きく張り出し、D 15グリッドの所では北に突き出ている。上端幅は1.25~3.83 m、長さは[23.8] mである。底面は西側が低く、東側は一段高いテラス状になっており、検出面から底面までの深さは20~33cm、テラス部までの深さは6~20cmである。底面の標高は調査区西端部が66.88 m、中央付近が66.94 m、東端部が66.89 mで、中央付近が深くなっている。テラス部の標高は西端部が67.00 m、中央付近が66.93 m、調査区東端部が66.92 mで、東側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は単一層である。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち土師器壺3点・須恵器坏1点を図示した。

本遺構は、C地点調査区のC-2号溝跡群と繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の1つである。C-2号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部であると考えられる。

E-9号溝跡（第14・15図、写真図版2）

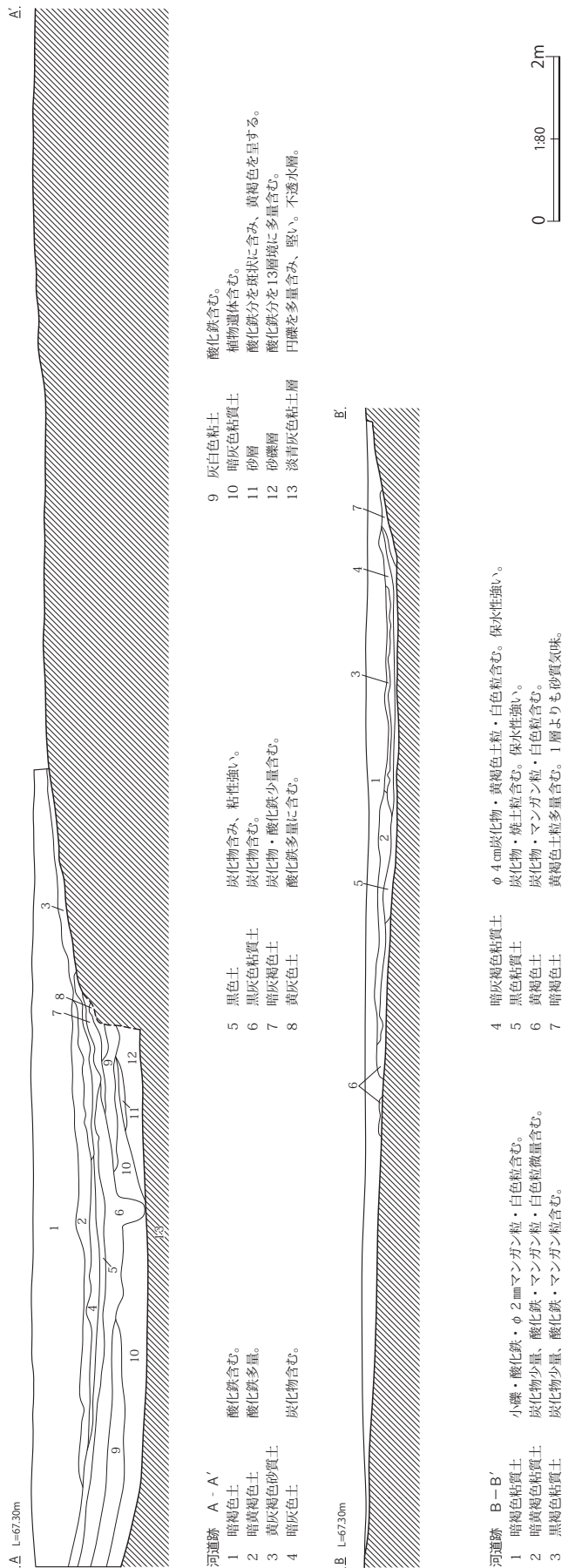
本遺構は、調査区北部のA~D 15、E 14・15、F 13~16、G 14・15グリッドに位置し、C地点調査区のC-2号溝跡群に続くものである。E-3・4・6・8号溝跡と重複しており、本遺構が一番新しい。調査区西端部からほぼ真東方向に延び、僅かに蛇行しながら調査区内を横断する。走行方向はN 81°Eである。上端幅は1.73~3.10 m、長さは[23.5] m、検出面から底面までの深さは17~34cmである。底面の標高は調査区西端部が66.83 m、調査区中央付近が66.81 m、調査区東端部が66.79 mとなっており、非常に緩やかに東へ傾斜している。調査区西端部付近のF 13~16グリッド部では、直交する南北方向に溝状の掘り込みが見られる。この溝状の掘り込みが一番深くなっており、後から形成された別遺構の可能性も考えられる。南北方向の溝状の掘り込みは、上端幅が0.55~(3.15) m、長さが12.78 mである。南北両端部にテラスを有し、中央部が一番深い。底面の標高は、北側テラス部が66.94 m、南側テラス部が66.81 m、中央部



第 16 図 河道跡平面図

が 66.73 m である。遺構内堆積土は 4 層に分けられる。堆積状況では 1・2 層と 3・4 層で分かれて、新旧 2 条の溝跡となる可能性が考えられる。本遺構からは多量の土器片が出土しており、そのうち土師器 4 点・高坏 1 点・手捏ね土器 1 点・須恵器 1 点を図示した。

本遺構は、C 地点調査区の C-2 号溝跡群と繋がり、調査区北部を東流する溝跡群の 1 つである。C-2 号溝跡群と一連のものであることから、奈良時代から平安時代以降の長期間にわたって機能していた溝跡群の一部であると考えられる。



第17図 河道跡断面図

第6節 河道跡

河道跡（第16～24図、写真図版2～6）

本遺構は、調査区南部から中央部のA 2～10、B 2～10、C 2～10、D 2・4～10、E 5～10、F 6～8グリッドに位置し、C地点調査区の河道跡と繋がるものである。第11・13・14号井戸跡、E-2号溝跡と重複しており、本遺構が一番古い。調査区南東隅部から北上し、時計回りの方向に半円形を描いたのち東進し、C地点調査区の河道跡へと続いていく。本遺構の南側の続きは、約20m南に位置するA地点調査区では確認されていない。このことから、本遺構はA地点調査区と本調査区の間を南東方向に進み、本調査区でS字状に蛇行し、C地点調査区内を東進するものと考えられる。上端幅は5.9～11.3mで、北側の幅が狭くなっている。土層断面図から底面幅は5.54mで、底面の標高は北上部分のB-B'んで66.66m、半円部分のA-A'で65.76mとなっており、底面は南から北に向かって傾斜していると思われる。遺構内堆積土は、A-A'で13層、B-B'で7層に分けられる。いずれもレンズ状堆積の様相を呈しており、自然堆積と考えられる。A-A'の13層は地山であり、A-A'の5層とB-B'の5層が対応するものと考えられる。

A 6～8、B 6～8、C 7・8グリッド部分は、河道跡右岸のS字状に蛇行する張出部分にあたり、ここから土坑10基、小穴150個が確認された。これらの遺構は河道跡に伴うものと考え、河道跡内土坑・小穴とした。平面形態・法量は表にまとめて記載している。これらの小穴群から掘立柱建物跡を確認することは出来なかった。周辺から勾玉1点・白玉8点・石製模造品24点、祭祀に用いたと考えられる土器が多数出土していることから、河道と関連した祭祀が執り行われていた可能性が考えられる。河道内からはガラス小玉1点・勾玉1点・石製模造品3点が出土しているが、これらは張出部付近から出土していることか



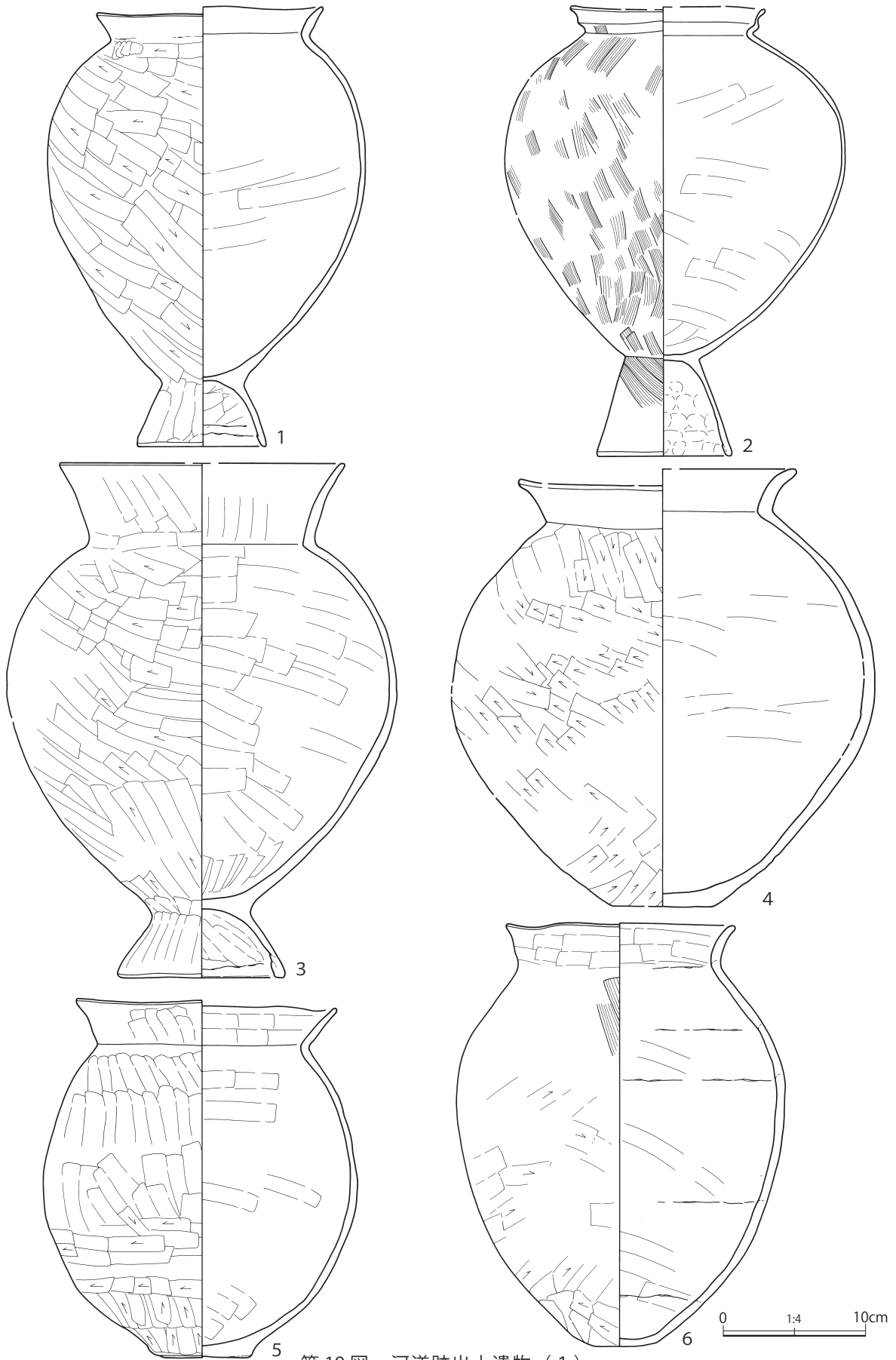
ら、張出部から流れ込んだものと思われる。本遺構からは、河道跡・張出部あわせて大量の土器片・石製品・鉄製品が出土しており、そのうち河道跡で土師器甕7点・台付甕2点・S字状口縁台付甕2点・小型甕7点・壺5点・小型壺15点・埴2点・甑3点・高坏9点・器台3点・坏5点・鉢8点・手捏ね土器2点・土玉1点・石製紡錘車2点・石製模造品3点・勾玉1点・ガラス小玉1点、右岸張出部で土師器甕2点・S字状口縁台付甕1点・壺2点・小型壺14点・埴2点・高坏9点・器台1点・脚付小型壺1点・鉢1点・手捏ね土器2点・石製模造品24点・石製模造品原石1点・勾玉1点・白玉8点を図示した。

本遺構は、C地点調査区の河道跡と繋がるもので、調査区南東隅部をS字状に蛇行するものである。河道跡右岸の蛇行部内側では土坑と多量の小穴・祭祀に用いたと思われる遺物が確認され、何らかの祭祀が執り行われた可能性が考えられる。C地点調査区の河道跡と一連のものであることから、本遺構は五領期後半～末頃には河道跡として機能し、和泉期の間にはほぼ埋没していたものと考えられる。

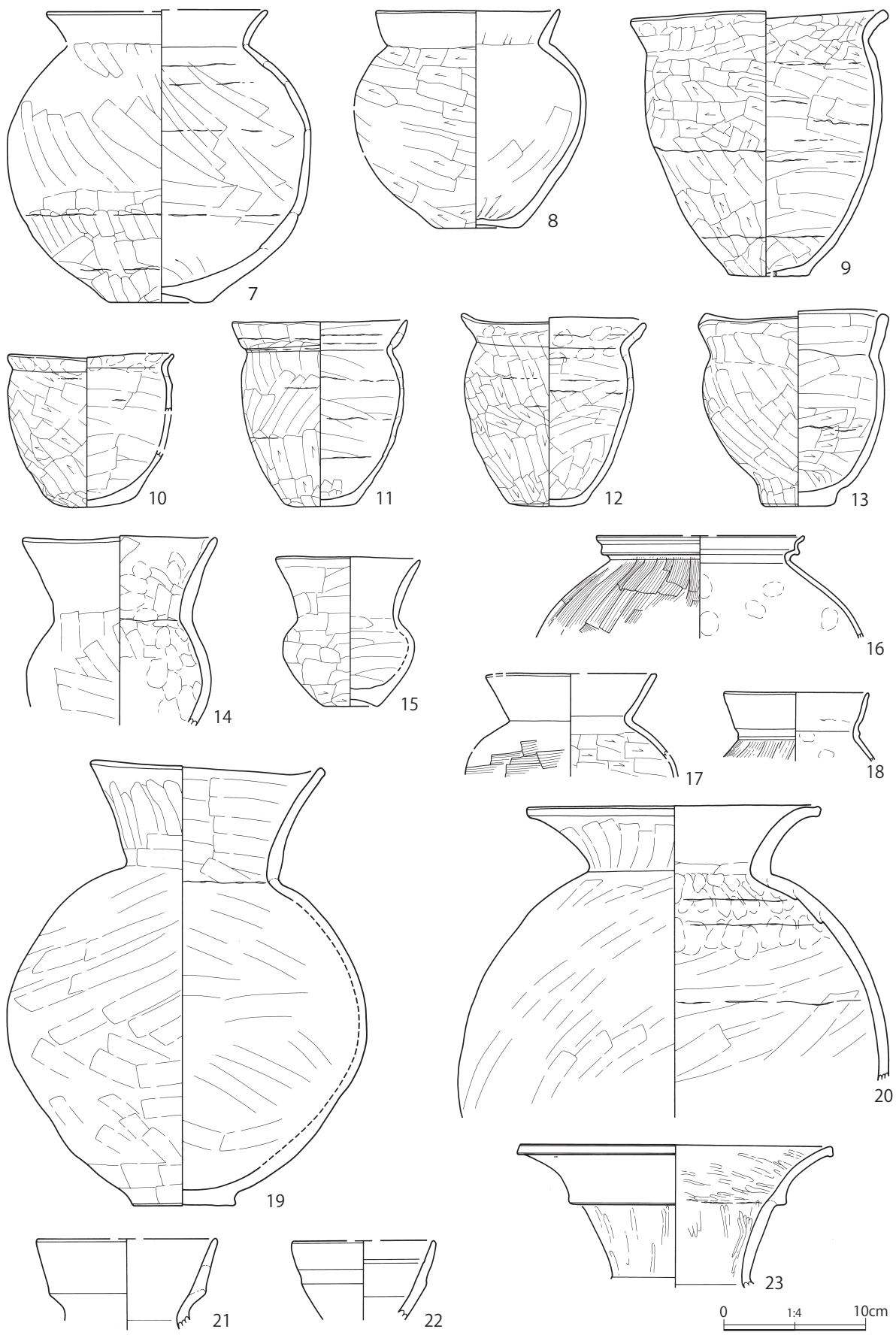
河道跡内側遺構 単位：cm

番号	平面形	規模	深さ	備考	番号	平面形	規模	深さ	備考
S K 1	楕円形	41 × 35	18		s k 4	楕円形	98 × 51	11	テラスを有し南壁中央が外に張り出す
S K 2	楕円形	72 × 60	9		s k 5	楕円形	119 × 76	10	東側にテラスを有する
s k 1	長楕円形	[162] × 25	4	東端部膨らみ、幅 [44]cmとなる	s k 6	不正楕円形	173 × 110	13	南東壁が出島状に内側へ張り出す
s k 2	隅丸長方形	134 × 110	12	底面は瓢形を呈する	s k 7	不正楕円形	263 × 174	41	両端部にテラスを有する
s k 3	不正形	70 × 66	3	2個のピットが連結したような形	s k 8	長楕円形	[209] × 39	4	北へ膨らむ円弧状を呈する

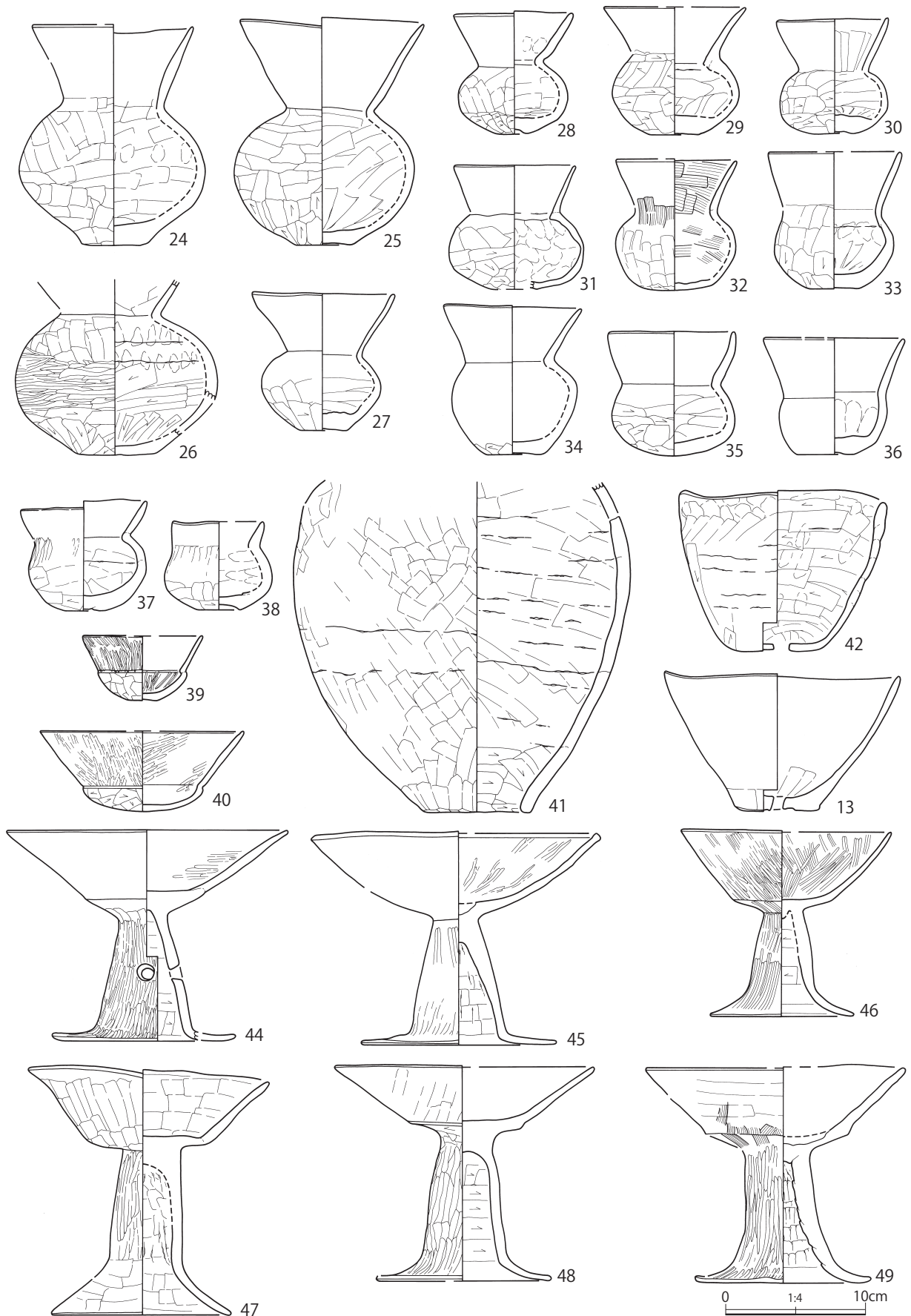
番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ
p 1	円形	径 30	18	p 39	円形	径 17	4	p 77	円形	径 13	5	p 115	円形	径 13	4
p 2	円形	径 20	11	p 40	円形	径 10	4	p 78	円形	径 10	3	p 116	楕円形	19 × 15	9
p 3	円形	径 18	13	p 41	円形	径 11	3	p 79	円形	径 12	4	p 117	楕円形	30 × 24	8
p 4	円形	径 24	12	p 42	円形	径 11	4	p 80	円形	径 11	2	p 118	円形	径 18	5
p 5	楕円形	18 × 15	5	p 43	楕円形	29 × 24	10	p 81	楕円形	16 × 12	2	p 119	楕円形	38 × 34	4
p 6	楕円形	28 × 21	9	p 44	円形	径 16	7	p 82	円形	径 9	2	p 120	楕円形	15 × 10	5
p 7	円形	径 30	12	p 45	円形	径 10	2	p 83	円形	径 19	4	p 121	円形	径 11	3
p 8	円形	径 33	8	p 46	円形	径 11	7	p 84	円形	径 10	3	p 122	円形	径 13	5
p 9	円形	径 24	11	p 47	楕円形	35 × 31	5	p 85	円形	径 10	2	p 123	円形	径 14	7
p 10	円形	径 21	8	p 48	円形	径 20	5	p 86	円形	径 12	6	p 124	円形	径 26	2
p 11	円形	径 34	13	p 49	円形	径 14	6	p 87	楕円形	30 × 24	7	p 125	円形	径 20	2
p 12	楕円形	31 × 22	12	p 50	円形	径 13	6	p 88	円形	径 19	3	p 126	楕円形	21 × 16	4
p 13	円形	径 41	16	p 51	円形	径 26	10	p 89	円形	径 15	3	p 127	円形	径 24	11
p 14	円形	径 12	2	p 52	円形	径 10	2	p 90	円形	径 15	2	p 128	円形	径 18	17
p 15	円形	径 20	7	p 53	円形	径 9	4	p 91	円形	径 13	1	p 129	円形	径 13	5
p 16	円形	径 15	3	p 54	円形	径 10	3	p 92	円形	径 12	4	p 130	楕円形	[54] × 49	22
p 17	円形	径 19	6	p 55	楕円形	30 × 24	3	p 93	円形	径 10	2	p 131	楕円形	39 × 31	16
p 18	楕円形	28 × 24	4	p 56	円形	径 8	2	p 94	円形	径 12	6	p 132	楕円形	31 × 26	5
p 19	円形	径 28	14	p 57	円形	径 10	2	p 95	円形	径 11	6	p 133	楕円形	28 × 23	3
p 20	楕円形	18 × 14	3	p 58	円形	径 9	2	p 96	円形	径 12	4	p 134	円形	径 26	7
p 21	円形	径 30	9	p 59	楕円形	24 × 20	5	p 97	円形	径 13	4	p 135	楕円形	29 × 24	4
p 22	楕円形	42 × 26	15	p 60	円形	径 11	4	p 98	円形	径 12	3	p 136	円形	径 17	5
p 23	円形	径 22	11	p 61	円形	径 10	4	p 99	円形	径 13	4	p 137	円形	径 20	6
p 24	円形	径 19	21	p 62	円形	径 12	2	p 100	円形	径 14	5	p 138	円形	径 12	2
p 25	楕円形	32 × 16	4	p 63	楕円形	25 × 18	10	p 101	円形	径 11	5	p 139	円形	径 22	2
p 26	円形	径 15	2	p 64	楕円形	45 × 31	12	p 102	円形	径 12	4	p 140	楕円形	31 × 21	4
p 27	円形	径 14	2	p 65	楕円形	17 × 11	8	p 103	円形	径 12	7	p 141	円形	径 23	3
p 28	円形	径 16	7	p 66	円形	径 14	7	p 104	円形	径 13	3	p 142	楕円形	26 × 20	5
p 29	楕円形	30 × 24	6	p 67	円形	径 12	4	p 105	楕円形	37 × 27	7	p 143	楕円形	20 × 17	6
p 30	楕円形	26 × 18	6	p 68	円形	径 11	3	p 106	楕円形	32 × 21	3	p 144	楕円形	16 × 12	10
p 31	円形	径 14	5	p 69	円形	径 12	4	p 107	不正円形	径 14	2	p 145	円形	径 14	4
p 32	楕円形	23 × 19	8	p 70	円形	径 12	3	p 108	円形	径 15	4	p 146	円形	径 21	5
p 33	円形	径 21	5	p 71	円形	径 13	9	p 109	楕円形	39 × 30	2	p 147	円形	径 12	9
p 34	円形	径 18	3	p 72	円形	径 23	11	p 110	円形	径 18	9	p 148	円形	径 21	8
p 35	楕円形	39 × 21	10	p 73	円形	径 13	4	p 111	円形	径 20	13	p 149	円形	径 25	6
p 36	円形	径 14	3	p 74	円形	径 11	2	p 112	円形	径 17	6	p 150	円形	径 20	11
p 37	円形	径 24	8	p 75	円形	径 13	4	p 113	円形	径 33	9				
p 38	円形	径 30	3	p 76	円形	径 12	2	p 114	円形	径 27	6				



第19図 河道跡出土遺物(1)

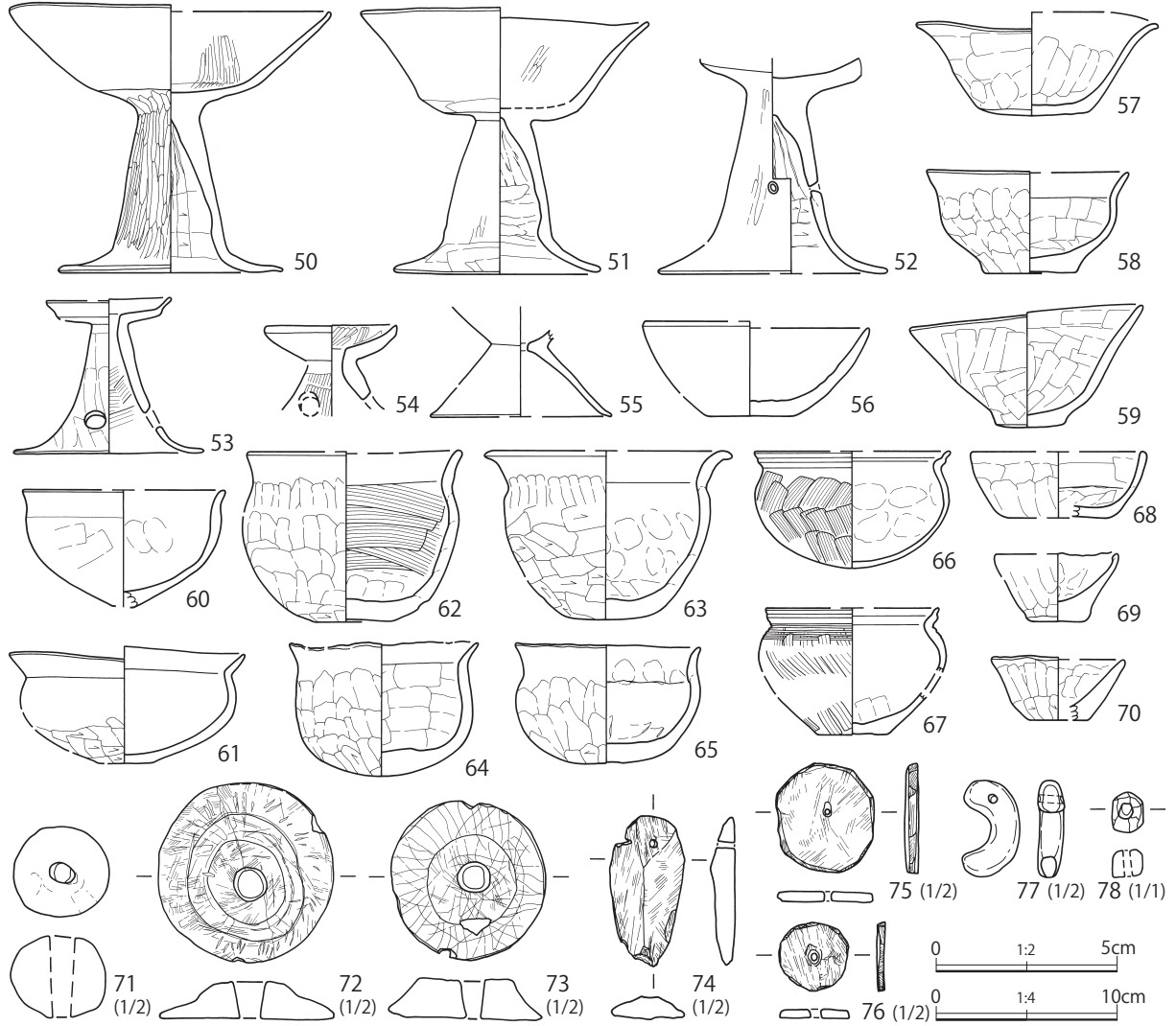


第 20 图 河道跡出土遺物 (2)

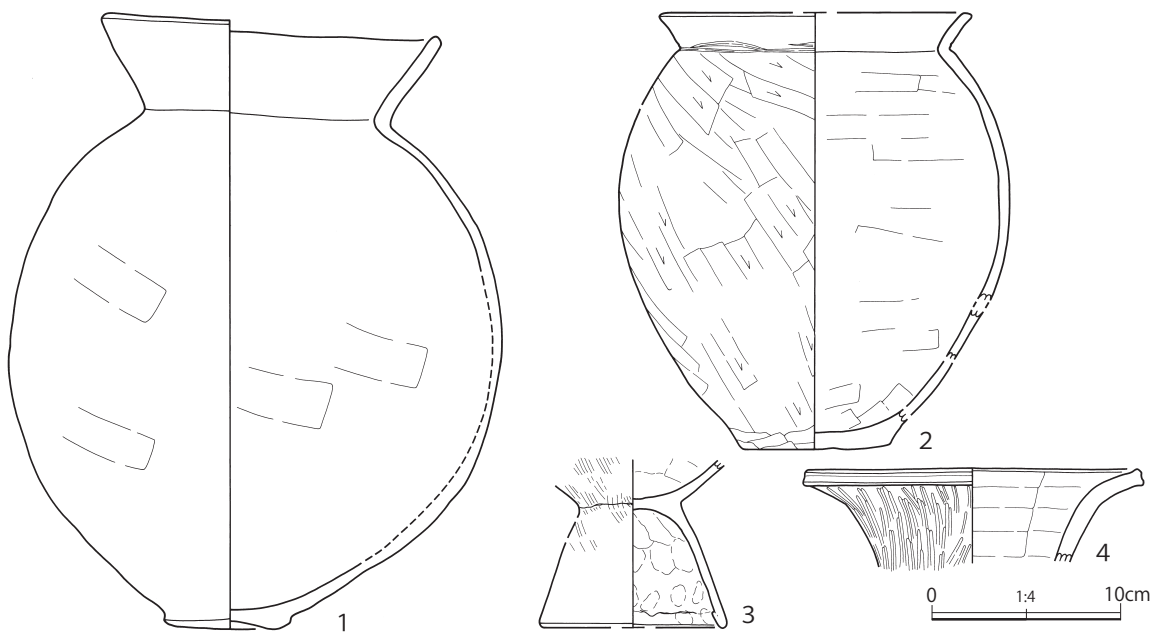


第 21 图 河道跡出土遺物 (3)

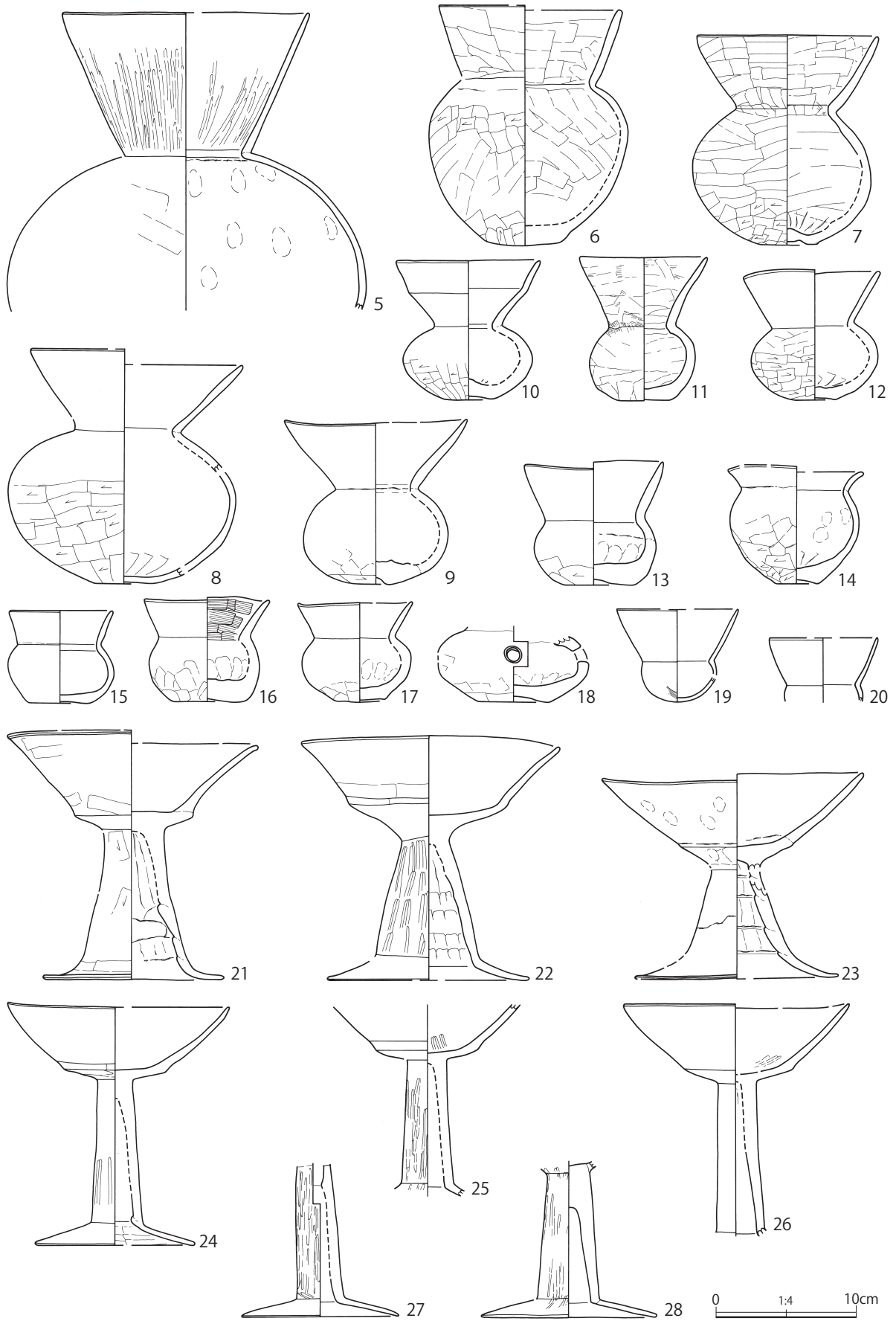
河道跡



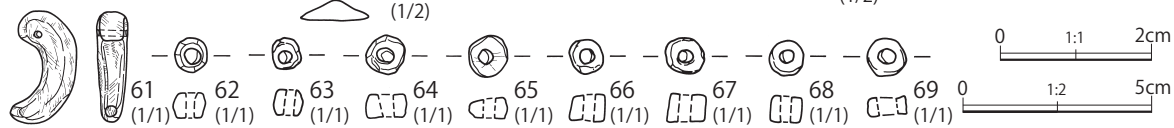
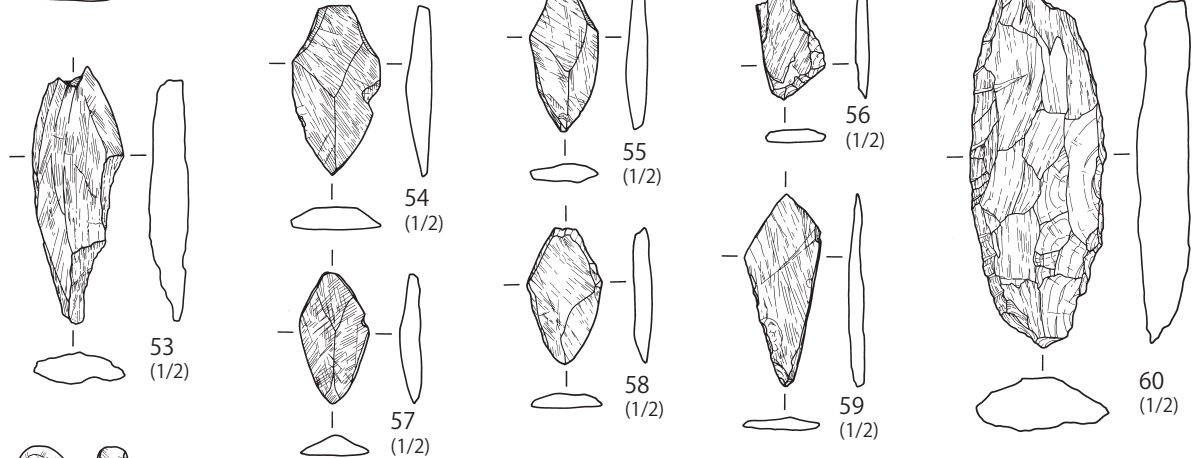
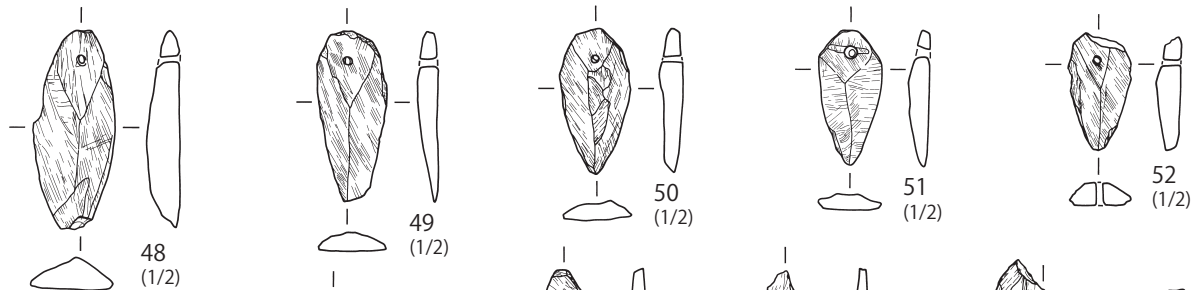
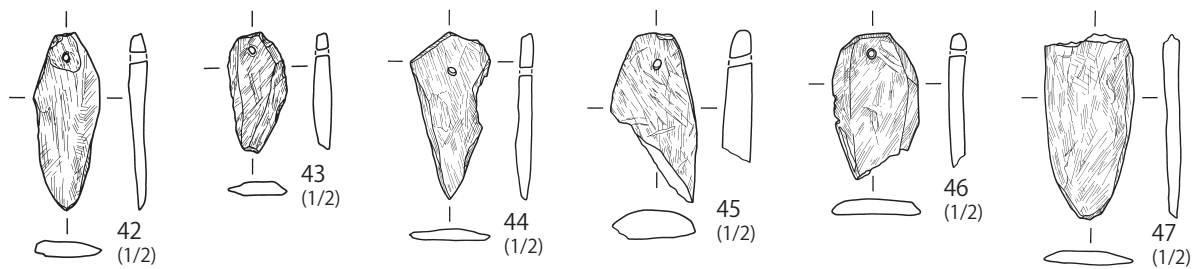
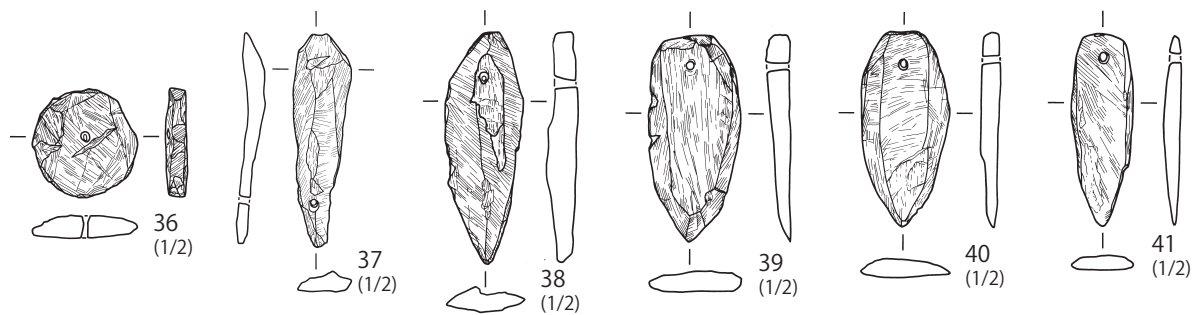
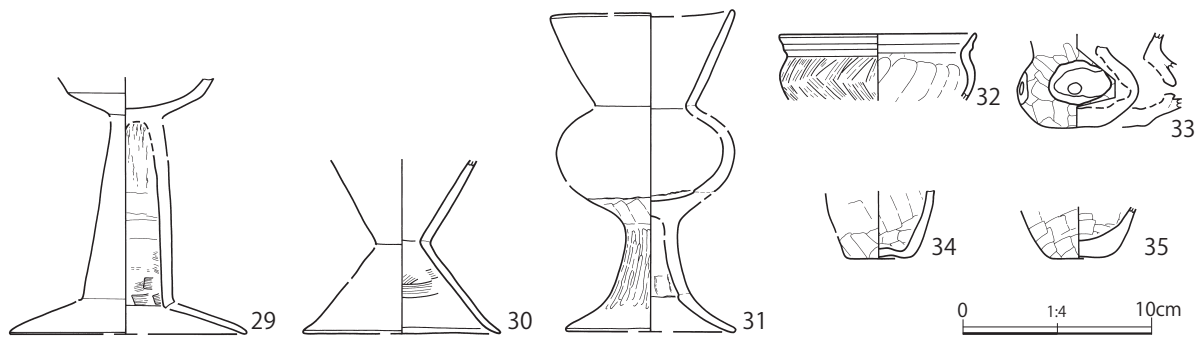
河道跡張出部



第22図 河道跡出土遺物(4)・河道跡張出部出土遺物(1)



第23图 河道跡張出部出土遺物（2）



第24图 河道跡張出部出土遺物(3)

河道跡出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0:推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
1	古式土師器 台付甕	A-2イ a・イ b 覆土	15.9	9.1	30.8	普通	良好	明黄褐色	台端部折り返し。 外面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 台部ヘ ラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 台部ヘラナデ・ナデ	ほぼ完存
2	古式土師器 S字状口縁 台付甕	A-3ウ a A-4 ウ a・オ b・ カ b・カ c・キ a・キ b・キ c B-4 覆土	13.8	9.5	31.5	普通	良好	にぶい 橙色	台端部折り返し、内面台上部砂粒充填。 外面：口縁部ヨコナデ 胴～台上部ハケメ 台下部磨減激しく調整不明 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 台部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
3	古式土師器 台付甕	A-2ア a A-3 B-2ア f・ア g・ア h・イ f B-3ク g B-4 覆土	(20.0)	11.8	36.1	普通	良好	明褐色	口縁部は大きく、外反する。 外面：口縁部ヘラナデ 胴部ヘラケズリ 台部ヘラナデ・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 台部ナデ 台端部面取り	口縁部 1/4 胴上部 1/3 胴下～台部完存
4	古式土師器 甕	C-5オ g C-6 カ f 覆土	19.6	(7.0)	30.6	やや粗	良	浅黄色	底部は平底で、胴部は中位に最大径をもつ算盤玉状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上～中部ヘラナデ 胴下～底部ナデ	ほぼ完存
5	古式土師器 甕	A-2 A-2イ a B-2イ h・ウ h 覆土	18.7	7.4	25.2	やや粗	良好	褐色	円盤状の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。底面4ヶ所に粘土貼付。 外面：口縁～胴中部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～底部ヘラナデ	ほぼ完存
6	古式土師器 甕	D-9キ g 覆土	16.1	—	29.6	普通	良	灰黄褐色	底部は丸底状を呈し不安定。 外面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラ ナデ 胴上部ハケメ 胴中～底部ヘラケズリ 内面：口縁～底部ヘラナデ	ほぼ完存
7	古式土師器 甕	D-7イ d 覆土	(15.6)	7.4	20.5	緻密	やや不良	橙色	胴部は球形を呈する。 外内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	口縁部 1/4 体～底部 ほぼ完存
8	古式土師器 甕	A-2 A-2ア a・ ア b・イ a・ イ b A-3 覆土	13.0	15.2	5.6	やや粗	良好	明黄褐色	胴上部に最大径を持ち、底部に向けて窄まる。 外面：口縁部ヨコナ デ 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴～底部ヘラナデ	ほぼ完存
9	古式土師器 甕	A-2 B-2 B-2 ア h・イ h・ ウ h B-3 ク h 覆土	18.2	5.6	18.6	普通	良好	明赤褐色	外面：口縁部ヘラナデ・指頭圧痕 胴部ヘラケズリ 底部ヘラナデ 内面： 口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラケズリ 胴～底部ヘラナデ	ほぼ完存
10	古式土師器 小型甕	A-2 B-2 E h 覆土	11.7	5.8	10.8	やや粗	良好	赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 胴～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 胴～底部ヘラナデ	ほぼ完存
11	古式土師器 小型甕	A-2 A-2イ b・ ウ b 覆土	12.4	5.1	13.1	普通	良好	赤褐色	胴部は内湾気味に立ち上がる。外面口縁部に輪積み痕を残す。 外面：口縁～胴中部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～底部ヘラナデ 輪積み痕顕著に残る	ほぼ完存
12	古式土師器 小型甕	A-2 E a 覆土	13.1	5.6	13.5	普通	良	にぶい 橙色	胴部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 頸～胴上部ヘラナデ 胴中～底部ヘラケズリ 内面：口縁～頸部ヨコナデ・指頭圧痕 胴～底部ヘラナデ	ほぼ完存
13	古式土師器 小型甕	A-2イ a 覆土	13.4	5.2	13.8	やや粗	良	明赤褐色	円盤状の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁～底部 ヘラナデ 内面：口縁～胴中部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ	完存
14	古式土師器 小型甕	A-4 A-4オ c 覆土	13.7	—	[13.4]	普通	良	明赤褐色	胴上部に最大径を持ち、底部に向けて窄まる。 外面：口縁部ヨコナデ 胴上～中部磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 内面：口縁～胴中部ナデ・指頭圧痕後ヘラナデ	口縁～胴中部 ほぼ完存
15	古式土師器 小型甕	B-4イ c B-4 下層覆土	10.2	3.8	10.4	普通	良	明褐色	上げ底の底部から胴部は大きく開いて立ち上がり上位に最大径をもつ。 外面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 体～底部ナデ	ほぼ完存
16	古式土師器 S字状口縁 台付甕	D-8キ h 覆土	(14.7)	—	[7.1]	普通	良好	灰黄色	外面：口縁部ヨコナデ 胴上部斜位・肩部横位ハケメ 内面：口縁部 ヨコナデ 胴上部ナデ・指頭圧痕	口縁部～胴上部 1/4
17	古式土師器 甕	C-9オ d 覆土	12.0	—	7.1	緻密	良	灰白色	窄まった頸部から口縁部が直線的に外傾して立ち上がる。口唇部面取り。 外面：口縁～胴上部ヨコナデ 胴中部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ 胴上部ヘラケズリ	口縁～胴上部 2/3
18	古式土師器 小型甕	C-7 C-9 C-9 オ d・オ e 覆土	10.2	—	[4.7]	緻密	不良	浅黄橙色	上部の長いS字状口縁を呈し、頸部の屈曲は非常に緩い。 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 胴上 部ナデ・指頭圧痕	口縁～胴上部 ほぼ完存
19	古式土師器 壺	B-3 B-3ア h B-4キ h・ク g・ク h 覆土	16.6	7.4	31.4	普通	良	にぶい 橙色	円盤状の底部で、球胴を呈する。口縁部は直立気味に立ち上がる。 外内面：口縁部ヨコナデ 口縁～底部ヘラナデ	ほぼ完存
20	古式土師器 壺	A-3ク a 覆土	20.6	—	[21.9]	やや粗	良好	にぶい 橙色	胴部は球形を呈すると思われる。口縁部は短く外反し、口縁部は面取り。 外面：口縁部ヨコナデ 口縁～胴中部磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 内面：口縁部ヨコナデ 頸～胴中部ヘラナデ・指頭圧痕	口縁～胴上部 完存 胴中部 2/3
21	古式土師器 壺	A-2ア b A-3 オ b B-4 覆土	(12.8)	—	[6.3]	緻密	良	にぶい 橙色	頸部はきつく外反し、そこから口縁部が直線的に立ち上がる。 外内面：ヨコナデ	口縁～頸部 1/3
22	古式土師器 壺	B-2キ f・キ g・キ h 覆土	(10.2)	—	[5.5]	普通	良	橙色	口縁中部に稜をもつ。 外内面：ヨコナデ	口縁部 1/3

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
23	古式土師器壺	D-9カh・キ h 覆土	22.0	—	[10.0]	緻密	良	浅黄色	二重口縁壺。口縁端面面取り。 外面：磨減激しく不明瞭 口縁上部ヨコナデか 口縁下部ヘラミガキか 内面：磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか	口縁部ほぼ完存
24	古式土師器小型壺	B-2エ h 覆土	10.6	4.8	15.7	緻密	良好	橙色	中位に最大径をもつ算盤玉状の体部で、口縁部は外傾する。 外面：口縁部ヨコナデ 頸～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸～底部ヘラナデ 体中部指頭圧痕	口縁部 3/4 体～底部完存
25	古式土師器小型壺	A-3エ a 覆土	13.1	4.0	16.2	普通	良好	明褐色	体部はやや扁平な球形を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
26	古式土師器小型壺	C-6キ h 覆土	—	5.6	[12.5]	緻密	良好	にぶい 橙色	胴部は扁平な球形を呈する。 外面：頸部ヨコナデ 胴上部ヘラナデ 胴中部ヘラミガキ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：頸部ヘラナデ 胴上部指頭圧痕 胴中部ヘラケズリ 胴下～底部幅の狭い工具によるヘラケズリ	頸部 1/4 胴～底部 ほぼ完存
27	古式土師器小型壺	C-6キ e 覆土	10.1	3.4	9.8	緻密	良好	にぶい 橙色	体部は算盤玉状を呈し、口縁上部は屈曲し内傾する。 外面：口縁～体上部ヨコナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
28	古式土師器小型壺	D-7ア a 覆土	8.5	2.4	8.7	やや粗	良	橙色	底部は上げ底で、体部は扁平な球形を呈する。 外面：口縁部磨減激しく調整不明 体上～中部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕 体～底部ヘラナデ	完存
29	古式土師器小型壺	A-9キ c・キ d 覆土	(10.2)	3.3	9.1	普通	良好	にぶい 橙色	中位に最大径をもつ算盤玉状の体部。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ	口縁部 1/5 体～底部完存
30	古式土師器小型壺	A-4オ b 覆土	8・0	3.0	8.2	緻密	良	橙色	下部に最大径をもつ扁平な球形の胴部。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラナデ 体上部ナデ 体下部ヘラナデ	完存
31	古式土師器小型壺	A-9ウ d 覆土	8.8	(3.0)	8.8	普通	良好	明赤褐色	最大径が口径より大きい扁平な体部。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラケズリ後ナデ 体下部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ・指頭圧痕	口縁～体上部 ほぼ完存 体下部 1/4
32	古式土師器小型壺	B-3カ f 覆土	(8.6)	4.5	(9.3)	緻密	良好	明赤褐色	上位に最大径をもつ扁平の体部。 外面：口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ 体～底部ヘラナデか 内面：口縁～体下部ハケメ 底部ナデ	口縁部 1/2 体～底部 ほぼ完存
33	古式土師器小型壺	B-9エ d 覆土	(9.5)	3.2	9.7	やや粗	良	明褐色	中位に最大径をもつ算盤玉状の体部。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラケズリ後ナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体上部指頭圧痕 体下～底部ヘラナデ	口縁部 1/5 体～底部完存
34	古式土師器小型壺	D-9オ f 覆土	9.6	4.0	10.6	普通	良好	にぶい 橙色	底部外縁に粘土を貼り付け上げ底状を呈する。体部は丸みを帯びて立ち上がり、上部に最大径をもつ。 外面：口縁～体部磨減激しく調整不明 底部ヘラケズリ 内面：磨減激しく調整不明	ほぼ完存
35	古式土師器小型壺	A-3 A-3ア a A-4 A-4ク b 覆土	9.0	—	8.8	普通	良好	にぶい 黄橙色	丸底の底部で体部は扁平な球形を呈する。 外面：ヨコナデ ヘラケズリ 内面：ヨコナデ ナデ	ほぼ完存
36	古式土師器小型壺	D-9エ e 覆土	10.0	4.0	8.3	やや粗	良	明赤褐色	底部はわずかに上げ底で、体部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁部磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 体～底部ヘラナデ	ほぼ完存
37	古式土師器小型壺	B-4エ d・オ h B-4 覆土	(9.0)	2.9	7.8	普通	良	にぶい 黄橙色	中位に最大径をもつ算盤玉状の体部。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部不明瞭だがヘラミガキ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	4/5
38	古式土師器小型壺	A-3ウ a 覆土	6.5	3.0	6.3	普通	良	にぶい 橙色	底部は上げ底を呈し、中位に最大径をもつ扁平な体部。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラケズリ後ナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ	ほぼ完存
39	古式土師器埴	B-5ク a 覆土	(8.7)	1.8	4.6	緻密	良	浅黄褐色	小型丸底埴。 外面：口縁部ヘラミガキ 体～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラミガキ	口縁～体部 1/4 底部完存
40	古式土師器埴	B-4 B-5エ g・オ g B-6 覆土	(14.6)	—	5.7	普通	良好	浅黄褐色	底部は丸底で、体部は非常に浅い。頸部に沈線を巡らし、口縁部は大きく外傾する。 外面：口縁部ヘラミガキ 体～底部ヘラケズリ 内面：磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか	1/4
41	古式土師器甗	A-4 B-4ウ d・エ d・エ h・オ f・オ h・カ f・カ g B-5ク f C-5オ e・オ h 覆土	—	7.8	[23.5]	やや粗	良好	明褐色	単孔の甗。 外面：胴部ヘラナデ 内面：胴中部ヘラナデ 胴下部ヘラケズリ	胴中部 4/5 胴下部 2/3
42	古式土師器甗	A-2 A-2ア b・イ b 覆土	14.9	5.5	11.5	普通	良好	明赤褐色	単孔の小型甗。孔径 0.9cm。 外面：口縁部ナデ・指頭圧痕 頸部ヘラナデ 胴～底部磨減激しく不明瞭・ヘラケズリか 内面：口縁部ナデ・指頭圧痕 胴部ヘラケズリ 底部ヘラナデ	ほぼ完存
43	古式土師器甗	D-7ア e D-9ウ e・エ f 覆土	16.9	6.1	9.9	普通	良	橙色	円盤状の底部から胴部が直線的に開く鉢形の器形を呈する単孔甗。孔径 0.9cm。 外面：口縁～胴部磨減激しく調整不明 底部ヘラナデ	ほぼ完存
44	古式土師器高環	A-2イ a B-2イ f・イ g・イ h 覆土	20.1	13.1	15.0	やや粗	良	明赤褐色	中空の柱状脚部で1ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：坏部ヨコナデ 接合部ヘラナデ 脚～裾部ヘラミガキ 内面：坏部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚上部ヨコナデ 脚～裾部ヘラケズリ	環～脚部 ほぼ完存 裾部 1/8

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値	□ 遺存値						
			口径	底径	器高					
45	古式土師器 高環	B-4 ア・b・イ d・イ e・ウ d B-4 覆土	(20.8)	14.0	15.2	普通	良	にぶい 黄橙色	環部は大きく外傾する。脚部は下部が膨らみ、裾部はほぼ真横に広がる。 外面：口縁端面取り 環部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：環部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚部絞り痕・ヘラナデ 裾部ヨコナデ	環部 1/3 脚～裾部 ほぼ完存
46	古式土師器 高環	E-6 ア g・イ g・イ h 覆土	15.0	10.3	13.3	緻密	良好	にぶい 橙色	中空の柱状脚部で、裾部は短い。 外面：環～脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ後ヘラミガキ 内面：環部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	環部 1/2 脚～裾部 ほぼ完存
47	古式土師器 高環	A-2 B-2 B-2 イ f 覆土	17.2	12.8	17.8	普通	良好	にぶい 橙色	中空の柱状脚部。 外面：口縁部ヨコナデ 環部ヘラナデ 脚部ヘラミガキ 裾部ヘラナデ 内面：環部ヘラナデ 脚部絞り痕・ヘラナデ 裾部ヘラナデ	ほぼ完存
48	古式土師器 高環	A-9 キ c 覆土	18.5	(12.5)	15.4	普通	良	橙色	中空の柱状脚部で、裾部はほぼ真横に広がる。 外面：環部磨減激しく調整不明 接合部ヘラケズリ 脚～裾部ヘラミガキ 内面：環部磨減激しく調整不明 脚部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	環～脚部 ほぼ完存 裾部 1/5
49	古式土師器 高環	E-8 エ h 覆土	(18.6)	12.6	15.5	普通	良好	明赤褐色	脚部は中空の柱状で、裾部はほぼ真横に開く。 外面：環部ハケメ後ヘラナデ 脚～裾部ヘラミガキ 内面：環部磨減激しく調整不明 脚部絞り痕 裾部ヨコナデ	環部 1/3 脚部完存 裾部 3/4
50	古式土師器 高環	A-2 ア a・ア b 覆土	17.8	12.4	14.9	普通	良	橙色	中空の柱状脚部で、裾部はほぼ真横に広がる。 外面：環部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部ヨコナデ 内面：環部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚部絞り痕・ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	環部 1/2 脚～裾部完存
51	古式土師器 高環	A-2 イ a・イ b 覆土	15.9	11.4	14.7	やや粗	良	にぶい 橙色	外面：環部磨減激しく調整不明 環下部ヘラナデ 脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 裾部ヘラナデ 内面：環部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚部絞り痕 脚部下部絞り痕・ヨコナデ 裾部ヘラナデ	ほぼ完存
52	古式土師器 高環	B-6 ク a 覆土	—	(12.6)	[11.8]	やや粗	良	明赤褐色	中空の柱状脚部で、対角2ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：接合部～脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 裾部ヨコナデ 内面：接合部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	接合部～脚部 完存 裾部 1/3
53	古式土師器 器台	B-9 ア c・イ c 覆土	(6.9)	8.6	10.4	普通	良	橙色	器受部が非常に浅く、脚部が長い。脚下部3ヶ所に焼成前穿孔を施す。 外面：器受部ヨコナデ 脚部ヘラナデ 内面：器受部磨減激しく調整不明 脚上部ヘラナデ 脚中部ハケメ 脚下部ヨコナデ	器受部 1/3 脚上～中部完存 脚下部 1/3
54	古式土師器 器台	E-8 覆土	7.2	—	[4.6]	やや粗	良好	にぶい 橙色	器受部が浅く、脚部は短い。脚中部に焼成前穿孔2ヶ所確認、位置から4ヶ所施されたものと思われる。 外面：器受部ヨコナデ 脚部ヘラミガキか 内面：器受部ヘラミガキか 脚部ナデ	器受部完存 脚上部 1/5
55	古式土師器 器台	B-4 イ c・ウ c 覆土	—	[6.6]	(10.1)	やや粗	良	明褐色	鼓形器台。 外内面：磨減激しく調整不明	器受下部 3/4 脚上部完存 脚下部 1/3
56	古式土師器 環	E-9 覆土	(12.5)	4.8	5.2	やや粗	良好	明黄褐色	外内面：磨減激しく調整不明	口縁～体部 1/3 底部完存
57	古式土師器 環	A-3 キ b 覆土	13.3	6.1	5.6	やや粗	良	橙色	平底で体部から口縁部にかけて外反する。 外内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
58	古式土師器 環	B-5 ク b 覆土	11.1	5.2	5.6	緻密	良好	橙色	円盤状の平底で体部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部指頭圧痕 体下～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ナデ	口縁～体部 2/3 底部完存
59	古式土師器 環	A-9 カ b 覆土	12.8	3.7	6.7	やや粗	良好	橙色	円盤状の底部で、体部は歪みが顕著。体部から口縁部にかけて外反する。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ 内面：口縁～底部ヨコナデ	完存
60	古式土師器 鉢	A-3 A-3 カ b 覆土	(11.2)	—	[6.4]	やや粗	良好	明赤褐色	底部は尖底状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下部磨減激しく調整不明 内面：ナデ・指頭圧痕	口縁～体下部 1/3
61	古式土師器 鉢	C-6 カ d C-7 キ c 覆土	13.0	3.0	6.4	普通	良	橙色	平底の底部から体部が大きく外傾し、体中部で内湾気味に直立する。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部磨減激しく調整不明 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部磨減激しく調整不明	ほぼ完存
62	古式土師器 鉢	B-9 カ f 覆土	(11.9)	4.0	8.4	やや粗	良	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ 底部ヘラナデ	口縁～体部 1/3 底部完存
63	古式土師器 鉢	C-6 オ a・キ d・キ e 覆土	(13.6)	4.6	9.3	普通	良好	明赤褐色	体部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ 体～底部ヘラケズリ 内面：口縁～体上部ヨコナデ 体下部ナデ・指頭圧痕 底部ヘラナデ	口縁～体部 1/4 底部ほぼ完存
64	古式土師器 鉢	B-5 オ a・C-5 オ h 覆土	10.4	—	7.3	普通	良	橙色	丸底を呈し、体部は直立気味に立ち上がる。 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ナデ	ほぼ完存
65	古式土師器 鉢	B-3 キ h 覆土	10.2	2.3	6.5	普通	良好	橙色	楕円形を呈し、口縁短軸長は9.1cm。体部は丸みを帯びて立ち上がり、頸部が僅かに窄まる。 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：口縁～体部ナデ・指頭圧痕 底部ヘラナデ	完存
66	古式土師器 鉢	B-5 B-5 オ d 覆土	(10.8)	—	6.4	緻密	良好	にぶい 黄褐色	底部は丸底で、口縁部はS字状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ・指頭圧痕	1/3
67	古式土師器 鉢	B-10 ク c・ク d 覆土	(9.6)	3.9	(7.0)	緻密	良	橙色	底部は平底で、口縁部はS字状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ 底部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ 底部ヘラナデ	口縁～胴上部 1/4 胴下～底部 3/4
68	古式土師器 環	B-5 ア e 覆土	(9.6)	(5.4)	3.6	普通	良好	にぶい 橙色	底部は平底で、体部から口縁部は内湾して立ち上がる。 外内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ	1/4
69	古式土師器 手捏ね土器	A-3 ア c 覆土	(6.8)	2.8	3.7	普通	良	明褐色	平底で体部から口縁部にかけて外反する。口縁端部は折り返されている。 外面：ナデ 内面：ナデ・指頭圧痕	口縁部 1/5 体～底部完存

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0:推定値	□:遺存値	器高					
70	古式土師器 手捏ね土器	B-2カh覆土	(7.3)	(3.2)	3.5	普通	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～底部ナデ	1/2
番号	器種・種別	出土層位	法量 0:推定値 □:遺存値			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			長さ	幅	厚さ					
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)				
71	土玉	E-7キg覆土	2.7	2.5	2.3	15.0	良	にぶい 黄褐色	平面は楕円形、断面はやや扁平な球形を呈する。表面の磨滅が激しく不明瞭だが、ナデ整形と思われる。	完存
番号	器種・種別	出土層位	法量 0:推定値 □:遺存値			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			長さ	幅	厚さ					
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)				
72	紡錘車	C-9エfE-9 クe覆土	5.0	4.9	1.1	31.2	滑石	暗灰色	断面扁平な台形の円盤状を呈する。斜面部中程に稜をもち、稜の外側2/3に2本単位の削痕が見られる。中心に片側から穿孔を施す。孔径0.9cm。	完存
73	紡錘車	C-4オf覆土	4.3	4.3	1.3	29.3	滑石	褐灰色	断面台形の円盤状を呈する。表面は一本線で六芒星状の線刻、裏面および斜面に格子状の線刻を施す。中心に片側から穿孔を施す。孔径0.7cm。	完存
74	石製模造品 剣形	C-6エf覆土	[4.1]	2.0	0.6	[5.2]	滑石	褐灰色	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。穿孔は2ヶ所に見られる。中央部のは片側から穿孔を施し、孔径0.15cm。左側部のは穿孔中に欠損したと思われる。孔径(0.1)cm。	下部欠損
75	石製模造品 有孔円板	C-6オf覆土	3.0	2.7	0.3	4.8	滑石	暗灰色	側面を細かく回転させて直線的に研磨し、平面は多角形状を呈する。ほぼ中心の1ヶ所に片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
76	石製模造品 有孔円板	A-5キa覆土	2.0	1.9	0.2	1.5	滑石	暗灰色	回転させながら側面を研磨し、平面は円形を呈する。ほぼ中心の1ヶ所に片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
77	勾玉	D-6ウg 着底部	2.7	1.6	0.7	3.6	黄水晶	透明な 黄色	半円状に内湾する。丁寧に研磨され、表面は非常に滑らか。片側から穿孔を施し、穿孔した側には、位置を安定させるためと考えられる打ち欠き痕がある。孔径0.2cm。	完存
78	ガラス小玉	A-9オa覆土	0.6	0.4	0.4	0.1	-	透明な 青色	管状のガラスを切断して整形したと思われる。孔径0.2cm。	完存

河道跡張出部出土遺物観察表

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0:推定値	□:遺存値	器高					
1	古式土師器 甕	B-6オg・ カg・キg 覆土	17.9	6.7	32.6	やや粗	良	橙色	底部は上げ底で、胴部は縦長の球形を呈する。 外面：磨滅激しく不明瞭 口縁部：ヨコナデか 胴～底部ヘラナデか 内面：磨滅激しく不明瞭 口縁部：調整不明 胴～底部ヘラナデか	ほぼ完存
2	古式土師器 甕	B-6オf 覆土	(16.5)	8.0	23.1	やや粗	良	明黄褐色	円盤状の底部から胴部は丸みを帯びて立ち上がる。胴中位に最大径をもつ。 外面：口縁部ヘラナデ 頸部部分的に工具角によるケズリ 胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 底部砂流含む粘土充填	口縁部 1/4 胴上部 3/4 胴下～底部 ほぼ完存
3	古式土師器 S字状口縁 台付甕	C-7イg 覆土	—	9.9	[8.9]	普通	良好	灰黄色	内面胴底部・台上部に砂粒含む粘土を充填している。 外面：胴下～台 上部ハケメ 台下部ナデ 内面：胴下部ヘラナデ 台部ナデ・指頭圧痕	胴下部ほぼ完存 台部 2/3
4	古式土師器 壺	C-7アg D-8 覆土	17.8	—	[5.2]	緻密	良	にぶい 黄橙色	口縁上部が大きく外反する。口縁部はヨコナデにより面取り状をなし、 上端部は断面三角形を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘ ラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヘラナデ	口縁部ほぼ完存
5	古式土師器 壺	C-7キf・ クeD-7 覆土	17.6	—	[21.1]	やや粗	良	橙色	やや扁平な球胴を呈する。 外面：磨滅激しく不明瞭 口縁部ヘラミガキか 胴部ヘラナデか 内面：口縁部磨滅激しく不明瞭・ヘラミガキか 胴部ナデ・指頭圧痕	口縁部ほぼ完存 胴上部 1/3
6	古式土師器 小型壺	B-6エg 覆土	(12.9)	5.4	17.1	普通	良好	橙色	底部は不安定。胴上部に最大径をもつ。 外面：口縁部ヨコナデ・ヘラ ナデ 胴上部ナデ 胴中部～底部ヘラケズリ・ナデ 内面：口縁部ヘラナデ・ナデ 胴～底部ヘラナデ	口縁部 1/4 胴～底部完存
7	古式土師器 小型壺	B-6カg 覆土	12.9	4.2	14.9	緻密	良好	明褐色	底部は上げ底で、胴部はやや扁平な球形を呈する。 外面：口縁～胴中部ヘラナデ 胴下～底部ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 平底の底部で、胴部は球形を呈する。	口縁部 1/2 胴～底部完存 口縁部 1/4
8	古式土師器 小型壺	B-6オf 覆土	(19.5)	4.0	(16.6)	普通	良好	明赤褐色	外面：口縁～体上部磨滅激しく調整不明 体中～底部ヘラケズリ 内面： 口縁～体下部磨滅激しく調整不明 底部磨滅激しく不明瞭・ヘラナデか	体～底部 ほぼ完存
9	古式土師器 小型壺	B-6オg 覆土	12.8	3.0	11.6	緻密	良好	明赤褐色	底部は上げ底で体部は扁平な球形を呈する。口径が体部径よりも大きい。 外面：口縁～体中部磨滅激しく調整不明 体下部ヘラナデ 底部ヘラケズリ 内面：磨滅激しく調整不明	ほぼ完存
10	古式土師器 小型壺	B-6オf 覆土	10.3	3.2	9.8	緻密	良好	にぶい 黄褐色	須恵器「はそう」に似た器形を呈する。底部は上げ底、体部は扁平な球形 を呈し、口縁部は途中で内傾する。 外面：口縁～体上部ヨコナデ 体 下～底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ	完存
11	古式土師器 小型壺	B-6オg 覆土	9.1	3.6	10.2	普通	良好	明褐色	底部は平底で、体部はやや扁平な球形を呈する。 外面：磨滅激しく調整不明瞭 口縁～底部ヘラナデか 頸部ハケメか 内面：口縁部ヘラナデ 体～底部ナデ	ほぼ完存
12	古式土師器 小型壺	B-6カg 覆土	9.7	3.0	9.3	普通	良好	明褐色	僅かに上げ底状を呈する平底で、体部は算盤玉状を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体上部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～体部ヨコナデ 底部ヘラナデ	ほぼ完存

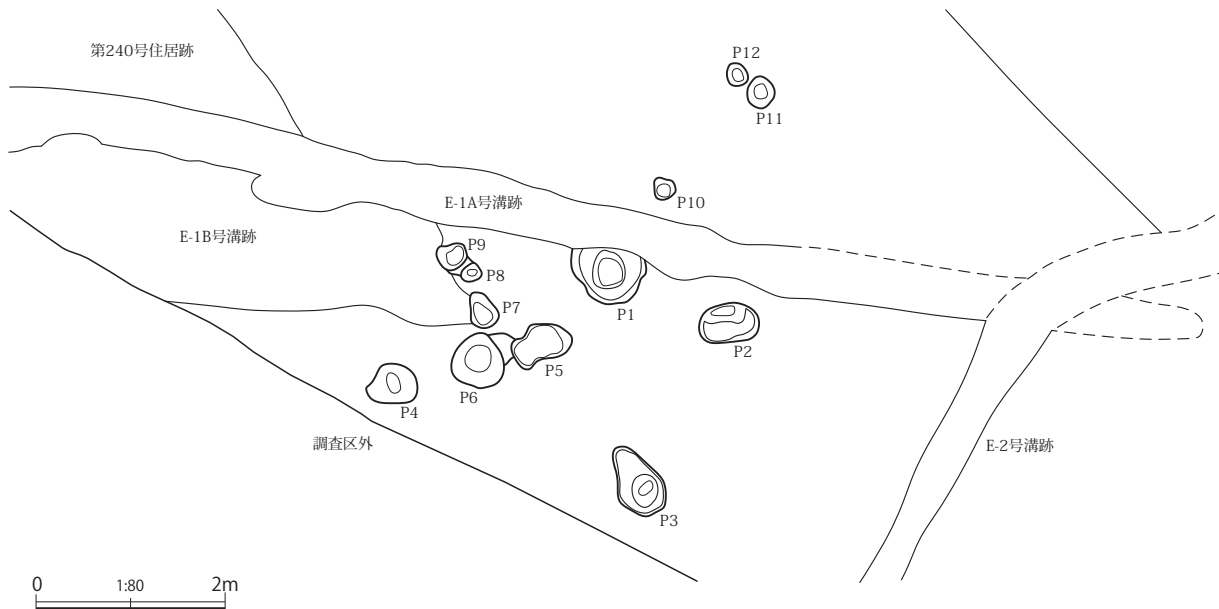
番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
13	古式土師器 小型壺	B-6 カ g 覆土	9.9	5.2	8.9	やや粗	良好	明赤褐色	上げ底の底部で、体部は算盤玉状を呈する。 外面：口縁～体中部磨減激しく調整不明 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～体中部磨減激しく調整不明 体下～底部ナデ・指頭圧痕	完存
14	古式土師器 小型壺	B-6 オ f 覆土	9.6	3.0	8.4	普通	良好	橙色	上げ底の底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。 外面：口縁～体上部ヨコナデ・口縁部輪積み痕残す 体中部ヘラナデ 体下～底部ヘラケズリ 内面：口縁～体部ナデ・指頭圧痕 底部ヘラナデ	口縁部 2/3 体～底部 ほぼ完存
15	古式土師器 小型壺	B-6 エ f 覆土	7.4	4.2	6.5	普通	良好	明褐色	底部はわずかに上げ底で、体部は扁平な球形を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラナデ 内面：口縁～体上部ヨコナデ 体下～底部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
16	古式土師器 小型壺	B-6 カ g 覆土	8.9	5.2	7.4	普通	良好	にぶい 褐色	僅かに上げ底状を呈する平底で、体部は算盤玉状を呈する。 外面：口縁～体中部磨減激しく調整不明 体下～底部ヘラナデ 内面：口縁部ハケメ 体～底部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
17	古式土師器 小型壺	B-6 カ g 覆土	8.1	3.6	7.1	普通	良好	明赤褐色	底部は平底で、体部は扁平な球形を呈する。 外面：口縁部～体上部ヨコナデ 体中部磨減激しく不明瞭・ナデか 体下～底部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ 体～底部ナデ・指頭圧痕	ほぼ完存
18	古式土師器 小型壺	A-6 ウ a・ ウ b 覆土	—	5.0	[5.3]	緻密	良	橙色	体部1ヶ所に焼成前穿孔をもち、「はそう」と同じ形態。底部は上げ底で、体部は扁平な算盤玉状を呈する。 外面：磨減激しく不明瞭・ヘラナデか 内面：ナデ：指ナデ	体～底部 ほぼ完存
19	古式土師器 罎	A-8 エ a・ エ b 覆土	(8.5)	—	6.6	緻密	量	にぶい 橙色	器壁の非常に薄い小型精製土器。体部から底部は半球状を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。 外面：口縁部磨減激しく調整不明 体～底部：磨減激しく不明瞭・ハケメ後ヘラミガキか 内面：磨減激しく調整不明器壁の非常に薄い小型精製土器。体部は球形を呈すると思われ、口縁部は内湾気味に立ち上がる。 外内面：磨減激しく調整不明	口縁部 1/3 体～底部完存
20	古式土師器 罎	A-8 イ b 覆土	(7.7)	—	[4.4]	普通	良	橙色	器壁の非常に薄い小型精製土器。体部は球形を呈すると思われ、口縁部は内湾気味に立ち上がる。 外内面：磨減激しく調整不明	口縁～体中部 1/4
21	古式土師器 高環	B-6 エ f・ エ g 覆土	17.9	12.9	17.8	普通	良好	橙色	中空の柱状脚部で、裾部は真横に広がる。環部は外反しながら大きく外傾する。 外面：磨減激しく不明瞭 環部ヘラナデか 脚部ヘラケズリか 裾部ヨコナデ 内面：環部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕 脚下部ヨコナデ・輪積み痕不明瞭に残す 裾部ヨコナデ	環部 2/3 脚～裾部完存
22	古式土師器 高環	B-6 オ f・ オ g 覆土	18.4	(14.4)	17.4	普通	良好	明褐色	中空の柱状脚部で、裾部は外反気味に外側へ広がる。環部は稜をもち大きく外傾する。 外面：口縁～環上部磨減激しく調整不明 環下部ヘラナデ 接合部ナデ 脚部ヘラミガキ 裾部ナデ 内面：環部磨減激しく調整不明 脚部絞り痕 裾部磨減激しく調整不明	環～脚部 ほぼ完存 裾部 1/4
23	古式土師器 高環	B-6 オ f・ オ g・カ f 覆土	18.7	(14.5)	14.6	普通	良	橙色	環部は直線的に大きく外傾して立ち上がる。脚部は外反し裾部はほぼ真横に広がる。 外面：環部磨減激しく調整不明・指頭圧痕残る 接合部ヘラナデ 脚～裾部磨減激しく調整不明 内面：環部磨減激しく調整不明 脚部ヘラナデ・輪積み痕残る 裾部ヨコナデ	環～脚部 ほぼ完存 裾部 1/3
24	古式土師器 高環	A-8e エ a・b・エ c・ エ d A-9 ク a B-8 エ e 覆土	15.8	11.3	17.2	普通	良	橙色	細長い中空の柱状脚部で、裾部は内湾気味に外側へ広がる。 外面：環部磨減激しく調整不明 接合部ヘラナデ 脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 裾部ヨコナデ 内面：環部磨減激しく調整不明 脚部径が狭いため確認困難・ナデか 裾部ヘラナデ	環部 3/4 脚部完存 裾部 3/4
25	古式土師器 高環	A-8 ア b・ イ c 覆土	—	—	[14.1]	緻密	良好	にぶい 黄褐色	細長い中空の柱状脚部で、裾部は内湾気味に外側へ広がると思われる。 外面：環部磨減激しく調整不明 脚部ヘラミガキ 裾部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 内面：環部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚部ナデ 裾部磨減激しく調整不明	環下部 1/5 脚部完存 裾上部 1/6
26	古式土師器 高環	A-8 ア c・ イ b・イ c・ ウ b・エ b・ ク b 覆土	16.1	—	[16.4]	普通	良	にぶい 褐色	細長い中空の柱状脚部。環部は内湾気味に外傾する。 外面：磨減激しく調整不明 内面：環部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 脚上部絞り痕 脚下部ナデ	環～脚部 ほぼ完存
27	古式土師器 高環	A-8 ア d・ イ d・エ b・ オ b・オ d 覆土	—	11.2	10.8	緻密	良好	浅黄褐色	細長い中空の柱状脚部で、裾部は内湾気味に外側へ広がる。 外面：脚部ヘラミガキ 裾部磨減激しく調整不明 内面：脚上部絞り痕 脚下部ナデ 裾部磨減激しく調整不明	脚部完存 裾部 2/3
28	古式土師器 高環	A-8 イ c・ ウ a 覆土	—	(12.6)	[11.0]	緻密	良	褐色	中空の柱状脚部で、裾部は内湾気味に外側へ広がる。 外面：脚部磨減激しく不明瞭・ヘラミガキか 裾部磨減激しく調整不明 内面：脚部ヘラナデ 裾部磨減激しく調整不明	脚部完存 裾部 1/5
29	古式土師器 高環	A-8 エ a・ エ b 覆土	—	(12.5)	[13.4]	緻密	良好	明黄褐色	中空の柱状脚部で、裾部は湾曲しながら外側へ広がる。 外面：磨減激しく調整不明 内面：環部磨減激しく調整不明 脚上部絞り痕・ナデ 脚下部ハケメ後ナデ 裾部ナデ	環下部 1/5 脚部完存 裾部 1/4
30	古式土師器 器台	A-8 ウ a・ エ b・エ c・ オ b・キ a 覆土	—	10.4	[9.1]	緻密	良	褐色	鼓形器台。 外面：磨減激しく調整不明 内面：器受部磨減激しく調整不明 脚部ハケメ後ナデ 脚下部ヘラナデ	器受下部 1/5 脚部 3/4
31	古式土師器 脚付小型壺	B-6 エ f・ エ g 覆土	9.7	8.9	17.0	普通	良好	明赤褐色	やや背の高い外反する脚をもつ小型壺。体部は扁平な球形を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 体上～中部磨減激しく調整不明 体下部ヘラナデ 脚部ヘラミガキ 裾部磨減激しく調整不明 内面：口縁～体部磨減激しく不明瞭・ナデか 脚部絞り痕か 裾部ヨコナデ	口縁部ほぼ完存 体部 1/2 脚部ほぼ完存 裾部 1/3
32	古式土師器 鉢	B-6 オ g・ カ g・キ g 覆土	10.4	—	[3.4]	普通	良	にぶい 褐色	S 字状口縁を呈する。 外面：口縁部ヨコナデ 胴上部羽状ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁～胴中部 2/3

番号	器種・種別	出土層位	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			0: 推定値 □ 遺存値		器高					
			口径	底径						
33	古式土師器 小型壺	B-6 イ g 覆土	—	2.8	[5.6]	緻密	良好	橙色	中位に最大径をもつ算盤玉状の体部。体部中位の約90°開く位置2ヶ所にφ0.5cmの焼成前穿孔を施す。三連壺の可能性あり。 外面：ヘラナデ 内面：ナデ	頸部 1/2 体～底部完存
34	古式土師器 手握ね土器	B-6 ウ g 覆土	—	3.5	[3.5]	普通	良好	橙色	平底の底部から体部が直立気味に立ち上がる。 外面：ヘラナデ	体部 1/4 底部完存
35	古式土師器 手握ね土器	A-6 カ a 覆土	—	3.0	[2.6]	普通	良好	にぶい 褐色	平底の底部から体部が直線的に外傾して立ち上がる。 外面：ヘラナデ	体～底部 1/3
番号	器種・種別	出土層位	法量 0: 推定値 []: 残存値				石質	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)				
36	石製模造品 有孔円板	B-8 イ c 覆土	2.8	2.6	0.8	7.0	滑石	灰色	回転させながら側面を細かく研磨し、平面は円形を呈する。ほぼ中心に片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
37	石製模造品 剣形	B-7 イ g 覆土	5.7	1.6	0.6	4.9	滑石	褐灰色	片面に鑄をもつ形状で、断面は台形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。研磨が粗く複雑な仕上がりとなっている。切先側に穿孔をもち、片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
38	石製模造品 剣形	C-7 ウ h 覆土	6.0	2.0	1.0	9.6	滑石	褐灰色	両面に鑄をもつ形状で、断面は菱形形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
39	石製模造品 剣形	B-6 オ c 覆土	5.4	2.4	0.6	12.7	滑石	灰色	鑄をもたない平坦な形状で、表裏両面の側縁を斜めに研磨し断面は扁平な六角形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
40	石製模造品 剣形	A-6 カ a 覆土	5.1	2.3	0.4	8.0	滑石	灰色	鑄をもたない平坦な形状で、表面の側縁を斜めに研磨し断面は扁平な台形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
41	石製模造品 剣形	B-6 エ d 覆土	5.0	1.6	0.5	5.3	滑石	褐灰色	鑄をもたない平坦な形状で、側面を斜めに研磨し平面は柳葉状、断面は長方形を呈する。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
42	石製模造品 剣形	B-6 オ f 覆土	4.7	1.7	0.4	3.9	滑石	灰色	鑄をもたない平坦な形状で、表裏両面の側縁を斜めに研磨し断面は平行四辺形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.15cm。	完存
43	石製模造品 剣形	B-7 覆土	[3.2]	1.5	0.4	[2.7]	滑石	灰 オリーブ	鑄をもたない平坦な形状で、表面の両側縁と裏面の片側縁を研磨し断面は平行四辺形状を呈する。側面上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.15cm。	下端部欠損
44	石製模造品 剣形	B-7 ク d 覆土	4.3	2.0	0.4	[4.1]	滑石	灰 オリーブ	鑄をもたない平坦な形状で、断面は長方形形状を呈する。上端部を斜めに研磨し平面は五角形状を呈する。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	側面一部欠損
45	石製模造品 剣形	B-7 オ e 覆土	[4.5]	2.2	0.6	[7.6]	滑石	淡橙色	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は片側上部のみ斜めに研磨し稜をもつ。両側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	下部欠損
46	石製模造品 剣形	B-6 ウ d 覆土	[3.9]	2.3	0.4	[6.4]	滑石	灰色	鑄をもたない平坦な形状で、表裏両面の側縁を斜めに研磨し断面は六角形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	下端部欠損
47	石製模造品 剣形	B-6 エ f 覆土	[4.9]	2.4	0.4	[7.8]	滑石	灰色	鑄をもたない平坦な形状で、表面の側縁を斜めに研磨し断面は扁平な台形状を呈する。上部を欠損し、穿孔は不明。	上部欠損
48	石製模造品 剣形	A-7 ア a 覆土	[5.2]	2.2	0.9	[9.8]	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	下端部欠損
49	石製模造品 剣形	B-6 ア g 覆土	[4.5]	1.8	0.5	[5.0]	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	下端部欠損
50	石製模造品 剣形	A-7 イ a 覆土	3.7	1.8	0.5	4.2	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.15cm。	完存
51	石製模造品 剣形	A-7 ア a 覆土	3.6	1.7	0.4	3.5	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、側面を研磨し断面は扁平な五角形状を呈し、側面上部に稜をもつ。両側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存
52	石製模造品 剣形	B-6 キ e 覆土	[3.1]	1.7	0.8	[3.2]	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	上端部欠損
53	石製模造品 剣形	B-6 カ h 覆土	6.7	2.5	0.8	[13.7]	滑石	灰色	片面に鑄をもつ形状で、裏面が丸みを帯びており断面は扁平な菱形形状を呈する。側面に研磨を施し上部に稜をもつ。下部右側を欠損し穿孔は施されていない。製作を中止したものか。	下部右側欠損
54	石製模造品 剣形	A-7 ア a 覆土	4.5	2.3	0.6	[6.8]	滑石	オリーブ 灰	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は上部を外反気味に研磨し稜をもつ。穿孔が施されていない未完成品。	ほぼ完存
55	石製模造品 剣形	A-7 イ a 覆土	4.0	1.8	0.4	5.0	滑石	灰色	片面に鑄をもつ形状で、側面を研磨しており断面は扁平な五角形状を呈し、側面上部に稜をもつ。穿孔が施されていない未完成品。	完存
56	石製模造品 剣形	B-7 ク d 覆土	[3.0]	1.6	0.5	[2.1]	滑石	にぶい 黄褐色	鑄をもたない平坦な形状で、側面は研磨されておらず断面は長方形形状を呈する。上部を欠損し、穿孔は不明。	上部 2/3 欠損
57	石製模造品 剣形	B-6 エ f 覆土	3.4	1.8	0.7	3.8	滑石	灰 オリーブ	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面は上部を斜めに研磨し稜をもつ。穿孔が施されていない未完成品。	完存
58	石製模造品 剣形	A-6 ウ e 覆土	3.6	2.0	0.5	4.2	滑石	灰色	片面に鑄をもつ形状で、断面は三角形形状を呈する。側面上部は片面を切削、片面を研磨し稜をもつ。穿孔が施されていない未完成品。	完存
59	石製模造品 剣形	B-7 覆土	5.0	2.0	0.3	3.9	滑石	灰 オリーブ	鑄をもたない平坦な形状で、断面は長方形形状を呈する。平面は扇形状を呈し、一方の対辺は研磨され、もう一方の対辺は切削されたままである。穿孔が施されていない未完成品。	完存
60	原石 (石製 模造品)	B-6 ウ e 覆土	9.9	3.7	1.8	77.8	滑石	灰 オリーブ	平面は木葉形、断面は楕円形状を呈する。成形前の原石とおもわれる。	完存
61	勾玉	B-6 エ f 覆土	3.0	1.6	0.9	4.6	滑石	灰黄褐色	半円状に内湾する。丁寧に研磨され、稜線が見られる。片側から穿孔を施す。孔径0.2cm。	完存

番号	器種・種別	出土層位	法量 () : 推定値 () : 残存値 ()				石質	色調	成・整形の特徴、調整の方法	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)				
62	白玉	B-6 オ g 覆土	0.5	0.5	0.3	0.1	滑石	にぶい 黄褐色	側面形状は算盤玉状を呈する。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存
63	白玉	B-6 キ f 覆土	0.4	0.4	0.3	0.1	滑石	灰黄褐色	側面形状は算盤玉状を呈する。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存
64	白玉	B-6 オ f 覆土	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	灰黄褐色	側面形状は算盤状を呈するが、厚みは薄い。片側から穿孔を施す。孔径 0.15cm。	完存
65	白玉	B-6 ウ g 覆土	0.6	0.5	0.3	0.1	滑石	にぶい 黄褐色	側面形状は算盤玉状を呈するが、孔面の片面が傾斜している。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存
66	白玉	B-7 イ h 覆土	0.4	0.4	0.3	0.1	滑石	褐灰色	側面形状は棗玉状を呈するが、孔面の片面が傾斜している。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存
67	白玉	B-6 イ h 覆土	0.5	0.5	0.3	0.1	滑石	にぶい 黄褐色	側面形状は棗玉状を呈する。片側から穿孔を施すが、斜め方向に入れたあと垂直に穿孔したと思われる。孔径 0.15cm。	完存
68	白玉	C-6 ア h 覆土	0.4	0.4	0.3	0.1	滑石	灰色	側面形状は算盤玉状。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存
69	白玉	C-6 ア h 覆土	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石	褐灰色	側面形状は平玉状。片側から穿孔を施す。孔径 0.2cm。	完存

第7節 小穴

本調査区では、調査区南端部の E 3・4、F 3 グリッドで小穴 12 個が確認された。第 239 号住居跡と河道跡の間に位置し、E-1 号溝跡と重複するものもある。比較的密集しており、規模もそろっていないことから掘立柱建物跡や柵列となる可能性も低いと思われ、性格は不明である。各小穴の平面形態・法量は表にまとめて記載している。(第 25 図)



第 25 図 小穴平面図

ピット 単位：cm

番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ	番号	平面形	規模	深さ
P 1	不正円形	[60] × 78	12	P 4	楕円形	59 × 43	24	P 7	不正楕円形	39 × 30	5	P10	不正円形	24 × 23	10
P 2	楕円形	63 × 40	7	P 5	不正楕円形	63 × 49	12	P 8	不正円形	21 × 17	13	P11	不正円形	34 × 30	7
P 3	不正楕円形	77 × 49	14	P 6	不正円形	58 × 55	9	P 9	不正円形	33 × 29	12	P12	不正円形	25 × 21	7

第4章 まとめ

今回発掘調査を行ったE地点は、1975年に発掘調査を行ったA地点の北側に位置し、1985年に発掘調査を行ったC地点の西隣にある。この2地点は距離が近く、調査面積も広いことから、これらの成果と合わせてE地点調査区のまとめを考えてみたい。

E地点調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡4基、溝跡9条、河道跡1条、河道跡に伴うものと考えられる土坑10基・小穴150個、小穴12個である。竪穴住居跡は時期別に見ると古墳時代前期が3軒、中期が2軒、時期不明が1軒である。

E地点調査区で検出された竪穴住居跡は、C地点・E地点調査区の南部を東流する竪穴住居跡とほぼ同時期の河道跡の左岸域に分布している。C地点調査区の竪穴住居跡は、第192号住居跡以外は河道跡左岸域に分布していることから、これらは連続する1つの集落跡と考えられる。一方、A地点調査区の竪穴住居跡およびC地点調査区の第192号住居跡は、河道跡の右岸域に分布していることから先の集落とは河道跡によって隔絶されており、別の集落跡であったと考えられる。また、竪穴住居跡はC地点・E地点ともに調査区北部に位置する奈良・平安時代以降の溝跡群の北側からは確認されていないことから、この付近が後張遺跡における集落範囲の北限であったと考えられる。

掘立柱建物跡は、E地点調査区北部を東流する溝跡群の北側で1棟が確認された。遺構密度の極端に低い奈良・平安時代以降の溝跡群の北側に1棟単独で存在しており、何時・何の目的で建てられたものであるのかは判断することができない。

井戸跡はE地点調査区北部で1基、南部で3基確認された。北部で確認された第12号井戸跡は奈良・平安時代以降の溝跡群を壊していることから、中世のものと考えられる。C地点調査区で検出された第5・6号井戸跡もC-2号溝跡群を壊しており同時期と考えられるものである。これら3基の井戸跡はほぼ一直線上に分布していることから、関係があるものと考えられる。南部で確認された3基の井戸跡は、近い位置にまとまって分布している。いずれも河道跡を掘り込んで造られていることから、奈良時代以降のものと考えられる。溝跡は、E地点調査区北部で7条、南部で2条が確認された。北部で確認された7条の溝跡は、C地点調査区で確認されたC-2号溝跡とつながるものである。これら7条の溝跡は、全ての溝跡が同時期に機能していたものではなく、奈良時代から平安時代以降にかけての長期間にわたって1条ずつ掘っては埋没してを繰り返し、最終的に溝跡群が形成されたものと考えられる。南部で確認された2条の溝跡は、いずれも中世以降のものと考えられる。

河道跡は、E地点調査区南部で「S」字の上半分の様な形で確認された。E地点調査区の南端部では南から北上しているが、E地点調査区の南側約20mに位置するA地点調査区ではその続きとなる部分は検出されていない。このことから河道跡はA地点調査区とE地点調査区の間を南東方向に進み、E地点調査区の南側からE地点調査区南部にかけて「S」字に屈曲し、C地点調査区を弓形に横断していくと考えられる。「S」字に屈曲する右岸の先端部からは、土坑・多数の小穴が確認されている。周辺からは多量の石製模造品のほかガラス小玉・勾玉・白玉といった祭祀に用いたと考えられる遺物が出土しており、河川に関する祭祀が執り行われていた可能性が考えられる。そこで祭祀を執り行なった集団は、河道跡右岸に集落を形成した集団すなわちA地点に竪穴住居跡を構えた集団であったと考えられる。

小穴はE地点調査区南端部に12個まとまって検出された。規模がまちまちで、位置も規則性が見られない。河道跡が「S」字に屈曲する左岸部に位置するが、右岸部のような祭祀に用いたと考えられるような遺物が出土していないことから、その性格は不明である。

今回の発掘調査で明らかになったことは、C地点調査区の成果と合わせて北部の奈良・平安時代以降の溝跡群よりも北側の地域で古墳時代の竪穴住居跡が確認されていないことから、後張遺跡における古墳時代の集落範囲の北限が明らかになった可能性があること、A地点の竪穴住居跡群とC・E地点の竪穴住居跡群との間に

竪穴住居跡とほぼ同時期の河道跡が存在していることから、これらは河道跡の右岸域と左岸域で別の集落であった可能性があることが挙げられる。今後、周辺地域での発掘調査事例が増え、周辺遺跡の調査成果との検討を重ねていくことによって、古墳時代から奈良・平安時代にかけての女堀川低地域の集落の様相が明らかになっていくものと思われる。

引用・参考文献

児玉町（1993）『児玉町史』自然編

本庄市（1986）『本庄市史』通史編

恋河内昭彦（2005）『後張遺跡Ⅲ－C地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書 第20集

恋河内昭彦（1993）『川越田遺跡Ⅱ（B・C地点の調査）』児玉町遺跡調査会報告書 第5集

高林真人（2010）『後張遺跡Ⅳ－D地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書 第35集

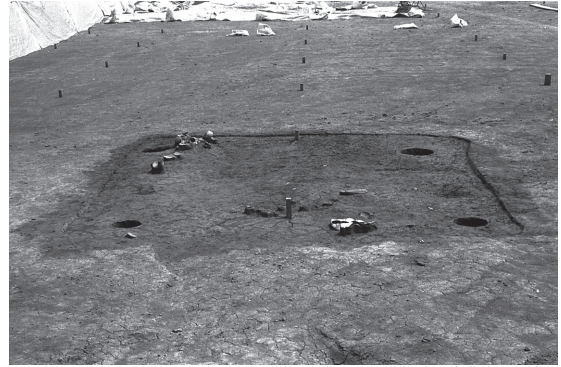
増田逸朗・立石盛詞ほか（1982）『後張Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集

増田逸朗・立石盛詞ほか（1983）『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集

松本完・大熊季広（2009）『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡－本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2－』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第13集



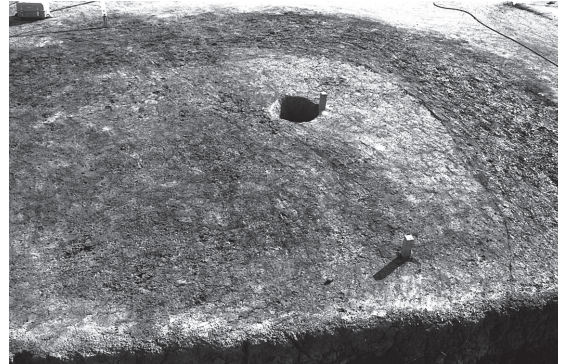
第240号住居跡（北西から）



第241号住居跡（南から）



第242・第244号住居跡（北東から）



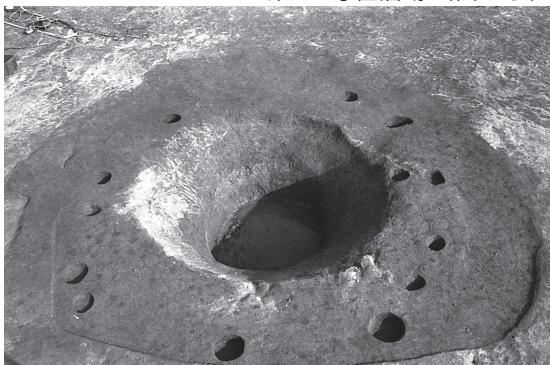
第243号住居跡（西から）



第245号住居跡（西から）



第1号掘立柱建物跡（北西から）



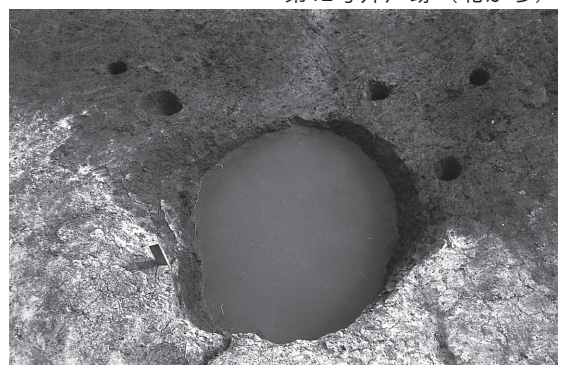
第11号井戸跡（西から）



第12号井戸跡（北から）

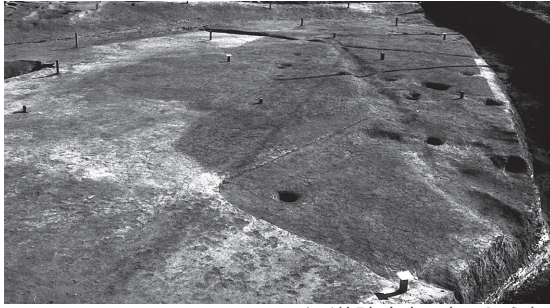


第13号井戸跡（西から）



第14号井戸跡（北から）

写真図版 2



河道跡南部 (西から)



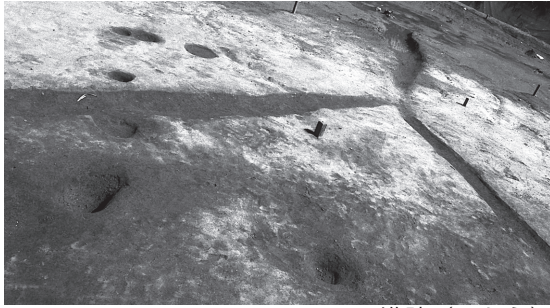
河道跡残土部 (東から)



河道跡遺物出土状況① (北から)



河道跡遺物出土状況② (南から)



E-1・2号溝跡 (西から)



E-3~9号溝跡 (西から)

第 240 号住居跡



第 241 号住居跡



第 242 号住居跡



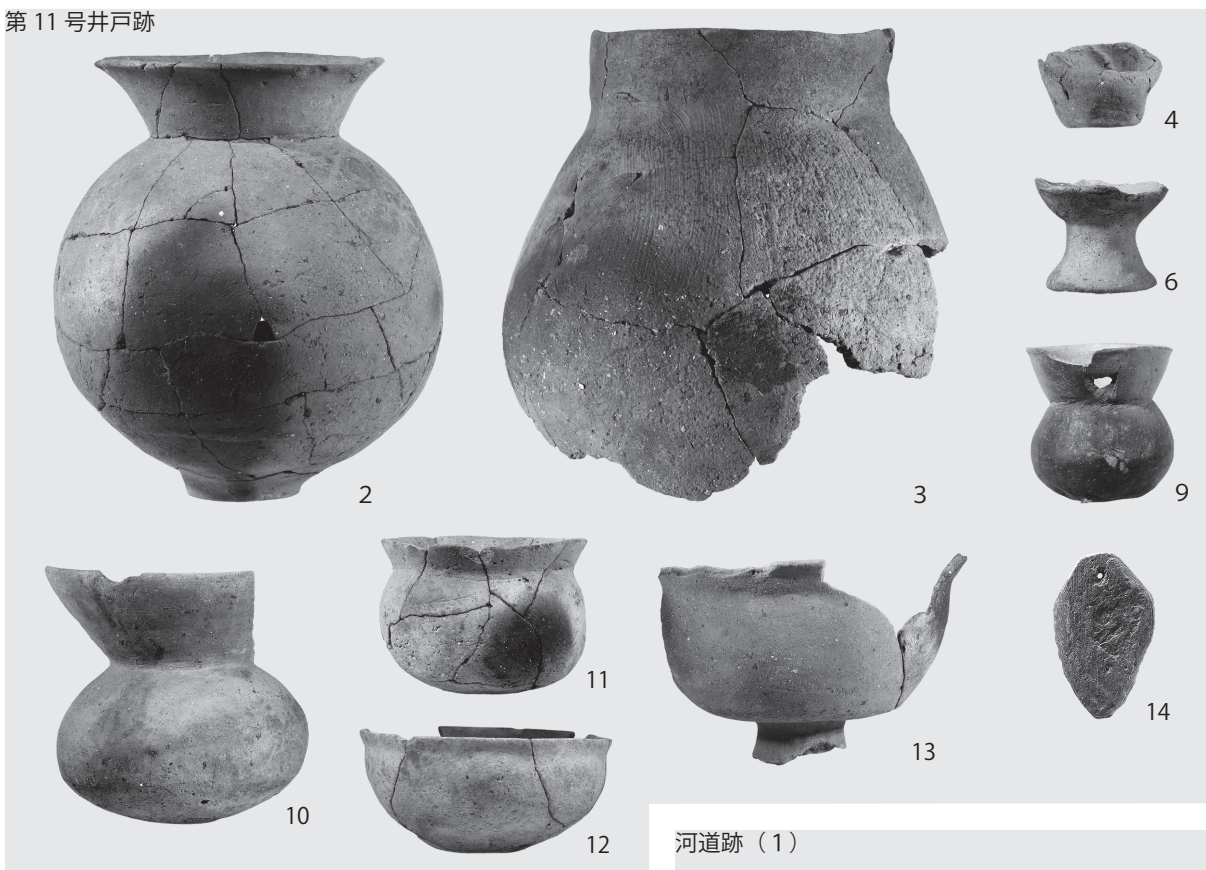
第 244 号住居跡



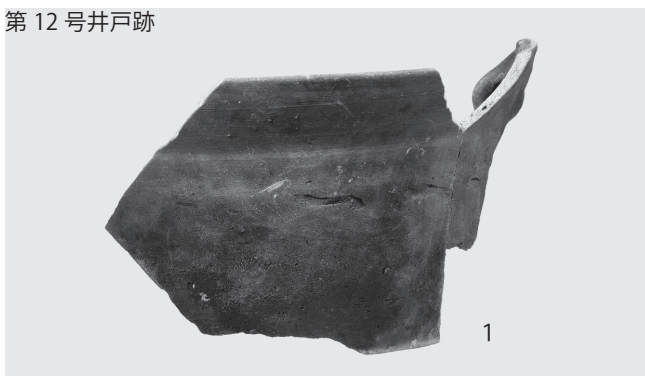
第 245 号住居跡



第 11 号井戸跡



第 12 号井戸跡



第 13 号井戸跡



E-5 号溝跡

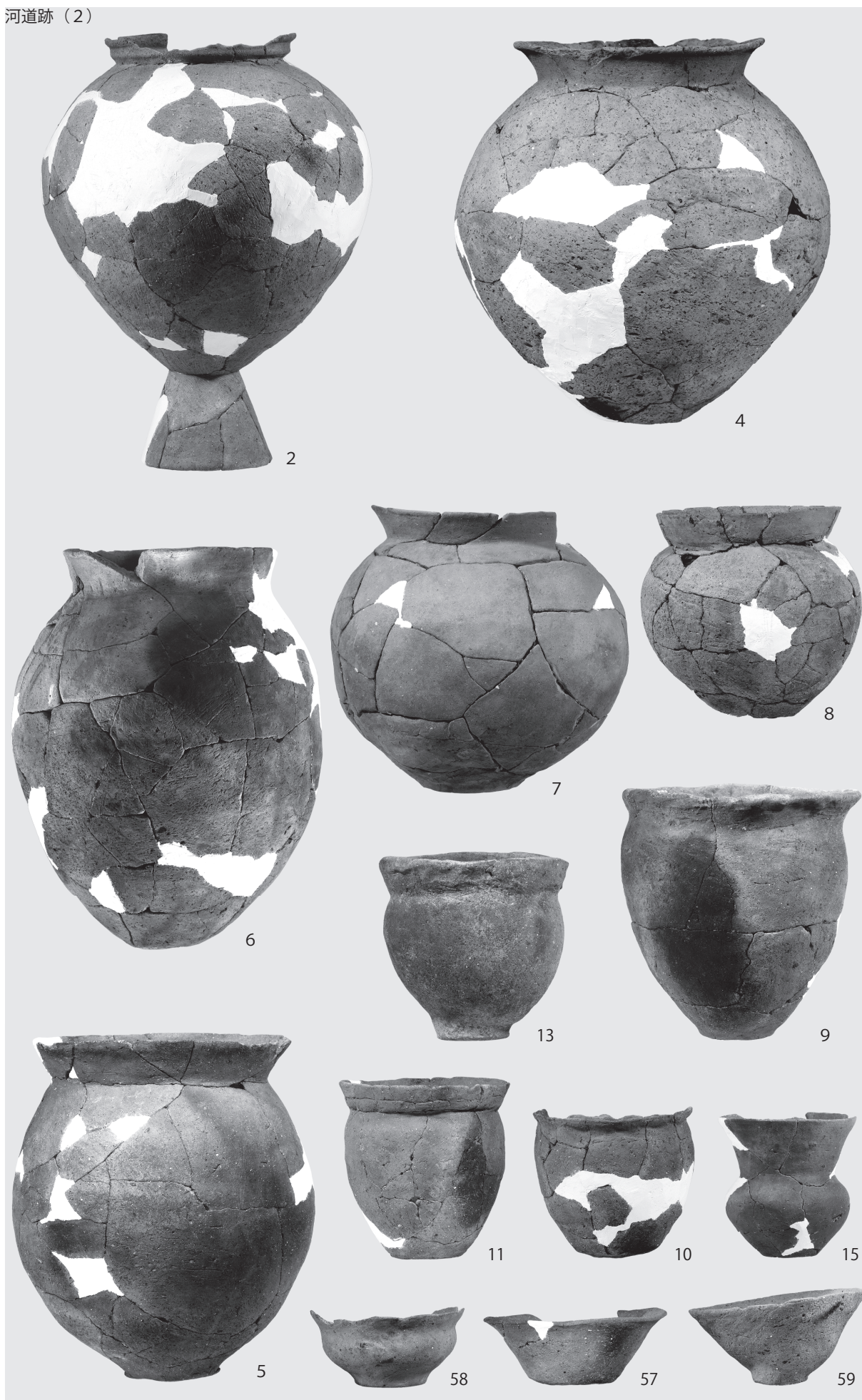


河道跡 (1)



写真図版4

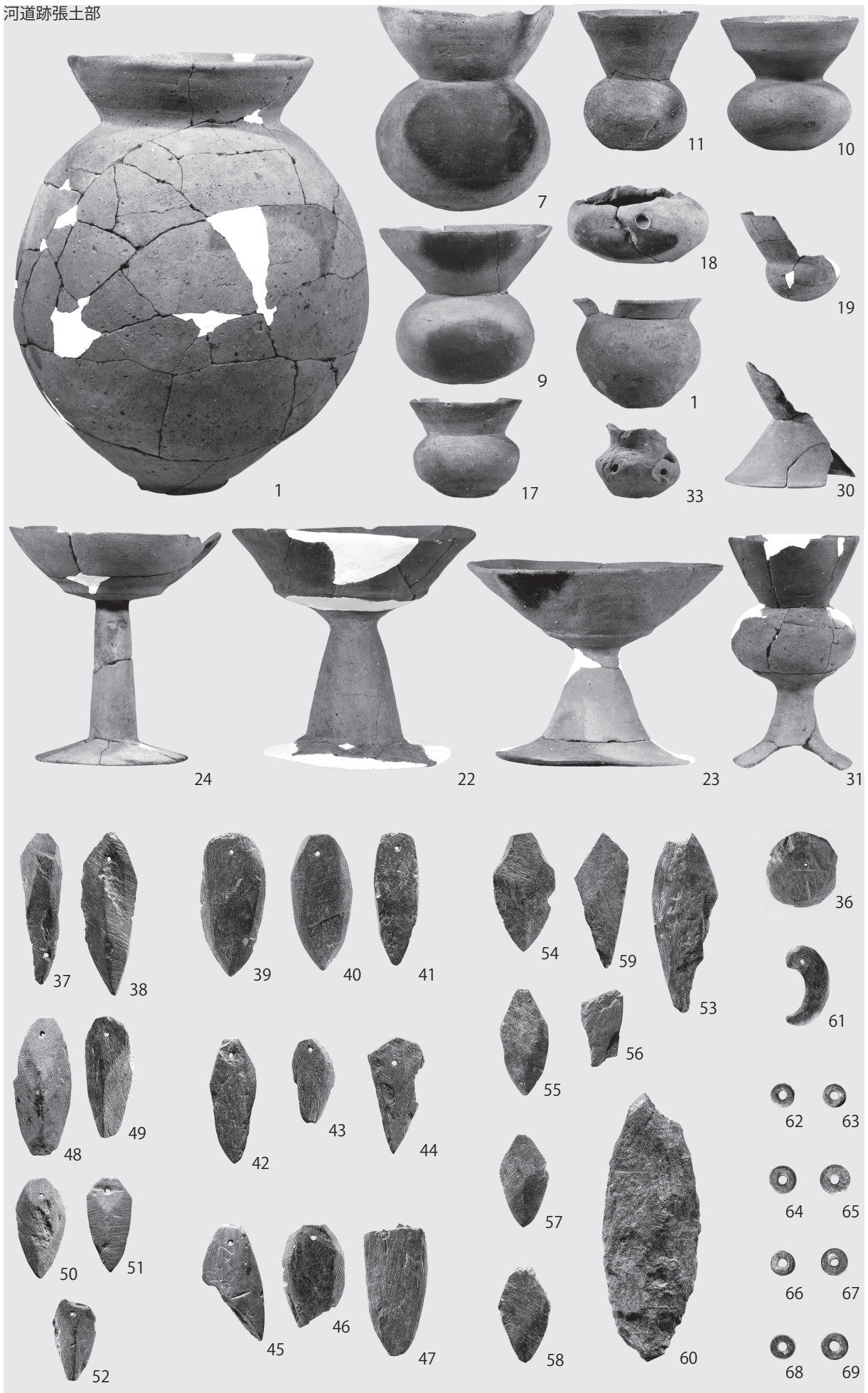
河道跡 (2)



河道跡 (3)



写真図版6
河道跡張土部



報告書抄録

フリガナ	ゴバリイセキV							
書名	後張遺跡V							
副書名	E地点の調査							
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第40集					
編著者	高林真人							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2011年(平成23年) 3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ゴバリイセキ 後張遺跡 (E地点)	ホンジョウシ コダマチョウ 本庄市 児玉町 シモアザミアザゴバリ 下浅見 字後張 148-4 ほか 148-4 他	112119	54-274	36° 13' 13"	139° 9' 50"	1989.04.09 ~ 1989.11.22	2,234㎡	ホテル 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
後張遺跡 (E地点)	集落	古墳時代	竪穴住居跡5 河道跡1		土師器・石製品・土製品			
	集落	奈良・平安	溝跡6		土師器・須恵器			
	集落	中・近世	井戸跡1 溝跡3		土師器・内耳鍋			
	集落	不明	竪穴住居跡1 井戸跡3 掘立柱建物1		土師器			

本庄市遺跡調査会報告書第40集

後 張 遺 跡 V

— E地点の調査 —

平成23年3月31日 印刷

平成23年3月31日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／上毎印刷工業株式会社